

# グラスワンダー短編集

よたか(ほし)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

グラスワンダーの短編です。

需要があるかはわかりませんが、時たま更新いたします。

pixiv様にも投稿しています。

## 目次

グラスワンダー、オトナとコドモ	1
隠した恋慕を余裕で見破られるグラスワンダー	5
トレーナー室から他のウマ娘のニオイがして掛かるグラスの話	14
グラスワンダー、とある男との日常	25
グラスがあの人を想う話	37
目移りを絶対に許してくれないグラスワンダー	44
グラスワンダーの天気予報	55
グラスワンダーと蠱惑の抹茶ラテ（愛：硬め濃いめ多め）	63
グラスワンダー、盛大にのろける。尚、自爆済み。	76
数年かけてようやくトレーナーを手に入れたグラスワンダー	83
耳の付け根を嗅がれて悶えるグラスワンダー	101
季節外れの爆弾低気圧を伴ってトレーナーに迫るグラスワンダー（湿度◎）	111
花言葉を知らずにたんぽぽを贈り、わたわたするグラスワンダー	126
手の温もりをはんぶんこするグラスワンダー	138
吐息で想いを伝える遊びに興じるグラスワンダー	148
先輩のお弁当に入っている緑のギザギザ	153
一緒に過ごす時間を大切にしたいグラスワンダー	164
「大人になれば分かる」とはぐらかし続けたトレーナーの末路	170
トレーナーに髪を結ばせるグラスワンダー	180
勘違いグラスワンダー	190

ひどい女、グラスワンダー

197

グラスワンダーの足は、小さくてかわいい。

202

けっこう大きめの鼻歌をがつつり聞かれていたグラスワンダーと、  
レースの映像を何度も巻き戻す羽目になるグラスワンダー

210

乾いたトレーナーの唇にリップを塗ってあげる、優しいグラスワン  
ダー

215

自分の名前を書いてもらうことにはまったグラスワンダー

221

## グラスワンダー、オトナとコドモ

「グラスちゃんって、とっても大人っぽいよね!!」

自らの友人が無邪気にそう言い放つを見て、栗毛の少女はふんわりと笑った。

初夏を少し過ぎた、生暖かく、むわりとした教室。

ねっとり絡みつくような空気の中でも、その少女は涼しげであった。

頬に手をあて、優雅にあらあらと、花のように微笑む少女。

その様子は確かに、大人びているようであった。

彼女は大和撫子を目指していた。

穏やかで、清楚で。

もつとも彼女自身、教室の隅で暑さに首を垂れている花瓶の花よりは凛としているという自信はあったが。

「ありがとうございます。日々の精進の成果として受け取らせていただきますね。」

少女は変わらず、ふんわりとした笑みを浮かべたまま謝辞を述べる。

その様子はまさに大和撫子で、まるで、大人であった。



「トレーナーさん、私って、大人っぽいですか?」

トレーナーと呼ばれた男は、自らの担当から発された言葉に面喰い、しばし吟味した。

目の前にいるのは、いつも通りの笑みを浮かべてしつぽをふんわりと揺らす少女。

男は、彼女が意味のない質問をするような子ではないことを承知していた。

故に、この質問も彼女なりに何か意図があるのだろう。

「ふむ…。」

一つ息を吐く間、やはり男は考えた。

今日のトレーニングはいつも通り、有意義で彼女も真剣に取り組んでいた。

ミーティングも同様。

そして彼女が寮に戻るまでの、この落ち着いた時間。

これもまた、いつも通りであった。

「ああ、グラスはとつても大人っぽいと思うよ。」

故に男は深く考えすぎず、自らが思った通りのことを述べることにした。

もちろん、軽率とは違う。

男は常日頃から彼女を大人びた子であると感じていたし、少なくとも彼にとつては“大人っぽい”とは誉め言葉であったのだから。

「……。そう、ですか。」

少女は一瞬間を置き、変わらぬ笑顔でそう答えた。

二人の間には梅雨の、じんわりと生暖かい空気が流れた。

男は、自らの粟立つ肌に流れる冷たい汗をようやく実感した。

「…なあ、グラス…」

「失礼します。」

気まずさに耐えきれなかったのか、男が口を開こうとしたまさにその時。

ねっとりへばりつく空気を切り裂いて、扉が開かれた。

そこには案の定、緑の学園秘書、駿川たづながましましていた。

彼女もまた淑女然とした笑みを崩さず、香水の幽香をふわりと振りまいて男の前に新鮮な風を運んだ。

男は突如現れた一陣の風に思わず相好を崩す。

一方の少女はなおも、造花のような笑顔を張り付けたままであった。

「お邪魔して申し訳ありません。トレーナーさん、本日の夜のことなので…」

男は少女に一言断りを入れて、女と今夜の予定について話し合っている。

生徒の前であるし、そもそもいかがわしいものではない。

男と女はたまに、酒を交わしながらウマ娘について語らう仲であったから。

「……ありがとうございます。では、またこの後。失礼しました。」  
少女が気が付くと既に話は終わり、目の前の秘書は既に扉を閉め終わっていた。

トレーナー室には再び、梅雨の粘着質な空気が立ち込めた。  
ただ先ほどと一つ違うのは、その空気の中に確かに漂う香水の潮流か。

その流れがふわりと、少女の固い表情を崩した。

男は突如として湧いた流れによって先ほどの流れを忘れていたようであった。

何事もなかったかのようにソファにかけ、変わらず書類を読みふけている。

よって少女は、流れを引き戻すことにした。

「トレーナーさん。私って、大人ですか？」

「え？ああ、もちろんグラスは大人っぽいよ。」

一層立ち込めた生暖かい空気の中、一筋の風が書類と男を吹き飛ばした。

「え……と、グラス？」

男は困惑して少女を見つめる。

ソファに男の腕を縫い付けて彼を見下ろす彼女はやはり、笑みを崩さなかった。

生暖かい風が二人を包む。

男は再び自らを流れる汗に気が付いたが、それはもはや無意味であった。

ねっとりとした空気の中、ふわりと香る幽香。

ただそれは、先ほど扉によってもたらされたものよりもずっと甘く、周囲の空気よりもずっとべたべたとしていた。

甘い香りを振りまきながら、少女はなおも笑みを浮かべて続ける。  
「トレーナーさん、私はもう、大人なんですよ?」

甘い香りを体の隅々に行き渡らせながらようやくやく、男は栗毛の愛バ  
の変化に気が付いた。

見るに、彼女はあつそうであつた。

どんなに暑くても常に大和撫子の如く凜として、涼しげに大人びて  
いる彼女は今まさに、熱に浮かされて大きく息を吐いていた。

むわりとして締め切られたトレーナー室で、やはり彼女はあつそう  
であつた。

「トレーナーさん。私はもう大人なんですよ。」

むせかえるように甘く、うだるようにあつい部屋の中で。

瓶に生けられた花は耐えきれなかったのか、今、首を垂れた。

## 隠した恋慕を余裕で見破られるグラスワンダー

「夕日がきれいですね〜」

ある日のトレーニング後。

夕日が照らすオレンジ色のターフの上で私はトレーナーさんにそう告げました。

もちろん、平静を保って。

私の気持ちは太陽よりも燃え上がって、心臓はどこぞの委員長よりもバクバクと言っています、他意はありません。

だって、トレーニング後なのですから。

だから顔が赤くても、きつとそれはトレーニングのせいなのです。

「…そうだねえ。いつまでも、沈まなければいいのにねえ。」

彼は私に言われて夕日を見やると、のんびりとした口調でそう言いました。

“安心してください、沈むことなどあり得ませんよ。”

もちろんそんなことは言いません。

今はただ、のほほんと夕日を見つめる彼とこの気持ちの間で揺蕩っているだけでよいのです。

「いつまでも見ていたいくらいにきれいだね。」

ふいにこちらを見てそんなことをたまう彼にどきりします。

茜色をバツクに、いつにもまして魅力的な彼。

夕日を受けてきらりと光るその瞳は、私の気持ちなぞすべて見透かされているのではないかと錯覚してしまいそうです。

先ほどまでは落ち着いていた——お茶を点てるときは微動だにしない——この耳がいきなり、ぴんと立ってしまったのを自覚しました。

…落ち着きましょう。

息を吸って、吐いて。

大丈夫、この気持ちはまだ大切に秘められているのですから…

とはいっても、心臓に悪いのに変わりはありませんので。

私はぶんぶん揺れるしっぽを無視してとりあえず、“ええ、そう

ですね。”とだけ返しました。

◇◇◇

このいけない、背徳的な行為に手を染めたのはいつからでしたか。きつかけは間違いなくあの日です。

彼とゲームセンターへ遊びに行ったあの日。

二人とも思ったよりも熱中してしまい、帰り道はもう月光に照らされてしまいました。

薄明るいぼんやりとした夜道、先ほどのゲームの感想を話ながらゆっくりと家路についていた時急に、彼が言い放ったのです。

「あーみてみてグラス！月がとつてもきれいだよ!!」

ええ、それはもちろん驚きましたとも。

私だって少女の端くれ、その言葉がどんな意味を持つかぐらい知っています。

しかしトレーナーさんを見ると他意はなく、気づいたからつい言ってしまったような感じです。

彼もまた“もののあはれ”を理解する方ですから、風情のある光景を見て居ても立っても居られなくなったのでしよう。

その気持ちを共有してくださるのはとっても嬉しいです。

ですが、一瞬期待してしまった私の、月のうさぎよりも高く跳ねたこの気持ちを返してほしいとも思います。

邪な気持ちを振り払うように大きくしっぽを振り、こほんと咳ばらいを一つ。

「…トレーナーさん、確かにとつても美しい月ですが、その、表現には気を付けたほうがよろしいかと…」

「え？あ、ああ?!?!えーと、ぐらす、これはその、なんとというか…」

「ええ、大丈夫ですよ。他の方には言わないようにしてくださいね。」

「……はい、気を付けます…」

今思い返すと私もなかなか際どいことを言っていますが、それ以上に彼があたふたしていたので問題ありません。

まあ、あんなにも取り乱す彼を見たのは初めてだったので、一方的にどきめかされた意趣返しはできたのですが。

それ以上に私の胸をついたことがありました。

それは一種の優越感というか満足感というか、武者震いというかスリルというか。

自分の秘めた想いを悟らせないように伝えることに形容しがたい痺れを感じてしまったのです。

これまでは正直、危険を冒してまでスリルを味わおうとする方々の気持ちがよくわからなかったのですが、あの日私もその虜になってしまったのです。

その日の夜は結局興奮冷めやらず心が跳ね回り、薄明に白む月を眺めることになってしまいました。

その日以降。

私は事あるごとにその“遊び”に彼を付き合わせました。

まあその実、私が勝手に藪をつついていていただけなのですが。

学園のトレーナーは鈍い方——某ウマドルのトレーナーさんのように——が多いですが、彼はそこまで鈍いというわけではありませんので、いつ蛇が出てくるかはわかりません。

告白の婉曲なんて「月がきれいですね」くらいしか知らないであろう彼ですが、調べればすぐに出てきてしまうことなのでちよつとしたことではばれてしまうかもしれません。

そしてばれてしまえば、この関係にもひびが入ってしまうでしょう。

ですが、そのスリルとこの気持ちを彼にぶつけられるという魅力には勝つことができません。

雨でトレーニングができなくなった日には

“雨がやみませんね。”と。

虹が見えた日には

“虹がきれいですね。”と。

ぽかぽかと陽気な午後には

“ 暖かいですね。 ” と。  
太陽照り付ける砂浜の夏合宿では  
“ 海がきれいですね。 ” と。  
星降る夜には  
“ 星がきれいですね。 ” と。  
木枯らしが吹く街角では  
“ 今日は少し肌寒いですね。 ” と。  
トレーニングが明日もある日は  
“ 明日は晴れますか。 ” と。

とまあこんな感じできにかく、彼に秘めた思いをぶつけ続けていたのです。  
そのたびに私は “ ばれやしないか ” というハラハラ、 “ 言っ  
てしまった ” というドキドキを味わっていました。

もちろん、意識せずに聞けばただの状況説明や疑問ですから。  
それにトレーナーさんは私がそう言ったことを言っただけのものほんと、「そうだねえ。」とか、「どうだろうねえ。」と返すだけでしたから。  
私はきつと、エスカレートしていったのでしよう。

ええ、スリルというものはだんだんと強度を上げないと感じなくなつてゆくものですから。

それはトレーニングというよりはむしろ、依存性の高い薬物のようでした。

ですから私は、私が気持ちを真に伝える日が先か、それとも彼が私の気持ちに気づいてしまうのが先かというチキンレースを走っていたのです。



そんな日々が続いたある日でした。

その日、私の機嫌はちよっぴり、ほんのちよっぴり悪かったのです。それはトレーナーさんが誰ととは言いませんが温泉の下見に行っ

たり朝帰りしたり、他のウマ娘に現を抜かしていたからかもしれないし、そうでないかもしれない。

とにかく、私はとつても機嫌が悪かったのです。

ですから、そのストレスを発散するために。

私がいつもより過激なチャレンジに挑んでも。

それは、仕方のないことだったので。

あれはトレーニングが終わって、トレーナー室で彼と過ごしている時でした。

その梅雨明けの日は微妙に曇っていて、夕日がきれいとも暖かいとも寒いともいえない微妙な状況でした。

ですから、私はいつものルーチンをすることができずに余計むくれていました。

いつもであればトレーニング後は仕事する彼と他愛のないことを話しながら待ち、一緒に帰るのが私たちの日常だったのですが。

その日の私はどうやって彼にこのモヤモヤをぶつけてやろうかと考えていたところでしたから、話すわけでもなく何かをするでもなくじっと、彼がパソコンをたたく音に耳を傾けていました。

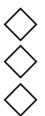
彼はそんな私を不思議がっていました。悩みが深刻でないことを悟ったのでしよう。

私に理由を聞かずいつも通りにパソコンをたたき、外が暗くなってきたところに「そろそろ帰ろうか。」と声をかけたのです。

もちろん、彼が気付いたように私の悩みは深刻ではありませんから、彼の対応は間違いでないでしょう。

しかし乙女心とは複雑怪奇で、そうわかかっていても声をかけてくれないのは不満なのです。

ですから私は、どうにかして帰り道に彼をぎゃふんと言わせようと躍起でした。



帰り道。

既に梅雨は明けていて空気はさっぱりと。

それでいて涼しい風が吹き抜ける、とても過ごしやすい夜でした。夕方立ち込めていた雲はすっかり消え去って。

頭上には、はち切れんばかりにまんまるなお月様。

そう、とつてもきれいな、お月様。

「…」

にやりとした私は、やめておけばいいのに、彼に直球勝負を挑むことを選択したのです。

◇◇◇

「トレーナーさん。」

「ん？なんだい、グラス？」

「今日は、とつても、とつても月がきれいですね。」  
やった。

私はその時、勝利を確信していました。

だってあの日、あんなにも慌てふためいていた彼ですから。

きつと今日も盛大にわたわたくししてくれるのでしよう。

そしたら私は、“何を想像していらっしやるのですか”。私はただ、月がきれいと言っただけなのに。“とからかってやるのだ。

そうすればこの溜まりに溜まった鬱憤も、今日の夜空のようにすっきり晴れるだろう。

そう、思っていたのです。

「グラス、それって…」

「あら〜トレーナーさん、一体何を…」

「だったら僕、死んでもいいかな。」

「…え？」

「ん？だって、先に仕掛けたのはグラスのほうだろうか？それに、あの日の雨はやまないでほしかったし、あの虹を君と見られたのは奇跡だったね。」

「え？…あ、あの…」

「あと、あの日は君と一緒にだから確かに暖かったし、ずっと前からきれいだったあの海を君と一緒に泳ぎたかった。」

「と、トレーナーさん！その…」

「それにあの日見た夜空に浮かぶ星の名を僕は知っていたし、寒いあの日は君の手のぬくもりが恋しかったよ。ちなみに、この先もずっと晴れで、夜は月がきれいらしいよ。」

「あ…あう…も、もうやめて…」

「それに今、僕はとっても幸せかな。」

「うう…あう……」

まさかの反撃を食らった私は、顔を真っ赤にしてごによごによつづやくことしかできませんでした。

それに…

いままで私がばれていないと思ったあの遊び。

それは全部、彼に筒抜けだったようです…。

私は羞恥のあまり顔を手で覆い、しゃがみこみしつぽで自らの体をくるりと巻き込みました。

きつと今、私の顔は隠し切れないほど赤く、栗色の耳も真っ赤に染められているのでしょう。

そして今きつと、彼は満面の笑みで私を眺めているのです。

「も、もうやめてください…いつそターフで散らせてください…」

そう懇願しますが。

「だめだよグラス。ほら、隠してないでその顔を見せて。」

「やつ…やだ…み、見ないでください…！」

彼は私の手を引き、多少強引に私を立たせました。

もちろんそんな状況で彼を直視できるはずもなく。

私は遮るものがなくなつた顔を下に向けるほかありませんでした。

「うん。やっぱりグラスと見る月が一番だね！」

彼は屈託なく言うのと、いまだしり込みする私の手を繋いで歩き始めました。

もちろん、力は私の方が上です。

でも、なぜか引かれるこの手に逆らうことはできませんでした。



短い短い帰り道はあっという間で。

だから、学生寮とトレーナー寮の分かれ道に来ても、私の顔の赤みは引けていませんでした。

「じゃあグラス、楽しい夜をありがとう。おやすみ。」

そういうと、彼はいつも通り右へ歩みを進めようとしています。でも。

「グラス…？」

そのですね。

その時私はとつても寒くて。

だから、彼の手のぬくもりを離すことができなくて。

だから、その。

「トレーナーさん…今わたし、とつても寒いんです。温めて、くれませんか？」

…私は真つ赤な顔で、彼よりも熱を持った手で彼を引きとめました。

「…」

私はぎゅつと目をつぶっていました。

だからか、いつもよりずっとよく周囲の音が聞こえます。

ただ、聞こえてくるのは自分の鼓動と、彼の息遣いだけでした。

彼は何も言いませんでしたが、私の手を離すことはしませんでした。

ですから、二つの影は右に消えていくわけです。

その後のことは何も言いませんが、ただ一つ言えるのは。

彼と一緒になら。

燃え尽きたように真っ白な夜明けの月もまた、きれいだと思えるという事です。

## トレーナー室から他のウマ娘の二オイがして掛かる グラスの話

一、

二週間。

それは果たして、どれくらいの長さであろうか。

14日? 336時間? 20160分? 1209600秒? 表現の仕方は様々あるだろうが、栗色のしっぽをゆらゆらさせながら空港を歩く少女にとって、この二週間は途方もない時間であった。

不思議なものだと少女は思った。

いつも——朝起きて、学園へ行き、授業を受けて、トレーニングに励む。——であれば、二週間など本当にあつという間。

光陰矢の如し? 一朝一夕?

ともかく、いつもの二週間はいつの間にか過ぎ去っていて、気が付いたら月が半分終わっている。

その月に彼と顔を合わせた日数がいつの間にか両の指を足すよりも多くなっていることに驚き、“もっと時間がゆっくりであればよいのに”と思うのがいつものこと。

“長かった。”

ひとときわ大きくしっぽを振った少女は、この二週間——帰省先のアメリカでの生活——を振り返った。

誤解を招かぬよう説明するが、彼女は帰省が憂鬱だったわけではない。

彼女は父母のことが大好きで尊敬もしているし、ちよつとだけやんちゃなかわいいかわいい妹に会うのも楽しみであった。

普段は大和撫子然として落ち着いているが、彼女がついこの間まで中等部であったことを忘れてはいけない。

大人びている彼女だつてまだまだコドモ。

遠く離れた異国の地。

故郷を思い涙で枕を濡らす——ことはなかつたが、彼女だって幼気な乙女であり、野武士などではない。

だから、彼女はこの度の帰省を心待ちにしていた。

帰省の一週間前には既に荷造りが終わっていた。

少女のライバルである同室の怪鳥がそう言うなら、間違いない。

学業もいつも以上に身が入っていた。

少女にいつも勉強を教わっている総大将がそう言うなら、間違いない。

トレーニングも、いつも以上に気合が入っていた。

彼女とともに三年以上の月日を過ごした男がそう言うのだからきつと、間違いない。

やはり、少女は帰省を楽しむにしていた。

ところで、楽しい時間というのはあつという間である。

では、彼女がアメリカに滞在した二週間はあつという間に過ぎるはずである。

では、なぜ？

二週間と少し時間をさかのぼり、その答えを見ていこう。

二、

少女は、目に見えて上機嫌であつた。

荷づくりは昨夜済ませてしまったらしい。

ちよつとばかり気が早いかもしれないが、出発直前になって焦るなんて大和撫子らしからぬ無様は晒したくなかつたので、少女は早めの準備を心掛けた。

トレーナーの男はそんな彼女の年相応のふるまいを見て顔をほころばせた。

普段はしつかりしてどちらが年長者かわからないくらい大人びている彼女が、嬉しそうに耳をぴこぴこさせながら

「お土産は何にしましょうか？」

とか、

「あの子と走るのも楽しみです！」

とか言うものだから、男は「まるで娘でもできたようだ」と思いなから鈴を転がすような彼女の声に耳を傾けていた。

それに、

「楽しみです、トレーナーさん！」

と、まるで自分も一緒に行くかのような言い方をするものだから、男は思わず愛しい担当の頭を撫でてしまう。

彼女らしからぬ言い間違いも、きつと楽しみが過ぎてしまったが故であろう。

それに、いちいちその程度の言い間違いを指摘するほど男は狭量ではないし、何よりこんなうれしそうな愛バに水を差すことなどできない。

耳を左右によけてくすぐったそうにするも撫でられるがままの担当に

「ああ、とつても楽しみですだね。」

とだけ答えた男は、一層笑みを深めた少女をもう一度優しくなでた。

### 三、

さて、グラスワンダーがアメリカへ発つ日になったわけであるが、なにやら当の少女は様子がおかしい。

大きめのキャリーバッグを引いた少女と、彼女に向き合う何も持っていない男。

「そもそも担当バの帰省を見送るために空港まで来る男の方がおかしいのでは？」という至極もつともなご意見もあるだろうが、それは一度置いておこう。

ともかく、少女は普段のおしとやかなたたずまいではなく、落ち着

きを欠いた様子であった。

それはまるで、試験会場に到着したはいいものの受験票がないことに気が付いたような、そういった様子であった。

彼女は今更、何に気が付いたのであろうか？

仮に搭乗券などを忘れていようものなら、彼女は同室の怪鳥に「頭タンポポ畑デース！」とでも小ばかにされてしまうことだろう。

え？今日の夕食は焼き鳥ですか、そうですか。

閑話休題。

だが、少女がキャリーバッグをひっくり返す姿は見られない。

少女は目の前の男をじっと見つめて冷や汗を流している。

一体どうしたのだろう。

「…トレーナーさん。つかぬことを伺いますが、お荷物などは…？」

少女は一縷の望みにすがり、男に尋ねる。

「え？ああ、車の中だよ。」

「…そう、ですよね。…ちなみに、この後のご予定は…？」

少女はおそらくすべてを察した——というより、今の今まで自分がとんでもなく恥ずかしい勘違いをしていたことに気がついた——のだが、それを認めたくないがために質問を続ける。

「ん〜。グラスを見送ったら、とりあえずご飯でも食べて、その後は学園に戻って仕事でもするかな。」

少女は頷れた。

そりやそうである。

いくら専属契約を結んでいる間柄とはいえ、トレーナーが担当の実家——しかも国外——についていくわけがあるはずがない。

え？ドイツ？ああ、いい国ですよ、自然も豊かで。

そう。

普通、あるはずがないのである。

普通に考えれば——というか多少頭のねじが飛んでいても——トレーナーが帰省についてこないことぐらいは分かってほしいところだが、少女は久しぶりの帰省で掛かり気味になっていたようである。

「ど、どうしたグラス!?!具合でも悪いのか?!?!」

「…いえ、ちよつと先が思いやられるだけです…」

「僕つてそんな信用ない？確かに朝ごはんは抜いたけど…」

微妙にかみ合っていない二人の様子はもはや喜劇ですらあるが、間もなく搭乗の時間である。

少女はとぼとぼと、帰省を楽しそうに待ちわびていた様子が嘘のような後ろ姿を男に見せてアメリカへ飛んだ。

…きつと機内では、綿毛を飛ばしつくしたタンポポのようによぼくれる少女が賢さトレーニングに勤しんでいることだろう。

#### 四、

というのが、ちよつと二週間前の出来事である。

たくさんのお土産を携えた少女は、期待に胸膨らませるようにもう一度、大きくしつぽを揺らした。

移動で疲れているのは事実で、寮に戻って寝たいところではあるが、今の彼女にとっては必要なのは肉体の休息ではなかった。

「…お土産は、できるだけ早く渡した方がいいですもんね。」

少女は手にしたクツキーを見やり、そんなことをつぶやいた。

そもそもこのクツキーは男への土産ではないが。

…そうですね、すみません。クツキーは鮮度が命だと思えます…エールコンドルパサーもそう言っています。

「…それに、体調が問題ないことも伝えなければなりませんし、トレーニングの予定も話し合わないといけませんから。」

自分にそう言い聞かせ、少女は歩く。

昨日の夜もトレーナーとテレビ電話をつないで小一時間は話していたが。

…そうですね。すみません。ハウレンソウは大切だし、アスリートにとって体は資本なので元気な姿を見せてあげた方がトレーナーも安心すると思います、はい。エルもそう思うよね？

ともかく、少女は二週間ぶりに日本へ舞い戻った。

二週間ごときでは何も変わらない府中の街を、二週間という途方もない時間を耐え抜いた少女が歩く。

行先はもちろんトレセン学園、その中のある一室であった。

五、

グラスワンダーにとって、男はもはや生活の一部であった。

トレーニングは言わずもがな、お出かけや野点…とにかく、彼女の生活のいたるところに男は入り込んでいた。

だから、仕方ないのである。

二週間前にトレーナーが自分についてくるのは当たり前だと思い込んで一人落ち込んでいたウマ娘がいても、それはまったくもって仕方がないのである。

少女は赤くなった顔を少しでも冷やそうと、手で顔を扇いでいる。

「…日本の夏は本当に、蒸し暑いですから…」

誰に向かってか少女はそう言い訳しつつ、トレーナー室の前で身だしなみを整える。

いくら帰ってきたばかりとはいえ、だらしない姿を自らのパートナーに見せたくはなかった。

「…よし。」

自らの装いに満足したのか、少女は小さく気合を入れて昨日も電話した———というか、滞在中毎日電話していた———男が待つ部屋の扉を開けた。

六、

扉を開けた少女に飛び込んできたのは、いつも通りの、日常の匂い

——ではなく、嗅いだこともないようなニオイであった。

「は？」

“ ただいま帰りました。 ”

男に、真つ先にそう言おうと考えていた少女の口は、たった一文字しか発さなかった。

いや、意図せずその一文字を発してしまった。

温かく柔らかな、帰りを告げる言葉ではない。

冷たく敵意すら含む、鋭利な刃物のような一文字が可憐な少女の口から滑り落ちた。

「お？ おお！！お帰り、グラス。今日帰るとは聞いていたけど、まさかここに立ち寄るとは思っていなかったよ。だからごめん、今からお茶準備するね〜」

だが、男はそんな少女の様子に気が付かない。

少女が発する冷気がクーラーの風で阻まれたのか、はたまた少女が疲れ故に言葉を発さないとでも思っているのか。

「……」

少女はお茶を淹れる男をよそに、しきりに鼻を動かす。

誰だ。

——甘い匂いだ。

——おそらくは、自分以外の若いウマ娘。

何故だ。

——かなり強くニオイが残っている。

——数分いただけではこんなニオイはしない。

——おそらくは数日。あるいは、毎日。

「ふうー……」

少女は大きく、大きく息を吐いた。

まるで今取り込んだ空気をすべて吐き出すように。

そして、上機嫌に茶を淹れる男を見やった。

すたすた。

「疲れてないかい？ソファにでも座ってゆっくりしていいよ。」

あの、ひとときわニオイを発するソファにだろうか。

「最近、茶葉を貰ってき。いつもは緑茶だけど、たまにはグラスと違うお茶を飲むのもいいかなと思ってたんだ」

誰からももらったのですか。それ、二週間前にはありませんでしたね。

すたすた。

少女は、お茶を淹れている男の後ろへと歩みを進めた。

「トレーナーさん。」

「ん？どうしたの？座っていいよ？」

「この二週間、ずいぶんと忙しかったのではないですか？」

「あちゃ、やっぱりばれちゃう？通常の業務のほかに、せがまれて担当がいない子たちに指導してたんだよね。大変だったけど、有意義な時間だったよ。例えば、あの子の走りは今後のトレーニングに——」

——なるほどなるほど。そういうことだったのか。

少女は合点がいった。

もちろん彼女も、学園が常にトレーナー不足であることを知っている。

故に、担当が一時いなくなったトレーナーが契約を結べていないウマ娘に指導するのは非常に理にかなっている。

——だが、だからと言って。

少女は一度ソファに冷たい視線を送り、そして未だトレーニングについて語っている男へ戻した。

——少々、自覚が足りないのでしょうか。

「それはそれは、とてもお忙しかったのですね。でも、身だしなみには気を付けなくてはいいけませんよ。」

「え？」

「だってほら、襟元——」

「あ、よれてた？」

「いえ。——ほら、ネクタイがありませんよ。」

少女は手に持った小綺麗な箱を開け、中から真っ青なネクタイを取り出した。

「え？だっついていまクールビズ…」

「ほら、動かないでください、トレーナーさん。今、わたしが、締めてあげますから。」

「ちよ、あの、グラス？——ツ！」

「あら、動かないで、と。そう言ったでしよう？手元が狂ってしまいますから。ね？」

そういわれてしまつては。

男はただ、自分よりずいぶん小さい愛バがネクタイを締め終わるのを待つほかなかった。

しゆる——

しゆら——

しゆっ——。

「はい、できました♪」

ゆっくりとネクタイを締めた少女は、朗らかに笑いながら男に告げた。

きつめに締められたネクタイからは、否が応にも少女の匂いが漂う。

己の体をすべて、彼女に掌握されたように錯覚しながらも男は礼を述べようとする。

「あ、ありがとう。ぐら——」

「あら、私としたことが、すっかり忘れていました」

だが、男の謝辞は少女によつて遮られた。

少女は先ほどよりもずいぶん小さな箱から銀色に鈍く輝くものを取り出した。

それは、ただのネクタイピン。

「はい。これではつちりです。」

だが、少女にこれを、たった5cmしかない金属片をつけられた男は、形容しがたい寒気に襲われた。

「これ、お土産です。トレーナーさんに似合うものと思い、心を込めて選びましたので。つけていただけると嬉しいですよ♪」

「あ、ああ。とてもうれしいよ。ありがとう、グラス。」

「いえいえ。あ、お茶飲まれるんですよ？持っけていきますね。」

「あ、ありがとう。」

少女はいつも通り、落ち着いた様子でお茶を運び、ソファに腰かけた。男もそれに倣う。

「あ、そうだ。もう一つ、お土産があるんですよ。」

「え？」

「え？」

お茶に手を付けようとしたその時、ソファに浅く腰かけた少女がポケットから小さな瓶を取り出した。

「それは？」

「オーデコロンです。私のお気に入りの香りなのですが、どうでしょう。」

少女は瓶の蓋を開ける。

すると、やさしい花の香りがふわりと漂う。

男はこの匂いに覚えがあった。

「これ、グラスたまにつけてる？」

「あら。気付いていただけてうれしいです。トレーナーさんとお出かけするとき、つけていたりしますね。それだけでなく、床まき用にも使えるんですよ。」

ぷしゅ

ぷしゅ。

そう言うや否や、少女はソファ周辺の床に कोरोン を吹き付ける。

決して強いわけではないが、確かに立ち上る花の、少女の香り。

「…いい匂いだね。」

男がそういうと、少女はにっこりと微笑んで今度は深く、ソファに腰掛けた。

「使いかけになってしまい申し訳ありませんが、トレーナーさんに。」

「…ありがとう。使わせてもらおうよ…。」

「ええ。是非。」

——忘れずに、使ってくださいね。

二週間ぶりに二人がそろった、花の香りが立ち込める部屋の中で、居場所を取り戻した少女は確かに、そう言った。

## グラスワンダー、とある男との日常

一、

ご機嫌そうに揺れていた少女の耳は、部屋に入るとかわいそうなくらいしよげてしまった。

二つ提げた弁当の入った袋。

その二つが同時に空になることはなさそうであった。

机の上の簡素なメモから、目の前で眠っている男がどれほど疲れているか想像するのは難くなかった。

それでも、謝罪の言葉と埋め合わせは必ずするという一文は欠かさないあたりに男の律義さがうかがえる。

栗毛の少女は男への感謝の気持ちと男を責めたい気持ち、二律背反的な感情を抱えながら静かにそっと、男の向かいの小さめのソファに腰かけた。

「…。」

それもそのはずである。

このお昼ご飯の時間は、最近彼女がもつとも楽しみにしていることのひとつであった。

しかも今日は月曜日。

二日間のおあずけをくらい、週の中で最も憂鬱といってもよい月曜の午前を乗り切ったというのにこの仕打ちはあんまりであると、彼女は思った。

少女は目の前で寝息を立てる男に抗議の意味を込め、いつもとは逆の、一回り小さい弁当を開けた。

この様子だと、どうせ朝食も抜いているのだろう。

約束を反故にして自分の体を労わらない悪いトレーナーさんなんて、起きがけにたくさんのお昼ご飯を食べておなかいっぱいになってしまえばよいのだ、と彼女はかわいらしく頬を膨らませながら考えた。

「……。」

もくもくと弁当を食べながら、少女は男の寝顔を見つめていた。改めてみると、あどけなさの残る顔である。

少女はハートの形に並べられた卵焼きを箸でつまみながら考える。最も身近で、頼りになる大人といってもよい男。

しかしよく考えれば、彼と彼女の年は十も離れていなかった。

いや、自分と小学校入学前の子供と考えたら結構離れている？

まあ、十なんて誤差だろう。

年の差なんて関係ない。

今は頭一つと少し離れている身長だって、卒業までには十二センチメートルくらいの差になっているはずである、と少女は妄想した。

「……」

頭、ひとつ。

少女は認識した。

彼が眠っている大きめの――普段なら並んで昼食を食べている――ソファ。

彼の頭とソファの端まで、頭ひとつほどの隙間があることを認識した。

「……」

少女は無言で自分の臀部あたりを見下ろす。

いける……はず。

少女はちよつとしたプライドを胸に、小さめのソファを立った。

「……」

ギリギリ、であった。

男とソファの隙間に自らをねじ込んだ少女は、昼食を再開する。

もそもぞと動く男の彼の頭をむずがゆく感じながら、少女はいつもより小さめの弁当を食べ進める。

「……」

あまりにもむずがゆかったのか、「めっ！」と言わんばかりに、彼女の美しいしつぽが男の頭を撫ぜる。

……ぐらす……

「！」

すると、どんな夢を見ているのだろうか。

男は少女の名前を零した。

「…」

なぜり。

なぜり。

なぜり。

少女の栗毛の毛並みが揺れる。

撫でられるままの男はなんだか、微笑んでいるようであった。

「…♪」

ぱくり。

なぜり。

ぱくり。

なぜり。

手と尾を交互に動かす少女は、入室のときとはうってかわってご機嫌そうである。

嫌そうである。

しよげていた耳も、なんだかかさつきよりふわふわしているよう。

結局少女は、いつもより少ないはずの弁当をいつもよりもだいぶ遅く食べ終えた。

なお、予鈴の音で目を覚ました男は。

いないはずの少女をなぜかいつもよりずっと近くに感じながら、いつもより多めの弁当を食べ進めるのであった。

二、

放課後。

少女はトレーニングのために数刻前と同じ部屋を訪れていた。

今度は自らを迎えてくれた男に微笑みながら、少女は何気なく男の隣に腰掛ける。

「…」

「……………!!!」

不思議そうに、いや少し困惑して少女を見つめる男を逆に不思議に思った少女。

数瞬遅れて、彼女はいつも自分が男と向かい合わせに座っていたことを思い出した。

かわいそうなくらい顔を真っ赤にしてうつむく少女。

昼に食べたプチトマトよりも真っ赤な少女を見て、男はくすりと笑う。

抗議のつもりなのか、自分の足をぺちぺちする少女を、男はやさしく見守る。

そういえば。

男はアイスブレイクがてら、今日あった不思議なことを真っ赤な栗毛の彼女に伝える。

何でも、今日男とすれ違うウマ娘の少女たちは驚いたように男を二度見し、何やら歓声をあげて走り去っていくそう。

緑の秘書からは、「おあついですね。ほどほどに。」と言われる始末。陰口などではないだろうから嫌な気分はしないものの、兎にも角にも不思議であると。

君は何も反応しなかったけれど、今日の自分は何か変かい？

そう尋ねると。

少女はさつきよりもさらに顔を真っ赤にして、ぺちぺちしていたしっぽを引つ込めて抱きかかえてしまった。

ぷるぷると震える彼女を見てより謎を深める男。

だが、どんなに考えても分からぬものは分からぬ。

仕方ない、そう思つてトレーニングをする旨を伝え、未だ真っ赤な彼女の肩を優しく、ぽんぽんとたたく。

「?!?!?!」

すると彼女は声にならない悲鳴をあげ、机の上の弁当箱をひったくつて部屋から飛び出していつてしまった。

「…」

一人部屋に取り残された男は、どうしたものかと開けっ放しになった扉を見つめていた。

とりあえず。

彼女が練習を意味なくしなかったことはなかったもので、お茶でも淹れてゆっくりと待つことにした。

たまにはちよつといいお茶でも淹れて、彼女とのんびり話をするのも悪くない。

そう思ってお湯を沸かしていると、思ったより早く彼女らは戻ってきた。

にっこにこな同期4人に背中を押される彼女の顔は、まだ真っ赤で。

連れてきてくれた札に茶菓子でもどうかと勧めるも、4人は「お構いなく！」やら「ごゆっくり！」やら「頑張つて！」などと言い残し、慌ただしく去ってしまった。

残されたのは、戸棚をごそごそする男と、湯気を立てるお茶と、湯気が立ち上りそうなくらい真っ赤な少女であった。

空の弁当箱を持って立ち尽くす彼女に、男は。

粗茶ですが。

と言つて着席を勧めた。

少女はこくりとうなずいて、おずおずと腰を下ろす。

男の、隣に。

「…」

「…」

大切そうに弁当箱を抱きしめる少女は何も言葉を発さなかった。

「…」

「…」

夕日が差し込むトレーナー室で、男と少女はちよつといいお茶を静かに堪能した。

いたいけな、怪物というよりむしろ小動物のような少女のしつぽは、いつの間にか男の足を大切そうに抱きしめていた。

三、

「…」

栗毛の少女が、とあるお茶屋さんを一瞬ではあるがじっと見つめていたことを、男は見逃さなかった。

男と少女は買い出しに来ていた。

といつても、男に邪な考えは全くない。

というのも、この前一緒に昼食を食べることができなかった埋め合わせは何が良いかと、ちよつといいお茶が入った湯呑を持った彼女に尋ねたところ、消え入りそうな声で、

「…一緒に、お出かけがしたいです。……………トレーニング用品の買い出しの。」

と言われたのだ。

なるほど、非常に合理的である。

男はいつも、買い出しは基本的に一人で行っていたが、買ってきたものを使うのは彼女である。

余計な負担をかけないようにとこれまで誘うのがためらわれたが、一緒に行ってくれるというのならありがたい。

そういう意味を込めて、自分もグラスと一緒に買い物に行けてうれしいよ、と伝える。

すると、少女は赤みが引いていた顔を再び真っ赤にしてうつむいてしまった。

無意識なのか、彼女のしつぽは先ほどよりも力強く足に巻き付いている。

でも、いやだったなら無理はしないでね。別に一人でも問題はないから。

そう気を遣うと、しつぽで足をぺちんとはたかれてしまった。

「……………これからも、いっしょに、行きます。……………ずっと。」

というのが、今週の月曜日の話。

男と少女は買い物であらかた済ませ、なにかめぼしいものがないかとぶらぶら歩いているところであった。

そんな折、少女がお茶屋さんを見つけたのであった。

入ってみるか？

そう尋ねる男。

少女は数瞬ためらい、ゆっくりと首を横に振る。

というのも彼女、そろそろレースが近いのであった。

意志が強い彼女は、目の前の誘惑に屈さず、己を律したのである。

この年で、なんと立派なことか。

それを見た男は、目の前のかわいらしくいじらしい少女と何としてもお茶がしたくなった。

トレーナーとしては失格だと分かりつつ、男は少女の小さな手を引いて目の前の店に入る。

少女は戸惑っている様子であった。

「…」

席につき、無言で不安そうに男を見つめる少女。

大丈夫さ。最近、根を詰めてトレーニングしていたし。たまの休日、少しくらい羽を伸ばしていいんだよ。

そう言うも、少女はまだ納得したわけではなさそうである。

なかなか強情、いや、意志が強い。

だが、少女の視線はちらちらと、メニューと男の顔を行き来している。

いいんだよ、グラス。それに、仮に…こう、増えたとしても、それを何とかするのが僕らの役目さ。好きなのを頼みな。

すると少女は耳をへなへなとさせ、おもむろにメニューの左端を指差した。

「…」

「…」

カップル限定。

また、べたな。

そう思うも、また顔を真つ赤にしている少女——今週はよく見る——を追及するのはあまりにもかわいそうで。

男は店員を呼び、メニューの左下を指差してみせた。

おいしいかい。

そう尋ねると、少女はにつこり、とかわいらしく微笑み、首を縦に振った。

共犯だね。

男がそういうと少女は。

「……主犯は、トレーナーさんですよ。」

と、なんとも鋭い指摘をした。

いやはやまつたく、その通り。

苦笑しながら頭をかく男と、幸せそうにお茶を飲む少女。

「……そんな悪いトレーナーさんには、罰が必要だと思っんです。」

ほんわかした茶屋の中で突然、滅多でもないことを言う少女。

男が驚いていると少女は、緊張した様子で判決を下す。

「……この後、少し走ってもよいですか？」

不安そうに首をかしげる少女。

そんな二人の様子を目ざとく、店員が野次ウマしているのだった。

その日、休日で閑散としている学園のターフには。

休日出勤する主犯の男と、休日返上でトレーニングに勤しむ共犯者の少女の姿が見られたそうなの。

四、

♪

とある休日、男と少女はカラオケに来ていた。

二人で。

またしても、男に邪な考えはなかったが。

なんでも少女、グラスワンダーは同室の子からカラオケの割引券をもらったらしい。

なぜか二人分。

二人分のため、友人を誘うのがためらわれるという少女の顔はまたしても真っ赤で。

男は、最近顔をよく赤くするなあと考えながら少女の提案に首肯したのであった。

というのが、今週の平日の話。

なんでも、割引券の期限が今週末までだとか。

であれば仕方がない。

男は、最近週末までグラスと一緒にだなあとのんきに考えていた。

来たはいいものの、男は最近の流行りがとんとわからなかった。それ故、少女とウマが合うか心配であったが。

意外にも、少女は一昔前の歌を好んで歌っている。

バラードや恋愛の歌。

選曲がどことなくしつとりとしていたことが少し気になったが、流石というべきか彼女の歌はとても上手であった。

熱唱しているためか、少女の顔は赤かった。

上手だね。

男が本心から褒めると、彼女は照れくさそうに笑った。

「心を込めて、歌っていますので…」

男は感動した。

こういった姿勢が、彼女が多くのファンから慕われる理由なのだろう。

そう、褒めると。

「…」

少女は何故か不機嫌そうに、男が手にしていたタンバリンをしつぽ

ではたいた。  
しやん。

そろそろ退室の時間である。

いいリフレッシュになったのだろう。

少女の表情はとても満足そうである。

だが、男は少し未練が残っているようである。

少女が不安そうに尋ねると、男は機器にとある画面を表示させて見せた。

うまぴよい伝説。

あの、伝説の歌である。

グラスのが、聞きたかったな。

そう苦笑する男。

「…」

それを見て、少女は無言で受話器を手に取った。

あの歌を、君も歌うんだね。

夕焼けの帰り道、そう呟く男。

「私だって最近の曲を歌うんですよ？」

古めかしいと言われたと思い、ぷんぷんとしっぽで抗議する少女。

…いや、もう少し、先の話さ。

しっぽの抗議を受けながら、男は小さく、小さくつぶやいた。

しっぽの抗議が止む。

男は前を向いているが、少女は俯いてしまった。

彼女の顔が赤いのは、夕日に照らされているからか。

或いは。

また、聞きたいな。

“どこで”とは言わずに、今度は聞こえるようにはつきりと言う

男。

二人の影はまるで一つのように寄り添って。長く、長く伸びていた。

五、

休日に家でゆっくりとするのは久しぶりであると、男は思った。最近ではレースやら休日出勤やらで忙しかった。

さて、今日は何をしようか。

男は顎に手を当て、思考する。

ふむ。あのお茶屋さん、しばらく行っていないな。

カラオケ。これもしばらく行っていない。

自然と想起されるのは、少女との記憶。

こんな時でも、少女のことを思い出す自分に、つい苦笑する男。

ことり。

そんな男の目の前に、湯呑みが置かれる。

「お茶が、入りましたよ。」

男の目の前には、男の十二センチメートルほど下には、機嫌よさそうに揺れる耳。

その色は——

「ねえ、久しぶりにどこか、お出かけでもしようか。」

そう提案する男。

「あら、いいですね。どこにいたしますか?」

少女——いや、もはや女性といった方が正しいか——は、嬉しそうに彼の声に耳を傾ける。

「あそこなんてどうだい? ほら、昔いった。まだあるかな? あのお茶屋さん。」

ぺちり。

「あいた。」

なぜかしつぽで足をはたかれる男。

目の前には、つんとした顔の。

「私のお茶ではご不満ですか？」

彼女は頬をかわいらしく膨らませながら、しつぽで抗議している。

…まったく。

「変わらないな、君は。」

「え？どういう意味ですか？」

「ころころと表情を変える愛しい人に思わず笑みがこぼれる男。」

「いや、かわいいってことだよ。」

「…」

すると彼女は顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

…やっぱり。

「変わらないなあ…」

ねえ、グラス？

ぺちん。

そんな音が、聞こえたような気がした。

## グラスがあの人を想う話

逢はむ日を その日と知らず 常闇に――

そう詠んだのは誰でしたっけ。

和歌を習ったのはもうずいぶん前なので作者は忘れてしまいましたが、この句は鮮明に覚えています。

なにせ、当時の私をそのまま表現するような詩でしたから。

1000年以上も昔の人が、私の気持ちを見事に表していて驚いた記憶があります。

この詩を詠んだ方はきつと、とてもではないけれど表しきれない気持ちをたったの31字に託したのでしよう。

やはり和歌は素敵です。

「はあ…」

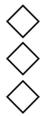
なんて、朝から感傷的になってしまいました。

この部屋で一人、一つしかないベッドの上で溜め息を吐きます。

…こんな憂鬱な朝に、あの人「おはよう」と声をかけてくれるだけでどれほど幸せな気持ちになることができるのでしょうか。

…いえ、無い物ねだりなんてしても無意味です。

今日は休日。有意義に過ごすためにも早いところベッドから出てご飯を作ってしましましょう。



ピーツという電子音が私の意識を引き戻します。

電子レンジで温めた常備菜を机に並べて「いただきます。」と一人机に向かいます。

今日の朝御飯はご飯とお味噌汁、今温めた常備菜の和え物。現役頃の私にとっては全く足りなかったでしょうが、今の私には十分な量です。

一人の食事なんてこんなもんなんです……たぶん。

「……」

一人黙々と食べ進みます。

私は食事中にテレビなどはつけないので、聞こえるのは咀嚼音とたまに擦れる食器の音だけ。

「ごちそうさまでした。」

大した量ではないのですが、すぐに食べ終わります。

或いは、この量でも、一人でないとしたらもつと食べるのに時間がかかるでしょうか。

意識したことがないのでわかりませんが、例えばあの人とご飯を食べることができればそれは幸せに違いありません。

日常は決して当たり前ではない。

その事を意識するようになったのは最近のことです。

あの人と過ごした楽しい食事のひとつときも、かけがえのないものだったのです。

それをもつと自覚するべきだったのかもしれませんが。

いつもよりナイーブになる思考で、私は食器を片付け、そのままの流れで一通りの家事を済ませます。

一人で過ごすには少し広すぎる部屋なのかもしれませんが……

ふと、掃除をしているときにそんなことを思いました。



あまり気分ではないので、お昼ごはんはパスです。  
夜ご飯はきつと食べますし、問題ないでしょう。

あの人がこんな姿を見たら、なんて言うでしょうか…  
いえ、現役でもない私がどんな生活をしようが勝手ですよね…

晴れなのか曇りなのかよくわからない天気の中、私の頭はぼんやり  
としていて、何を考えるにしてもあの人のことが頭にちらついてしま  
います。

生娘ではないのですから…と少し自分を戒めます。

何かをしなくては、と漠然と思うのですが…

気力は湧かず、せつかくの休日を私は無為に過ごしていくのでし  
た。



「ーでは、また来週!!」

いつの間につけていたのでしようか。

どこからともなく聞こえてきたテレビ番組のお別れの挨拶に反応  
して携帯を見ると、メッセージアプリの通知の下に表示されるのは1  
5：47。

もう4時になるところでした。

いけない、買い物にいかなくては。

最寄りのスーパーにつき、夕飯のメニューを考えながらぐるぐると店内を回ります。

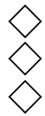
あの人の好物はなんでしたっけ…

…最後に作ったのはもうずいぶん前のことのようにです。

私の作ったハンバーグを美味しそうに食べるあの人の顔がちらつきます…

…はあ。さて、今日は何が安いですかね…

そんなことを考えつつも、私の手はほぼ無意識に挽き肉を手にしているのです。



「いけない…食べきれるでしょうか…」

つい作りすぎてしまった料理。

ずらりと並んだあの人の好物を見て、私はひとり呟きます。

まったく、いつになっても私はあの人のことばかり考えて…

…あの人は今日なにをしていたのでしょうか。

いえ、なんとなく想像はつきます。

きっと私の知らない場所で、私の知らない娘と、私の知らない表情で、トレーニングに励んでいたのでしょうか…

ああ、とても胸が苦しいです。  
当たり前のことなのに、それを受け入れたくない。  
当たり前。

彼にとつての、日常。

私にとつては、受け入れがたいもの。

やはり、日常は当たり前なんかではないんです。

あの頃は私だって、一日中あの人と――

…やめましょう。

ほら、キッチンに並べられた皿たちも湯気をたてて机に運ばれるの  
を今か今かと待っています。

コト：コト：と、食器を運ぶ音が一人の部屋に静かに響きます。

「やて…」

作り過ぎてしまったでしょうか。

所狭しと並べられたあの人の好物を見て、苦笑を浮かべてしまいま  
す。

でも、問題ないはずです。

今日はお昼ごはんを食べていませんし、それに――

「ただいまー！ー！！」  
「！！」

玄関から聞こえる、疲れを感じさせつつも元気な声。  
帰宅を告げる声。

私にとつての、日常。

つつい、しっぽと耳が反応してしまいます。

玄関に向かう。

小走りです。

「おかえりなさい。」

「ただいまグラス。いや、慣れたとはいえ出張はキツイね。一週間いかなかっただけで我が家が我が家でないみたいだよ。」

「ふふつ。何をおっしゃってるんですか。いつも通りの、我が家じゃありませんか。」

「いや、今日は違うね。だって、この匂いはー！ー！」

「あらあら。まるで子供なんですから。ご飯、できていますよ。」

「ありがとー！ー！グラス愛してる！」

「ふふつ。私もですよ、あなたー！ー」

ー！ー逢はむ日を その日と知らず 常闇に いづれの日まで

吾恋ひ居らむ――

あなたと会えなかった、非日常。

いつもじゃなかった、非日常。

寂しかった、もどかしかった、非日常。

でも。今からは。

あなたとの、日常。

代わり映えのない、日常。

幸せな、大切な、日常。

あなたと一緒にの日常がいつまでも続きますように。

でも、いくらあなたと一緒にだとはいえ――

――私が恋悩む日に、終わりはなさそうです。

## 目移りを絶対に許してくれないグラスワンダー

男と少女が夏の府中を歩いている。

がやがやとしたの人混みの間隙を縫うように二人はゆく。

肩を並べたその様子は、傍から見ればまるで好い仲のようである  
と、ショーウィンドーに写る自分たちの姿を認めた少女はいつそう満  
足した。

まあ車道側を歩く男はそんなこと全く思ってもいないし、少女は小  
柄なので傍から見れば年の離れた兄弟か親子にしか見えないのだが。

ただ、傍から見ても少女が満足気なのは明らかであった。

少女がご機嫌な理由は他にもあった。

実はこのお出かけ、男が少女を誘ったのである。

男と少女はよく週末を共に過ごすような仲であったが、そのおおよ  
そは少女が男を誘ったが故のものだった。

だからこそ、少女は今日のお出かけ——男が自分を誘った事実——  
に喜ぶ。

別に、男は少女と一緒に過ごすのが嫌なわけではない。  
むしろ、その逆といえる。

ただ男は、トレーナーという自らの立場を鑑み、年頃の教え子と週  
末のプライベートを共に過ごすことに慎重であった。

だが、教え子の方からお願いされれば話はまた別である。

少女はいつも楽しそうに男と過ごしていたし、自惚れでなければお  
出かけに行くと彼女の調子が上がるように見える。

担当の調子が上がる。トレーナーたる男が週末のプライベートを  
捨てて少女の誘いに応じるのは当然ともいえた。

行動理念は自らの担当第一。一に担当、二に担当、三四がとんで、五  
も担当。トレーナーとはそんな人種なのだ。

まあ、そんな打算的な思いだけではない。

先ほども述べたように男は少女と過ごす時間を好んでいたし、それ  
で彼女の調子が上がるのならばまさに一石二鳥であった。

少し話が逸れた。

つまるところ、男が週末に自らの担当と共に過ごすのは何らおかしいことではない（※トレーナー基準）のだが、それはあくまでも担当から誘われた場合においての話だ。

だが、今回は男が少女を誘った。

それはなぜか。

少女がご機嫌な理由はそこにもあった。

ここ最近、少女はいまいち調子が上がらない。

絶不調というわけではないがどこことなくパフォーマンスがぎこちないし、何となく気分ものつてこない。

人間ウマ娘関わらず、生きていればそんな日々はあるものだが、そこに気付くのが中央のトレーナーだ。

「グラス。えつと…今週末さ、行きつけの店で新しいシューズが入荷されるんだけど、一緒に見に行かない？」

数日様子を見ていた男は、意を決して少女にそう問いかけた。

少女がひどく驚いたの言うまでもない。

「え…？」

「ああいや、もちろん予定があったらいいし、そういう気分じゃなかったら断ってくれて構わない。って、そんなこと言う方が断りづらいか…」

少女は目をぱちくりとさせながら、苦笑する男を見つめる。

「今週末とは…三日後ということですよね？」

「え？うん。」

「トレーナーさんと一緒に。」

「そうなるね。」

「お出かけを。」

「僭越ながらお誘い申し上げた。」

「なるほど…」

口調こそ落ち着いているが、少女の脳内は割とテンパっていた。

——トレーナーさんから（重要）お出かけのお誘い？

——なにを着ていく？

——不転。

——それってつまり…そういうことでしょうか？

「…」

口元に手をあて、しつぽを揺らして長考し始めた担当を見て、男は付け加える。

「悩ませてごめんね。一人でも大丈夫だし、先約があるならそっちを…」「い、行きます!!」…優先してね…」

すると少女は耳をぴんとさせ、慌てて男の言葉を遮る。

「行きます。」

「無理はしないでいいんだよ？」

「行きます。」

「先約があるなら…」

「絶対に行きます。」

「行きますからね。」

「…」

不転行きますbotと化した自らの担当を見て、男はつい笑ってしまう。

少女は普段おしとやかで大人びているが、なかなかどうして年相応でかわいらしいところがある。

少女とそこそこに長い間過ごした男からすればあまり珍しくはない光景。

だが、男は少女のこの年相応の愛らしい姿が何べん見ても好きであつた。

「…：何がおかしいんですか、トレーナーさん。」

「…くふふ。何でもないよ。じゃあ土曜日、九時に寮の前でいいかな？」

「…：分かりました。」

笑われていると分かり白い目を向けてきた少女を、男はのらりくりとかわした。

まあ、少女は内心とても喜んでいたので問題ない。

——というのが、三日前の練習前。

その日から急に調子を上げた少女を見て、男はお出かけに誘った意義を問い直していたが、まあ担当が調子を取り戻したことに比べれば些細な問題であった。

そして数時間前、好調を維持しながら土曜の朝を迎えた担当の調子を取り戻すべく、男は少女とのお出かけを開始したのであった。

他愛もないことを話しながら、二人は歩いていた。

今朝からかなり機嫌がよさそうな少女ではあったが、その時よりもさらに機嫌がよさそうだった。

このままいけば、絶好調で週明けを迎えられるだろう。

男は自分の隣で楽しそうにする担当を見て目尻を下げた。

グラスワンダーにはやはり笑顔が似合う。

そしてその笑顔に、男はいつも元気を貰っていた。故に。

隣の微笑む少女に目を奪われていた男が前から迫ってくる影に気が付かなかつたのは、当たり前前といえば当たり前であった。

「わわっ！」

「あいてっ。」

「だ、大丈夫ですか!?二人とも!?!」

男とぶつかつたウマ娘が歩いていてよかつた。

そうでなければ、絶好調な栗毛の少女の調子が急転直下する事態になつていただろう。

「す、すみません!!お店の方を見ながら歩いててぶつかつてしまいました!」

「いや、こちらこそ申し訳ない。前方不注意だった。」

さすがに「隣でニコニコしている担当を見ました。」と言うわけはいかない。

男も自らの不注意を詫げる。

「ほ、本当にごめんなさい!けがとかありませんか!?!」

「こちらは大丈夫だよ。そっちも大丈夫?」

「私も大丈夫です。うう、本当にごめんなさい…」

「いやいや、こちらにも非があるんだ。そんなに恐縮しないでくれ。君さえよければ互いに不注意ということで、ここはひとつ。」

「ありがとうございます。……え、というか、あなたはグラスワンダーさん?! わあ…! あ、こ、こんにちは!!」

「ええ、こんにちは。お怪我がなくてよかったです。トレーナーさん、気を付けてくださいね。」

「すまない。」

落ちてきてきて初めて気が付いたのか、ぶつかってきた少女はグラスワンダーを見て驚いている。

「わ、私グラスワンダーさんに憧れていて…! といっても、レースはダメなんですが…。」

「ん? 君もトレセン生かい?」

「お、お恥ずかしながら一応…。」

「んんん…ああ、そうだ! 確かひと月ほど前に新バ戦を走っていたよね! 確か二着だったけど、いい末脚だったよ!」

「見ていてくださったんですか? 感激です!」

「その後、調子はどうだい?」

「あはは…あんまり。トレーナーさんもまだ見つけれられていませんし…。」

鹿毛の少女は耳をへたらせながら苦笑いする。

男はトレーナーとしての性なのか、目の前にウマ娘がいたらあれこれ聞かずにはいられないようだ。

栗毛の少女は頬に手をあててニコニコしている。

「そっか…あまり気を落とさないでね。ここであつたのも何かの縁だ。もし必要だったら、微力ではあるが力になるよ。」

「ほ、ほんとうですか?!」

「ああ。トレーナーになるなんて無責任なことをこの場では言えないけど、アドバイスクらいであれば。」

「ありがとうございます! 学園でお見掛けしたら、声をかけさせていただきます! …あ、もうこんな時間。今日は本当にすみませんでした! 学園でお会いしたらよろしくお願いします! それではっ!」

「気を付けてね。……お、ふむ……？」

「…」

そういった感じで少し話をした後、鹿毛の少女はあわただしく駆けていった。

男はウマ娘専用レーンへ出て走り去っていく少女の後姿を見て、何やら思案顔である。

——そんな男の様子を見て、栗毛の少女、グラスワンダーはすつと目を細めていた。

グラスワンダーはご機嫌だった。

そう、ご機嫌だった。

ここ数日は、最近の不調が嘘のようであった。

タイムも改善されてきて、充実したトレーニングを積んでいる。

それがなぜであるかわからないほど、少女は鈍くはなかった。

現金だし、簡単であると自覚もしている。

たかがお出かけに誘われた程度でこんなに舞い上がってしまうなんて。

いや、されどお出かけ。お出かけを笑うものは、お出かけに泣くのである。

先約があると勘違いされて危うく中止になりかけた時は冷や汗をかいたが、少女は確かに男とお出かけする機会を手にした。

それが少女にとっては、たまらなく喜ばしい。

何より少女がうれしかったのは、男が自らをしつかりと見てくれていることが分かったことだ。

自分で少し違和感を感じる程度の不調ではあったが、男はそれに気が付いてくれた。

そして、彼の方からお出かけに誘ってくれた。

正直、お出かけをするかしないかは少女にとってそこまで重要ではない。…いや、とても行きたいし、彼が誘ってくれなければ少女の方から誘う予定ではあったが。

ともかく、少女は男が自分の変化に気づき、それを労わろうとしてくれたことがうれしかったのである。

お出かけもうれしいが、それはあくまで副産物だ。

男と出会ったときもそうだったが、やはり彼は「私」を見てくれて  
いる。

少女だって、成人男性が教え子を週末に誘うことが世間一般からどんな目をされるかぐらいは分かる。

にもかかわらず、彼はそれをやってくれたのだ。

やはり彼こそが、「私」の「トレーナー」なのだ。

少女は改めてそれを実感し、上機嫌であった。

上機嫌で、あった。

歩みを進める二人。

少女は相変わらずニコニコしている。

それは変わらない。

だが、男は気付いている。

先ほどまではふんわりと、まるで花が咲くように顔をほころばせていた彼女が、まる貼り付けたような笑顔になっているであろうことを。

能楽の翁面みたいになっているんだろうだなと、男は思った。

「…」

「…」

先ほどとは変わり、二人の肩は並んでいない。

男が少し先を歩き、少女は男の半歩後ろを歩いている。

男がペースを緩めれば少女も緩めるし、立ち止まれば少女も立ち止まる。

どうやっても、この半歩は縮まらなかった。

「…」

「…」

男としてはたまったものではない。

すぐ後ろから感じる圧。

これが普段、レースで驚異的な末脚を誇る彼女の威圧感なのだろうか。

男は、怪物が後ろから追い上げてくる恐怖を身をもって体験した。蛇ににらまれた蛙の心境とは、おそらくこのようなものなのだろう。

「トレーナーさん。」

そんなことを考えていると、すぐ後ろから声が聞こえる。

聞きなじみのある声だ。

「…：…何だい。」

「先ほどの方、どうでしたか？」

“ どう ” とは。

男は言葉を探した。

「…：好走が期待できるんじゃないかな…」

男は言葉を濁した。

先ほどまでは意識の外にあった蝉の声が、やけにうるさく感じられる。

この鳴き声は、アブラゼミでいいのだろうか。

「去り際、彼女のトモをご覧になっていたようですが。」

少女は二の矢を放った。

「…」

「ご覧になっていたようですが。」

「…：決して、やましい気持ちは…」

「どう、でした。」

「え？」

「彼女のトモは、どうでしたか？」

男は、自分の歩みが少し早くなるのを感じた。

しかし、後ろの気配はぴったりと自分をマークしている。

「どう、でしたか？」

ふと、蟬の鳴き声が止む。

「……なかなか、いいんじゃないかな。」

男は辛うじて、その言葉を吐き出した。

——返事をしてくれたのは、再び鳴き始めた蟬だけであったが。

男と少女は半歩を保ちながら、何の示し合わせもなくトレーナー室へと向かっていった。

先導したはずの男は、なぜ自分が休日にトレーナー室に向かったかわからなかった。

ただ、グラスワンダーがこの半歩を差さず、自分に追従してトレーナー室に入ってきたことだけは分かった。

「…」

男はなかなか、少女の方を見ることができなかった。

そういえばあの鹿毛の少女を見送ってからずっと、この栗毛の少女は自らの後ろをマークしていた。

故に、男は彼女の顔をしばらく拝していなかった。

「…」

「…」

トレーナー室に入ってなお、少女に動きはなかった。

男は、自らが動かねばこの状況は変わらないことを悟った。

そしてついに、覚悟を決めた。

「…」

…だが、特に何も起こらなかった。

振り返っても、そこにはいまだニコニコとしている担当がいるだけで。

男はほっと一息つき、ソファへと腰かけた。

腰かけると同時に、ソファからは彼女が付けている香水と同じ香りが立ち上る。

「…ふう。」

落ち着いたら、喉が渴いてきた。

外もかなり、暑かったはずだ。

以前にもらった茶葉がまだ残っているはずだし、それで一服するとしよう。

そう、男が油断した隙を。

「トレーナーさん、どうですか。」

栗毛の少女は逃さずに差し切った。

“ どう ” とは。

男は数分前とまったく同じ感想を抱いた。

グラスワンダーは、ソファに座る男の前まで歩いてきてそう問いかけた。

男は困惑した。

「どう、ですか？」

少女は続ける。

男には、何のことかさっぱりわからない。

「…え、と……その。」

問いに答えられないでいると、少女はふうと一息つき、自らのスカートに手をかけた。

そして。

「どう、ですか？」

ぐいとスカートを上げ、再び男に問いかけた。

男は知っていた。

知っていたはずであった。

彼女がスカート丈にこだわりを持っていることを。  
しかし今は。

普段であれば彼女の膝をすっぽりと隠しているそれが、彼女の太ももを露にするほどにまで引き上げられていた。

「どうですか。」

少女は蠱惑的に微笑み、同じ質問を続ける。

やはり男は答えられず、一つ息をのむ。

普段はセミの声でやかましい室内はいやに静かで、男がごくりと息をのむ音までも反響しているようであった。

「どうですか、私のトモは。」

「好走が期待できるのではないでしうか。」

くるりと回りながら、少女は続ける。

「でもトレーナーさんは、そんな素晴らしいトモを見逃してしまっていたようですね。」

「愛バのことは、しっかりと見ていないといけませんよ？目を、離してはいけませんよ？」

幼子を叱るように、腰に手を当て、もう片手の指をたてて「めっ」と男を叱る少女。

「トレーナーさんは私のことをしっかりと見ていなかったようですので、これからはしっかりと見ていただかないといけませんね。」

少女はゆつくりと、腰かける男に近づく。

——誰を見るべきか、今一度、しっかりと。その目に焼き付けてくださいね。——

露になった足をソファにかけた少女は、未だ言葉を発さない男を見つめてそう言った。

やはり夏は、蟬の声がやかましい。

## グラスワンダーの天気予報

天気予報は、八割程度の確率で当たるといわれている。

もちろん場合にもよるし、一週間後の予報などでは当たる確率は当然落ちてしまうが、一日二日程度の予報はかなりの精度で当たるといえることができるだろう。

そして、トレセンにおけるトレーニングは屋外で行われるものも多い。

それゆえトレーナーたちは天気予報の結果を加味してトレーニングを計画する。

「…」

天気予報とトレーニングルームの予約画面を移したパソコンとにらめっこする男も、トレーニングを練り直す真ただ中にある。

男としてはターフでスピードトレーニングをしたいところなのだが、今週は天気あまりよくないという予報。

男の担当は好き嫌いせずどんなトレーニングでも熱心に取り組んでくれる子であるからパワートレーニングに変更してもよいのだが、現状に即したトレーニングができればよいのは言うまでもない。

「50%、か…。」

明日の午後の降水確率を口にした男は、手にした計画表を見て悩ましげである。

そんな男を急かすように、トレーニングルームの予約はほとんど埋まってしまう。

天気予報を確認して計画をたてるのは何もこの男だけではない。

おそらく他のトレーナーも予報を確認し、急遽変更を加えているのだろう。朝にはガラガラだった明日分のトレーニングルームの予約は既に八割方埋まってしまった。

「どうしたのですか、トレーナーさん？」

男がうんうんうなっていると、隣からひよっこりと栗色の頭がパソコンを覗き込んできた。

トレーニング後にシャワーを浴びた少女の艶やかな髪からは柔ら

かで甘い香りがふわりと漂い、まだ少しの湿り気を残す耳は興味深げにぴこぴこ揺れている。

その愛らしい頭を撫でたくなる衝動をぐっと堪え、男は応える。

「ああ、グラス。明日以降のトレーニングはターフで行う予定だったけど、天気が優れないみたいで変更しようか悩んでいたところなんだ。」

グラスと呼ばれた少女は「なるほど」と一言つぶやくと、頬に手を当てて耳を揺らす。

いつものようににこにことした表情を絶やさないう担当を見て癒された男は彼女の意向を尋ねようとするも、それより先に彼女が再び口を開いた。

「でしたら、私から言うことは何もありません。私を一番そばで見てくださいているのはトレーナーさんですから。」

「グラス…」

「トレーナーさんを信じておりますので。よろしくお願いしますね、トレーナーさん♪」

「ああ！よし！明日は予定通り、ターフでのトレーニングだ！今日はてるてる坊主を作って明日に備える！」

「あらあら。でしたらお手伝いしますよ、トレーナーさん。」

ひとしきりの問答を終えた二人はソファへと場所を移し、ティッシュペーパーを使っててるてる坊主を作り始める。

四方山話に花を咲かせながら手を動かすこと数分。机の上には小さめで几帳面につくられたものと、やや大きめでにっこりと笑っているものが並ぶ。

二人はそれを窓際に吊るし、明日の晴を祈って仲よく部屋を後にした。

二人が去った後の薄暗くなった部屋に残されたのは、仲よさげに佇むてるてる坊主が二つ。

長くなってきた影が差すその姿は、物憂げに空を見上げているようであった。



二人の願いが通じたのかはわからないが、翌日のトレーニング開始の時間に雨は降っていなかった。

だが晴れというわけではなく、空は鈍色で厚い雲に覆われている。いつ雨が降り出してもおかしくはない空模様だが、ターフにはそこそこの人影が見受けられ、そのどれもが雨が降り出す前に少しでも練習を積もうと慌ただしく動く。

ターフに集まった人々を代表して昨日にてるてる坊主を作った二人もその例外ではなかった。

少女はてきぱきと、それでいて入念に準備体操や柔軟を行い、男も既に用具の準備を済ませている。

しかし。

少女が体をほぐし終わると時を同じくして、ぽつりぽつりと雨粒が落ち始めた。

はじめは小雨だったためトレーニングは続行されたが、段々と雨足は強くなり、少女がターフを一周としないうちにしないうちにざあざあという音が奏でられる。

なかなか強い雨が緑のターフに打ち付けられ、ところどころで水が溜まりだすのを見た男は決断を迫られる。

重バ場想定トレーニングであればよいかもしれないが、あいにくと今日のトレーニングにそれは組み込まれてない。

それに、足元が悪い中では濡れた芝に足をとられ転倒、ということもあり得る。

練習中のけがは何としても避けたいところであり、そこまでのリスクを背負ってトレーニングをするメリットはないともいえた。

男は少しペースを落とした担当に向かって声を張る。

「グラスゴー!!今日のトレーニングは中止だ!!聞こえていたら引き上げてくれ!!」

すると栗色の影は右手をすつと挙げ、こちらに向かって走り始め

た。

周囲のトレーナーとウマ娘たちも、蜘蛛の子を散らすように校舎へ避難している。

昨日下した己の判断に内心舌打ちをする男のもとへ、グラスワンダーがとてととと歩み寄ってくる。

「トレーナーさん…」

「ああグラス、話はあとだ。早く校舎へ戻ろう。戻ったらすぐにシャワーを浴びておいで。」

半袖の担当からなるべく目を逸らしつつ男が言うと、二人はそそくさと校舎へ駆けていった。



シャワーを浴びてほかほかしている栗毛の少女を、男はホットミルクをもって出迎えた。

ちよこんとソファに座る担当にマグカップを持たせた男は、彼女の小さな肩にブランケットを優しくかけてやる。

少女に風邪をひかせるものか、という男の強い意志が感じられる。

その一方で男の髪は半乾きであり、おそらく急いで着替えただけであらうジャージ姿は少し寒そうであった。

ソファでブランケットにくるまれた少女の前に座り、男が切り出す。

「まずは謝らせてくれ。判断ミスで、君の練習を一日無駄にしてしまった。トレーニングルームもプールも予約はすべて埋まってしまったので、今日はビデオでレースの研究とミーティングをすることになる。本当にすまない。それに、君をあゝの雨の中走らせてしまった。グラスはしっかりとっているから寮に戻った後も大丈夫だとは思いますが、十分体を温めてくれ。」

「いえいえ。私は昨日、トレーナーさんにお任せすると言ったので。それに、最近はなかなかゆつくりする暇ありませんでしたから、体を休ませられてちようどよかったですよ。それよりも…」

その発言通り、少女は練習が中止になったことに関しては何に不満を感じていなかった。

50%の降水確率であれば仕方がないと思えるし、自分が任せると言った以上その発言をした自分にも責任の一端はありと考えていたためである。

少女の不満は別にあつた。

「…トレーナーさんはシャワーを浴びられたのですか？」

「え？……うん。」

いつものようにおっとりとした口調で、少女は男に尋ねる。

そう。少女にとっては、男が自分のことをなあなあにすることの方が不満であつた。

自分が風邪をひかないように気を遣つてくれることは少女をいたく喜ばせたが、それと同時に自分自身のことを顧みない男の態度は少女の目を鋭くさせた。

「…本当ですか？」

「うん。俺、シャワー浴びるの速いし。それに風邪なんて小学校以来引いていないから大丈夫！」

「…」

“風邪をひかないから大丈夫”などという、おおよそシャワーを浴びた人間が言うとは思えない台詞を聞きながら、少女は逡巡する。

少女は、男がなかなか強情なことをこれまでの付き合いから知つていた。

いくら問い詰めようが、シャワーを浴びたの一点張りで「それよりもグラスの方が…」と言つてくるのは目に見えている。

それに、男は責任感が強い。

おそらく、今日の練習を台無しにしてしまったと反省し、自分のことで時間をとる暇があつたら少しでもレース研究などをしたいと考えているのだろう。

少女には、男が考えることが手に取るように分かつた。

「……！」

以上のことを総合的に判断し、少女は――。

「…くちゅん。」

——ひとつ、くしゃみをした。

「!!」

もちろん、これに驚いたのは男である。

担当に風邪をひかせるわけにはいかない。

それは、トレーニングができなくなるからという理由だけではない。こんなにもいたいけな担当が風邪で苦しむ——その姿を想像するだけで、男は顔が青ざめた。

「グラス大丈夫かい？寒い？ブランケットまだあるよ？」

突然あわあわとした男を見て、くすりと笑った少女はその小さな体をいっそう縮こまらせた。

「大丈夫ですよ。でも、少し肌寒いかもしれませんね。」

「分かった！すぐにブランケットを——」

「いえ。ブランケットというよりはむしろ、人肌が恋しいというべきでしょうから。」

少女はブランケットを開き、言外にあることを主張する。

「…えと、グラス。」

ためらうのは男の方である。

長く担当をしてきた少女が何を言わんとするかは男にも察せられる。

男はそこまでたわけてはいないし、初めて彼女に会う人でも彼女が何を男に求めているかは容易に想像がつくだろう。

まあ、初対面の人間に少女はこんなことを絶対にしないが。

男は追加のブランケットを手に悩み、立ち尽くしている。

そんな男の様子を見て、少女は畳みかける。

「くちゅんっ。うーん。このままだと、風邪をひいてしまうかもしれません。それだけは避けたいですね。ね、トレーナーさん？くちゅん。」

「……はあ。」

なおもブランケットをひらひらとさせてくしゃみをする少女に、男は大きいため息を吐いて歩み寄る。

そして、少女が右によることで生まれたソファの隙間に腰を下ろした。

「…トレナーさんの体、冷たいです。」

「…冷え性なんだよ…。」

男が座った瞬間にぎゅつと距離を詰め、二人でブランケットを共有した少女は問い詰める。

それに対し、新しく持ってきたブランケットを少女の膝に掛けた男もぶつきらぼうに答える。

「あらあら。でしたらトレナーさんも暖まることができちゃどうぞよいですね〜♪」

「…ふふっ。そうだね。暖かいよ。」

シャワーでしっかりと温まった少女の体温が、男の冷えた体をゆっくりととかしてゆく。

小さな小さな少女の体は、ストーブのようにぽかぽかとしていた。

「暖かいですか、トレナーさん？」

「ああ、ありがとう。グラスこそ寒くない？」

「ええ。あ、でも手元が少し…えいっ。」

寒くないかと尋ねられた少女の左手は、これ見よがしに男の右手をつかむ。

「俺の手の方が冷たいよ。離しな。」

「これでいいんですよ。それに、とつても、とつても暖かいです。」

「…そうかい。」

恥ずかしそうにする男は、負け惜しみのようにつぶやく。

「こりゃ、明日のトレーニングの予定も組みなおさなきゃな…。」

その言葉を聞いて、少女はとあることを閃く。

…閃いて、しまった。

「…問題ありませんよ。先ほど確認したら、明日はしっかりと晴れるようですから。」

「あ、そうなんだ。なら、明日こそターフで練習だね。」

「…ええ。」

「それじゃ、ミーティングに移るか。」

明日の天気予報がどうであったかは定かではない。

ただひとつ定かなのは。

未だ窓辺に吊るされるてるてる坊主が昨日と同じく物憂げに空を見上げていたことだけである。

「…洗濯物が、溜まってしまいそうですね。」

ブランケットにくるまり、男の足に自らのしっぽを巻き付けてレース動画を観ている少女がこっそりと、そうつぶやいた。

…もうひとつ定かなこととして、“天気予報は絶対ではない”ことも挙げておくことにしよう。

グラスワンダーと蠱惑の抹茶ラテ（愛：硬め濃いめ多め）

男は少し…いや、だいぶ驚いていた。

「こんなに一本筋の通ったウマ娘、君にまた会うまでは出会えないだろうね。」

冗談半分、本心半分。

以前であればおっとりした追及の一つでも飛んできていたところ。しかし、今の彼女は「あらまあ」とふんわり笑って、その手をゆくりと口元に持っていくことしかしなかったのだ。

その姿は上品で優雅で、まさに大和撫子というべきだろう。

ずいぶん艶やかになった革張り椅子の座り心地を臀部でしっかりと確かめながら、彼女は穏やかだった。

座部がぺたんこになった、使い古された椅子に腰かけて画面のレース映像にかじりついていた頃が懐かしい。あれはもう、三年も前のことだ。

「…」

「どうしましたか？トレーナーさん。」

「…いや、何でもないよ。」

急に歯切れの悪くなった男を、栗毛以外の四人が不思議そうな目で見つめている。

一方、未だに口元を隠した栗毛の少女は微笑みをたたえた目で男を見つめていた。

◇◇◇

決して平坦な道のみではなかった。

少女は回顧する。

彼女のレースは、ちよつとした失望から始まっていたから。

誤解を招かぬよう言うと、彼女が誰かに失望したのではない。彼女が失望したのは自分自身だった。

だが、彼女は頂へたどり着いた。

あの日、口元を手で隠した自分を、その目を見て口説き落とした男とともに。少女は三年間を走り抜けたのだ。

遍く光る星々のさらに上。

ひとときわ強く、眩い光を放つ星となった少女。

そして、自らの道を暖かく照らし続けたと、少女に言わしめた男。

その男は、少女にとってどんな存在なのだろう。

ちなみに、少女はその発言を二人きりの、かけがえのない絆を感じた温泉旅行で発している。

二人はどんな、関係なのだろうか。

——互いが互いの星。

——運命。

「…なんて、少し大胆過ぎましたかね。」

おっとりとした口ぶりとは対照的に、照れくさそうに笑う少女。

幾度と開いた、見慣れたトレーナー室の扉のはずが、件の旅行後初めて目にするといつもより重く、手をかけづらいのは気のせいか。

少女は無意識に口元を隠した後、小さくこほんと咳ばらいをしていつもよりも重厚そうに見える扉を慎重に開いた。

とはいっても、少女の眼前に広がるのはいつもの光景。

少女の右手側には少し大きめな、重厚感のあるソファ。いつも通りのはずの男が、いつも通り書類に目を通してている。

時折ホチキスで止められた部分をほとんど弾く、鹿爪らしい顔をした男（書類の前ではこうなる。これを知っているのは自分だけだと、少女は常々思っている。）は少女の顔を見ると、いつも通り顔をほ

ころばせた。

「やあグラス、よく休めた？」

——少し、寝不足です。

内心そうつぶやいた彼女はいつも通りの男をなぜか直視できず、男の先、部屋の隅に目をやる。

再び口元に手を当てていた少女の視線の先には、スプリングがおしやかにになった椅子（かなり古ぼけている。座り心地は決して良くない。）が二脚、睦まじげに鎮座していた。

——なぜか、捨てられないんですね。

身を寄せ合う二つの椅子を慈しみながら見た少女は、これまた重厚なテーブルをはさんで男と向かい合わせになるように座った。

もちろん、彼女が腰かけたソファも折り紙付きのものだ。

「もちろんです。この前はお付き合いいただきありがとうございます。ありがとうございました、トレーナーさん。」

ようやくと男の顔を見ることができた少女は、座り心地抜群なはずのソファの上で二、三臀部を動かす。

部屋の片隅で役目を果たしていない椅子よりもはるかに高品質のソファに、少女はまだ慣れていなかった。

「それは何よりだ。」

座り心地を確かめ終えたのか、ようやく腰を落ち着けた少女。

それ認めた男が、手に持っていた書類を少女に手渡しながらやさしく微笑む。

すると、微笑に多少不意を突かれた少女はせっかく落ち着けた腰を浮かしてその書類を受け取る。

流石大和撫子、礼節をわきまえている。

「君と歩んだ三年間は、そう簡単に形容できるものではない。こんな新米に、こんな経験をさせてくれたことに、改めて礼を言わせてほしい。」

不意打ちの後、突然こんな言葉をかけられた少女は内心ひどく驚いて、思わず手を口にやる。

「いえいえ。こちらこそ、とーっても感謝していますよ、トレーナー

さん。」

秘めたるは感謝の念だけだろうか。

いつもは凜とした少女も、この時ばかりは照れくさそうにしている。

二人は、どんな関係なのだろう。

男の方も、少女のことを愛おしげに見つめる。

なんだから、トレンディな雰囲気になってきたかもしれない。

二人の様子を、古ぼけた椅子が固唾をのんで見守る中、男が続ける。

「光栄だ。…そして、僕らの三年間がいたく評価されて、来月からその書類の通りになる。」

少女は、手渡された書類にようやく目を通す。

男が急にいつも通りでなくなるものだから、すっかりと忘れていた。

「あら。私たちが評価していただけたことは、とても誇らしいですね。…いつたい、どんなこ、と………へっ??」

おおよそトレンディな雰囲気には似合わない、そして大和撫子らしからぬ素っ頓狂な声を上げた少女は、さっと口元から手を引いた。

先ほどまではお淑やかに彼女の口元を隠していた手は突如として落ち着きを失い、ふるふる震えている。

思わず素の様子をさらけ出してしまった大和撫子を尻目に、男はなおも続ける。

「書類の通りだけど、一応口頭でもね。端的に言うと、来月からチームを持つことになった。メンバーは五人。もちろん、グラスも含めてね。グラスには、チームのリーダーとして、手本となるような姿を見せてほしい。」

「……」

いつの間にか落ち着きを取り戻した少女に、「頼りにしているぞ」と言わんばかりの視線を向ける男。

そんな男に対し彼女は。

「……もちろんです〜♪」

と、にこやかに返した。

その姿を見た男は一仕事終えたと言わんばかりに席を立ち、茶を淹れようとしている。

口元を手で隠した、底冷えのするようなする笑顔を見せた少女の前で。

…いったい二人は、どんな関係なのだろう。

◇◇◇

というのが、今年の春の話。

男がチーム設立の声明を出した一月後、彼女らの部屋には新たな四人のメンバーが加わった。

男、少女共に四人と良好な関係を築き、今では机を囲んで談笑する中である。

五人で使うにはやや手狭になった部屋だが、少女は部屋の変更を是としなかった。

なお、部屋の隅では相変わらず古ぼけた二脚の椅子が肩身狭そうにしている。

椅子たちにとっても、部屋に入るたび四人から不思議そうな目を向けられてはたまったものではないだろう。

だが、これまた少女の強い要望によって、彼らは手狭なスペースに確かな居住権を得ている。

話を戻そう。

今のトレーナー室には六人。

何故か驚いている男。

その男を不思議そうに見つめる四人。

そして、栗毛の少女。

この六人。

では、この六人の中で最も発言力が強いのは誰か。

そう。

「……あく……「あらく。もうこんな時間ですね。明日もトレーニングがありますし、そろそろお開きにしましょうか。」」

そう、口元を隠したこの少女こそ、である。

何か言おうとした男を遮ったような、チームのリーダーである少女の一言を受けて四人は素直に返事をして帰り支度を始める。

実際、この時期は日が暮れるのが急に早くなる。

若干の居心地の悪さを携え、男は教え子たちを見守る。

少女は、四人の様子をにこやかに見つめていた。

「二二さようならー！二二」

四人が仲よく退室する様子を、二人は重厚そうなソファに腰掛けながら見送った。

二人の前には、どことなく重要そうな書類がいくつか積みまれている。

「先輩はまだ帰らないんですか？」という後輩の一言を、栗毛の少女はこともなげにかわした。

彼女曰く、「重要そうな書類」とやらを整理しなくてはいけないぞうだ。

「ですよ、トレーナーさん？」と少女に聞かれたトレーナーが「ああ」と元気のよい返事を返していたことから、少女の言葉に嘘偽りのないことが分かる。

「…」

「~~~~♪」

いつの間にか、自分の正面ではなく隣に座ってきた少女の鼻歌を聞きながら、男はぼんやりとしている。

いつもは男と少女を隔てている机には書類が広げられ、そのうち何枚かを少女が眺めていた。

男は回顧する。

どうしてこんな状況になったのだろうか。

この状況は、ちよつとした失言から始まったのかしら。

チームミーティングが予想外に早く終わり、メンバーで雑談をしていた夕暮れ。

いつのまにか、男と少女の関係がやり玉にあげられていた。  
出会い、スカウト、二人三脚の日々：

「~~~~~」  
男は軽く首を横に動かし、上機嫌そうに鼻歌を奏でる少女を見る。  
三年を共に過ごした愛バとはいえ、男は彼女のすべてを理解できて  
いるわけではない。

だから、上機嫌そうと少女を形容する他ないのだ。

「……」

生徒が書類を眺めているのに自分は座っているだけでは不自然かと、男も手近な書類を手に取る。

男は変なところで真面目だった。

“トレーニングルーム使用申請書” “……来月の分。これはまだ  
余裕がある。”

“担当ウマ娘補習のお知らせ” “……賢さトレーニングをも  
う少し取り入れるべきかもしれない。”

あとは……

……

「……」

一通り目を通した男は、机のどれもが急ぎの書類でないことを知る。

少女は、いったい何が目的なのだろう。

「……」

「……！」

そして、逡巡する男はあることに気が付く。

少女の手にある一枚の書類。それには、まだ目を通してないこと  
に。

「……」

ちらりと、少女の手元をのぞく。

男の目に映ったのは、今春ぶりに見た“チーム設立許可書”の八文字であった。

「……」

やはり、男は分からない。

この少女が何を思っこの場を設けたのか、自分に何を求めているのか。

この上機嫌そうなかわいい愛バに、どう接すればいいのだろうか。

「……………」

するとにわかには、男の目が大きく開かれる。

おそらく、この状況を打開する妙手を思いついたのだろう。

おもむろに立ち上がった男は、自信ありげに冷蔵庫の方へと歩みを進めた。

……いつの間にか口元に手をあてて目を細める、かわいかわい愛バの前を横切つて。

少女は少し……いや、だいぶ驚いていた。

にわかには理解できないことが起きた時、怒りや悲しみの前に胸に去来するのが驚きであることを、少女はうらかな春の日に学んだ。

“チーム”

この三文字を認識してからというものの、少女の喫緊の課題は“如何にして男の心を繋ぎ止めておくか”の一点に尽きた。

もちろん、成績優秀な彼女のこと。

はじめてチームの存在を知ったわけではない。

だが、ヒトもウマ娘も自分の関心外のこととは意識しないもの。

法律が変わるのも、何か事件が起きてからの方が多いのではないか。

だが、少女にそこまでの焦りはなかった。

冷静に考えてみれば、彼と必死になつて過ぎた三年間で築いたかけがえのない絆がちよつとやさつとで瓦解するはずなどないのだ。

自惚れでなければ、彼も私のことを憎からず思っているだろう。

……ただ、三年を共に過ごした、かけがえのないパートナーに相談せずに進めたのはいただけない。

これは、本当にいただけない。

事態を飲み込んで、ふつふつと怒りがわき始めた時。思わず素っ頓狂な声を上げたその少女はしかし、とある妙手を思いついて矛を収めた。

「……もちろんです〜♪」

「……でも絶対、私から目を離させませんよ？」

少女の計画は完璧だった。

至極単純。

見せつけてやればよいのだ。

どれほど自分たちが強い絆で結ばれているかを。

そこに、つけ入る隙があるだろうか？

答えは、否だ。

新しく加入する四人とやらに、彼の隣に立つのは誰かをはつきりと、示せばよいだけなのだ。

そんな考えを持ってはいたが、いざ四人が加入すると少女は理想的な先輩であり、チームリーダーであった。

四人と積極的にコミュニケーションをとり、トレーニングで指導や補助を行い、休みの日には五人で出かけることもあった。

…手を組んだ暢気な男は、五人が打ち解ける様を見て一つ、うなずいた。

◇◇◇

…そんな日々が続いたある日、突然訪れたこの状況。

冷蔵庫に向かった男が手に持つのは、二つのドリンク。

とある有名カフェチェーンが手掛ける、“本格和風抹茶ラテ”である。

男はそのうち一つを、少女に手渡した。

「……これは？」

不思議そうに首をかしげる少女の横に腰掛ける男。

男のとった妙手とはつまり、ご機嫌取りに他ならなかった。

上機嫌なときに差し入れを出せば、当然そのまま上機嫌。

仮に不機嫌でも、この差し入れで上機嫌。

中央トレーナーとなるだけの叡智を秘めた男が導き出した結論は、

完全無欠のものであった。

さらに、少女が和としてアリカナシか悩む抹茶ラテを選択したことにも彼が勝ちを確信する理由があった。

「あれ、知ってるだろう、このドリンク。」

「ええ、それはそうなのですが、なぜこれをトレーナーさんが…？」

少女はこの緑色の液体の詳細ではなく、なぜ男が自分にこれを渡したかが気になるようであった。

男はその発言を聞き、待っていましたといわんばかりに口を開く。

「ああ前に四人出掛けたとき、あの子たちから聞いたんだ。グラスがおごってくれてとてもおいしかったって言ったよ。いや〜。グラスも……」

鼻高々に語りだした男が、最後まで言葉を紡ぐことはなかった。

なぜなら少女は。

男の隣に座る少女が。

——いつの間にかドリンクを机の上において、とんでもない圧を放っていたから。

ぼたりと、カップについた結露が机を濡らす。

秋とはいえ、空調を付けないでは少し蒸すトレーナー室。

そこに、このコールドドリンクはおあつらえ向きだったはずだ。

しかし、男は今汗をかいている。

蒸し暑いのではない。

いわゆる、冷や汗というやつ。

飲むとしたら、冷たい抹茶ラテよりも暖かい緑茶で心を落ち着けたところだ。

「トレーナーさん。」

手で口元を隠した少女が、優しく男に問いかける。

いつも通り、落ち着くはずの、彼女の声色。

ぎゅっ。

良質な革のソファがこすれて音をたてる。

男と少女の距離は、確かに縮まっていた。

「トレーナーさん。」

なおも、少女は問いかける。  
何か言わなくてはいけない。

男は、視界の隅でつーつと、机上のカップから結露が滴るのを捉えた。

「トレーナーさん。」

三度目。

少女が問いかける。

男はついに、既にからからになってしまった口を開いた。

「…どうしたんだい、グラス…」

「…」

少女は笑っている。

しかし、男がそう判断した要因は、彼女の目が弧を描いていたその一点。

口元は、彼女の小さな手で隠されていて、見えない。

「…嫌い、だったの……かな？」

口を閉ざし、こちらをうかがうような彼女の圧に耐えかねて、男はただたどしくも再度口を開く。

「いいえ。」

そう簡潔に答えた彼女は。  
ぎゅっ!!

先ほどよりも勢いよく距離を詰め、男の握るカップに手を添えた。

「どっつても、好きなんですよ、これ。以前から、ずっつと。」

少女は男に顔を向けたまま流し目でカップを見やり、刺さっているストローをゆっくりと引き抜いた。

それによって、男は自分がカップを握りしめていたことに気が付く。

哀れな紙製のコップは無残な姿に成り果て、結露を滴らせながらころうじて内容物を保っているだけであった。

「以前から、目をつけていたものなんですよ。」

いつも通りのおっとりした口調でささやき、少女は手に持ったスト

ローを机に置いた。

途中、ぽたぽたと緑の液体が床にこぼれる。

少しの粘性を持ったそれはしばらく抵抗したのち、カーペットのシミとなってしまった。

「でも〜」

カーペットが抹茶ラテを味わう様をしばし眺めていた彼女は、ゆっくりと視線を男に戻す。

「まさか先を越されてしまうとは思いませんでした〜」

そういえば、最近グラスがお茶を点てる頻度が上がったなど、男はまだ立っている少女の栗色の耳を見ながら思った。

男は、グラスワンダーに抹茶ラテを紹介されたことはなかった。

「あの子たちが、グラスも好きだって〜」

何気なくつぶやく男。

その瞬間、栗色の三角形は勢いよく絞られ、男の視界から消えた。

ああ。

どうして。

「〜あなたの目に映っているのは、あの子たちの目に映った私の姿なのですか？」

美しい美しい、透き通った青色の目をまじまじと見た男の手はついに、カップを離してしまった。

「実際、トレーナーさんとグラス先輩って、どうなんだろうね？」  
「そりゃあれでしょ。尻に敷かれてるってやつ。」  
「…アンタ、それ絶対二人の前でいっちゃダメよ……」

### 秋の夜長。

カーペットがうまそうに喉を鳴らす様を見ていたのは。  
月の光を浴び、幾分昔の重厚感を取り戻した古ぼけた椅子だけで  
あつた。

グラスワンダー、盛大にのろける。尚、自爆済み。

あのひとは、鈍い人です。

私の気持ちに、ちつとも気が付かないんですから。

今日のお弁当だって、海苔の下には桜でんぶが敷かれていたんですよ？

きれいなきれいな、桜色の。

……形は、ぜつたいに、内緒ですけれど。

それをあのひとつたらよく見ないで、「おいしい、おいしい」って言うって、ぱくぱく食べちゃったんです。

ものの数分で。

よっぽどお腹が空いていたんでしょうね。

でも、「おいしい」なんて眩しい言葉は、毎日聞きすぎて慣れちゃいました。

ぷんぷんです。

こんな贅沢病になってしまったのも、あのひとのせいなんですからね。

そのあたり、責任を取ってもらわないといけないと思いませんか？

あのひとが私をそう変えてしまったんですからね。

もう、ぷんぷんです。

……でも、まあ、おいしかったなら、良かったですけど。

でも、それとは話が別、ですよね？

まあ、そんな、感じです。

あのひとは、かわいい人です。

私の気持ちを、春のぽかぽかした陽気みたいに、あたたかくさせるんですから。

そういえばあのひとと初めて会った時も、おさんぽにはちょうど良い、うららかな日でした。

あのひとは、迷子だったんですよ。

ふふっ、可笑しいですよね。

中央のエリートトレーナーが、まさか迷子だなんて。

まあ、そんなところもかわいいんですけれど。

え、あ。

……こほん。

……まあ、そんな感じですよ。

あ、でも、最近だって。

あのひとだったら、紅葉の葉っぱを肩につけたまま学園をうろついていたんですよ？

まったく、あんな小さくてかわいい秋をどこから連れ回していたんでしょうか。

風情があるんだか、無頓着なのかわかりません。

まったくもう、仕方のないあのひと。

あ。

……まあ、ともかく、そんな感じなのです。

ともかく、まあ。

なんだか、ぽわぽわしたひとなんですよ？

そんな、ぽわぽわな、感じですよ。

あのひとは、ばかな人です。

私の気持ちに、寄り添っちゃうんですから。

そんなに……そんなに扱いやすいウマ娘ではない、私の心に。

私が骨折したとき、あなたは笑顔で私を励ましてくれましたよね。

……でも、あんなにぎこちない作り笑顔では中等部の生娘一人、騙すことなどできませんよ。

血が出んばかりに唇を噛みしめているのに、目だけ弧を描いて取り繕っても、それは笑顔とは呼べませんから。

……そういえば、あの人も「目」だけで私の鬪志を見抜いてしまいました。

……あのひとよりは、うまく隠せているとは思いますが。

ふふっ、お揃い、です。

私、知ってるんです。

あのひとが、私の見えないところで泣いていたのを。謝っていたことを。

でも、私の病室にお見舞い来るたび席を外して、数分後真っ赤な目で帰ってきたら、私でなくてもわかっちゃいますよ。

看護師さんにも、ばれてたんですからね。

……あの涙が私以外にばれちゃうのはちよつと、癪ですけれど。

怪我をして、今後元通りに走れるかわからないウマ娘なんて、さつさと見切りをつけてしまえばいいのに。

その方が、賢いのに。

……その方が、あのひとのためだったのに。

勝負の世界ですから、仕方ないことですから。

そうなくても、受け入れましたから……たぶん……ちよつぱり、悲しいですけど……

でも、そうはなりませんでした。

……うれしいことに。

……。

……。

ごめんなさい。

嘘、つきました。

本当は、ずっと祈ってました。

あのひとが私を、見捨てませんようにって。

私、わがままですから。

本当は、信じてました。

あのひとなら私を、支えてくれるって。

だって、ずるいじゃないですか。

あんなふうに、一緒に歩んでくれたなら。

わたしのことを、あなたのことのように悲しんでくれたから。

「私のことなど、放っておいてください。」

なんて、言えるわけじゃないじゃないですか。

あのひとは、ばかです。

ばかな、ひとなんです。

わがまままで気難しいウマ娘を担当してしまった。

そんなウマ娘に魅入られてしまった、ばかな、ひと。

……そんな感じ、なんです。

でも、あなたが、言わなかったから。

それがいちばん、悪いんですから。

ばかなんですから。

ばかな男と、ばかなウマ娘。

お揃いです。

おそろい、なんです。

あのひとは、鈍い人です。

「あ、ぐらす。明日もお弁当、作ってくれたりする？」

「もちろんですよ。あ、何か、食べたいものはありますか？」

「お、グラスがそんな風に返してくれるなんて珍しいね。明日はたんぼほでも降るのかな？」

「あら、まあ。そんな悪いことを言うお口はこれですか？」

「い、いひやい！いひやいよ、ぐらす。!!」

「うふふ。それで、何かリクエストはありますか？」

「イテテ……うくん。とはいっても、グラスがつくるものは何でもおいしいからねえ。あ、でもこういう返しがいちばん困るんだもんね。うくん。」

このひとは、鈍い人です。

「あ！あれがいい!!あれ!!」

「はいはい。ちゃんと書いてもらわないと分かりませんよ。」

「あれ！海苔の下に、ピンクのハートがあるやつ!!」

「……」

「あれ？学生時代、よく作ってくれた……っていうか、ほぼ毎日作ってくれてたよね？」

「……」

「最近は何も作ってくれなくて、ちょっと寂しかったんだよね。」

「……このひとは、にぶい、人ですから。」

「え？無視……？ちよつと……いや、めちやくちやに悲しいかも……」

「え？あ、いや、えつと。あの。あ、あれは、急に言われました……」

桜でんぶなんて、普段ストックしてませんから……そ、それに、困ります。お、おかずです。おかずを言ってもらわないと、困っちゃうんですから！」

「あちや、そつかり、残念。でも、そうだよ。普段からそんな用意してないよね。昨日夕食当番だったけど、そんなのなかったね。ごめんね。無理言っちゃって。」

「……」

「じゃあね〜……え、あれ、どこか行くの？もうそろそろ暗くなっちゃ  
うよっ……」

「ちよつと、そこまで〜……」

「あ、なになに。一緒に行くよ。なんか買うんでしょ？荷物持ちする  
よ。それに、夜道だしね。」

「……」

「このひとは。」

このひとは……。

にぶい、人なんですから。

本当ですから。

ほんとですよ？

……そんな、感じなんですから。

……私の大切な大切な、愛しい愛しい、ひとなんですから。

……そんな感じですから、どうぞ、よしなに……

「わあ！桜でんぶ買ってくれるの!?グラス大好き!!」

「も、もう！大きな声で言わないでください!!」

「……グラスダイスキ……」

「そ、そういう問題じゃありませんから!!」

数年かけてようやくトレーナーを手に入れたグラス  
ワンダー

「トレーナーさん、お酒、飲みに行きませんか？」  
「え？」

2月の、まだ寒さ残るターフの上。

私に飲みに誘われたトレーナーさんは少し驚いた様子です。

「しかし、いいのか？君は……」

「ええ、いいんです。引退はもう少し先ですけど、せつかく20歳になっただんですから。」

「そうか……？いや、しかし……」

「それとも、トレーナーさんは私とお酒を飲むのは嫌ですか？」

「い、いや、そういうわけではなく。ただ、意外だっただけさ。てつきり君は——」

「え〜!?トレーナーさんとグラスちゃん、お酒飲みに行くんですか?!  
うう〜うらやましいです!!」

「あら、スペちゃん。」

「スペ。」

トレーナーさんが言い終わるより先に、ともにトレーナーさんに師事しているスペちゃんがこちらに駆け寄ってきます。

「今しがた〃もう一周走ってきました!〃」と言って駆けていったばかりなのに、トレーナーさんのこととなると流石です。

「まあまあ、スペもあと3か月もすれば一緒に飲めるんだから……」

「むう〜〜!!」

「あらあら。」

苦笑しながら宥めるトレーナーさんの右腕に抱き着き、こちらを威嚇するスペちゃん。

ふふっ。まるで妹……いや、わんこのようでとてもかわいいです。

「大丈夫ですよ、スペちゃん。門限までには帰ってきますから。」

「うう〜〜!」

「スぺも成人したら、みんなでまた行こうな。」  
「うう〜」

最終的に諦め、がつくりとうなだれるスぺちゃん。  
心配性ですね。

たった数時間の間では、何も起こりませんよ。

……でも、今日ばかりはあげません、なんちゃって。



「乾杯」

私とトレーナーさんは、学園からほど近い大衆居酒屋へやってきました。

“初めて飲むのがこんなところでいいのか？”と言われましたが、いいんです。

私にとって重要なのはどこで飲むか、というよりもむしろ、誰と飲むか、ということなのですから。

「どうだい？」

「うくん。飲み慣れていないからか苦くて、不思議な味ですな〜。トレーナーさんはおいしいと思いますか？」

「うくん……最初はあんまり好きじゃなかったけれど、段々と飲めるようになって……まあ、おいしいかどうかは別として、好きかな。」

「そういうものですか……うくん、やはりすぐには、おいしさは分からないそうです。」

「無理しなくてよかったのに。飲みやすいカクテルとかもあつたらうに。」

「いいんですよ。乾杯は、ビールがしきたりみたいなのなのでしよう？」

「まあ……でも、最近はどうでもないらしいよ？」

「あら、そうなのですか？」

「ああ。この前同僚と飲んだ時なんて――

他愛のない話をしながら、お酒や料理をどんどん消費していきま  
す。

私がどんどんと勧めるからか、トレーナーさんの顔はすぐに赤く  
なってなんだか口調も定まりません。

なるほど。どうやらトレーナーさんは、酔うと少しフランクな口調  
になるみたいですね。

「――それよりぐらすちゃんは」

「あらあらそんな”グラスちゃん”だなんて。いつも通り、”愛し  
のグラス”でいいんですよ？」

「そう呼んだことはないかな。」

既に何杯目かわからないジョッキに二杯目のカクテルが入ったグ  
ラスをかちんとぶつける。

素面ではなかなか、こんなやり取りはできませんね。

「それより、どうするの？これから。」

「えーと、お嫁さん、とかですかね？」

「はッ。」

「あら〜？」

「冗談です。」

「あら〜。」

目をとろんとさせながらも、軽口に付き合ってくれるトレーナーさ  
ん。

……でも。

「トレーナーさん。あの……その。あの――」

「……アイツのことか。」

「……ええ。」

“アイツ”だなんて。

あんなに仲よくやっていた相棒を呼ぶ言葉でしようか。

……いえ、仲が良かったからこそ、なのかもしれないね。

「俺も、知らないよ。夢破れて中央を去る奴は少くないから、仕方ないと言えば仕方ない……」

「……」

「でも、何も……まだまだチャンスはあったのに……」

やはりトレーナーさんの心の中には、まだまだ“アイツ”の影が残り続けているのでしょう。

……このもやもやを晴らさないことには、なんとも。

私がこの先に進むことは、できません。

「連絡とか、取っていないんでしたっけ？」

「前も言ったかもしれないけど、一切取ってないよ。……どこで何をしてるのかも、さっぱり。」

「そうですか。」

「あ、すみません。これもう一杯お願いします。……何か飲む？」

「あ、私は大丈夫ですよ。」

「わかった。とりあえずこれだけでお願いします。」

「……」

トレーナーさんにとっても、決して話して気分良い内容ではなかったのでしょう。

傷をアルコールで洗い流すかのように、追加オーダーをしています。

彼がどれくらい飲めるかは知りませんが、だいぶ飲むペースが速いのではないのでしょうか。

「すみません。せっかくの席でこんなこと……」

「いいんだよ。酒の席でしか話せないこともあるしね。」

「ありがとうございます。……少し、お手洗いに失礼しますね。」

「うん。」

—— お前、■■■で、あんなところで、何やってんだよ ——

去り際、確かに、そんな呟きが聞こえました。

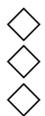
……やはり。

トレーナーさんはやはり……

“酒の席でしか話せないこともある”ですか。

……なかなか、言い得て妙ではありませんか。

彼の不用心な眩きを拾った耳をせわしなく動かしながら、私は店の奥へ歩を進めました。



「あ、グラス。お帰りデス。」

「ただいまです、エル。」

あの後、私は平静を装ってテーブルに戻り、何事もなかったかのように彼と酒を飲みました。

正直もう、何かを飲みたい気分ではありませんでしたが、これも大人の付き合いというものでしょう。

トレーナーさんもあの後には普通でした。

あんなに酔っていたのに、お会計も恙なくこなして。

やはり社会人というか、大人の男なんだということを実感します。

「ふう……」

……予想していたこととはいえ、なかなかハードルは高そうですね。

でも、これも私が進むため。

超えなくてはいけない、壁なのです。

「どうしまシタ？」

「いえ、なんでもありませんよ。明日バイトなのに、少し飲み過ぎてしまったかなと。」

「ははくん。さてはグラス……初めての飲酒なのに、節操なしデスね！」

「エ〜ル〜？あ、もしかして酔い覚ましの運動に付き合ってくれるのですか〜？」

「ケツ!?な、なんでもないデス!!エルも明日早いので、もう寝マス!!で

は、おやすみデス!!」

「あらあら〜。」

“グラスが引退したら、一緒に飲もうね!!”

……彼は、あの約束を覚えているのでしょうか。

トレーナーさん……

……“アイツ”がいなくなってからというもの、私は心乱されてばかりです。

二人きりのときは、こんなことになるなんて思ってもみませんでした。

「……」

手帳に挟まれた、新聞記事のスクラップ。

これを寝る前に見るのが、私の日課。

一年目、私が初めて重賞を取ったときの記事。

決して大きな記事ではないけれど、記事の中では彼と私がトロフィーを携えて笑い合っています。

「……」

また、あの頃に。

あの頃みたい。

戻れるでしょうか。

「そろそろ、寝ますか。」

おやすみなさい、トレーナーさん。

そう心の中でつぶやき、私はスクラップを手帳にしまいました。

◇◇◇

「あら、グラスちゃん！おはよう！」

「おはようございます〜」

翌朝、いつも通りに目を覚ました私はいつもの和菓子屋にアルバイト

トへ向かいました。

初めての飲酒、二日酔いや寝坊は少し心配でしたが、そこは大和撫子としての矜持が勝ちました。

「新聞見たわよ。グラスちゃん、引退しちゃうのね。」

「ええ、もう少し先ですけど。次の3月のレースを最後に引退します。」

「グラスちゃんが走るのを見れなくなるのは寂しいけれど、お疲れ様。あ、でも引退するってことは、もう学校……というか、バイトも辞めちゃうのかしら?」

「もう、気が早いですよ。卒業までは学園にいますし、バイトも続けさせてもらいたいです。」

「あら、そうなの!!ありがたいわくくグラスちゃんみたいな可愛い子がいるだけで、売り上げも店の雰囲気も全然違うから!!」

「ありがとうございます〜」

ええ、卒業までは。

いろいろと、やり残したこともありますしね。

「でね。あ、そうだグラスちゃん聞いて!」

「どうしました?」

「今朝の朝刊でグラスちゃんが引退するって報道されたでしょ?あ、それで今朝から常連さんの予約の電話かかりっぱなしよ。あ、ごめんなさい。それが本題じゃないわ。」

「その中にね、とつても珍しい予約が入ったのよ。」

「まったく知らない方でね、”和菓子の郵送はやってますか?”だって。」

「そんなこと聞かれるの初めてだったから、びっくりしちゃった。んで、とりあえずどこまで届けるのか聞いたのよ。」

「そしたら、どこだったかしら……ちよつと地名は忘れちゃったけど、確か東北の田舎の方だったと思うわ。」

「……珍しいですね〜それで、どうしたんですか?」

「すつごく迷ったけど、”是非食べたい!”って言われちゃって。なんでも、このあたりに一度来た時に食べた味が忘れられないんだっ

て。うれしいわよね〜」

「だから、受けちゃったのよ〜。こういうのって、どうしたらいいのかしらっ?」

「もしよろしければ、私が届けますよ〜ちょうど、私もそちらの方に用があつたんです。」

「あら、気を遣わなくていいのよ。ただ、グラスちゃんならネットとかにも詳しそうだから聞いてみたの。そういうサービスとかないのかしら?」

「あるにはありますが、期間的にすぐにというわけにもいかないでしょうね。本当に、私が届けても大丈夫ですよ?旅行がてらいって、届けてきますから。」

「でもねえ〜グラスちゃんだつてまだ学生なんだし、そんな負担をかけるわけには……」

「いえいえ〜大丈夫ですよ。それに、学生生活でずっとお世話になっているこの店のお菓子を食べたいと言ってくれる方がいるんですもの。どんな男性か拝見したいです〜」

「そう?悪いわね、いつも。」

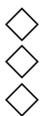
「それで、お届けするのはいつ頃ですか?」

「たしか……3月の中頃……あら?グラスちゃん、レースの日程と被らない?」

「大丈夫ですよ〜」

「そう、えーと、今メモとってくるからちよつと待っててね〜」

「は〜い♪」



ついに、この時が来た。

……来てしまったと、言うべきか。

グラスワンダーの引退。

ひと月前に新聞で報じられ、今日がそのレース当日だった。

諸事情により映像でその勇姿を見届けることができなかつたのは残念だが、ラジオで彼女が勝利を収めた様子を確認することができた。

「感慨深いなあ……」

彼女の引退日に祝宴をあげることができないのは残念だが、どうせやるのならしっかりと。

きちんと準備をして明日、彼女の引退を、勝利を祝おう。

「ふう……」

もう夕飯を食べて風呂に入り、後は寝るだというのに、まだ昼のレースの興奮が冷めやらぬ。

あの末脚。

実際に見てはいないが、素晴らしいものだったろう。

どんな逃げウマでも、彼女の末脚から逃れることはできなかったはずだ。

「少し、夜更かしするか。」

「ごそごそと、戸棚をいじる。」

そこには大量の新聞のスクラップと、ひと際丁寧に飾られた日本酒があつた。

「懐かしいなあ。」

これは重賞初勝利。

これはGⅠ初制覇。

これは……

これは……

「おや、もうこんな時間か……」

机の上には、不思議な光景。

幾つものスクラップが所狭しと並べられている机。

そのスクラップには、二種類あつた。

普通のもの。

そして、栗毛の少女の隣が真っ黒く塗りつぶされているもの。

よく見ると、とある期間までのスクラップは一部が黒塗りにされ、

それ以降は普通だ。

もつとも、この男はそんなことをまったく気にしていないが。

「ふぁ……」

夜も更けてきた。

眠気も十分。

「明日は荷物も届くし、そろそろ寝るか。」

……おやすみ、グラス。

そう心の中でつぶやき、電気を消、そうとした瞬間。

……こんこん。

「おっ？」

戸がたたかれた。

誰だろうか、こんな夜更けに。

寝ぼけているし、気のせいだろうか？

こん、こん、こん。

「ふむ。」

いや、気のせいではないようだ。

どうにも、こんな夜更けに人の家の戸を叩く不躰な来訪者がいるら

しい。

そういえば、学園で似たような体験をしたトレーナーもいるとか。

……まあ、自分には関係ないが。

こん、こん、こん。

「うくん……」

迷う。

こんな夜更けに。

すごく丁寧なノックだ。

だが、逆にそれが不気味でもある。

例えばトイレを貸してほしいとか、そういった緊急の用事だったら

もつと切羽詰まっているはずだ。

こん、こん、こん。

「はぁ〜」

まあ、仕方ない。

大方ろくなやつではないだろうが、何せ今宵の自分は機嫌がいい。出てやろう。



「はいはい。こんな夜更けに誰ですか——ツ!!」  
がつ。

半ば反射的に、戸を閉める……これが何の意味も持たない行為であることは分かっているが。

扉を、開けるべきではなかった。

いや、でも仕方ないと思う。

こんな東北の片田舎の寒村では、映像で確認できるインターホンなんてないのだ。

いつもは近所のじいちゃんやばあちゃんしか訪ねてこないものだから、油断していた。

しかしまさか、足を突っ込んで止めるなんていう、漫画みたいなことをやられるとは思わなかった。

「あつ……」

……つっこまれた脚は、左脚。

そっちの、脚は。

無意識に、力を抜いてしまった。

がらがら。

「こんばんは〜♪」

「和菓子のお届けに、参りました〜♪」

「おや？どうしたのですか、トレーナーさん。夜分遅くで失礼なのは承知の上ですが、無反応だと寂しいです……」

なぜ。

「あ、でも、私が骨折した脚、覚えていてくれたんですね♪」

どうして、ここが。

「私のことを覚えていてくれて、うれしいです♪トレーナーさん。」

「……っあっ……だ、だれ」

「あ、大声は出さないでくださいね？私とて、手荒な真似はしたくないですから。」

なぜきみは、そんなにふつうでいられるんだい？

「ぐ、ぐら、す。」

「はい、トレーナーさん♪あなたのグラスワンダーです♪」

そういうと、風呂敷包みをもった彼女――

グラスワンダーは、建付けが悪い我が家の扉を優しく閉めた。



私、逃げられてしまったんです

とつても寂しかったです。悲しかったです。

トレーナーさんは知らないと思います。私、泣いてしまったんですよ？

エルに涙を見られてしまって、慰められたのは不覚でした。

“我未だ木鶏たりえず”

この言葉を使うのは、あの日以来ですね

でも、ずるいですよね？

自惚れではないですが、私の末脚があれば逃げられることはなかった

たはずなんです。

誰かさんが、私がゲートに入っていないにも関わらず出走してしま  
うから。

それではいくら、私の末脚が。

……あなたの育てた末脚が鋭いとはいっても、追いつくことはでき  
ませんよね。

……目を、逸らさないでください……はい、よくできました♪  
つらかったですよ。

“怪物”なんて言われていますけど、私だっていたいけな乙女です  
から。

……今のは笑うところですよ？

でも、つらかったのは本当です。

トレーナーさんに、あなたに、逃げられた。

いえ、見捨てられたんですから。

“違う”？

何が違うかは分かりませんが、私はトレーナーさんに発言を許した  
覚えはありませんよ。

……いい子ですね♪でも、目を逸らしてはいけませんよ。三回目は  
ないです。

いろんなことを我慢しました。

嫌なこともいっぱいありましたけど、耐えました。

……本当は、初めてのお酒はあなたと飲みたかったですよ？

あなたが約束を覚えているかは、分かりませんが。

でも、感謝もしているんです。

この経験で、私は気づきましたから。

気づけましたから。

……謝らないでください。

私は怒っていませんし、あなたに謝ってほしいわけではないですか  
ら。

本当ですよ？

本当に怒ってなんていないですから。  
むしろ、今でもあなたを慕っています。愛しています。  
あら……泣かないでください。  
そんなにうれしかったんですか？  
……だから、謝らないでください。

……。

……。

……謝らないでください。

謝るな。

私を見ろ。

……。

出来ないんですか。

そうですか。

悪い子ですね。

怒っていないのは本当ですよ。  
愛しているのも本当です。

でも、私はあなたを憎んでいます。

なぜ？

なぜ私の前から逃げたんですか？

なぜ私を見捨てたんですか？

なぜ？

言っただじやないですか？

あなたが私の星だって。

私の道を、照らしてくれるって。

言っただじやないですか？

あれ、嘘だったんですか？

違わないです。

あなたは逃げたんです。

見捨てたんですよ。

……謝らないで。

だから、謝るな。

こつち、見ろ。

私を、見ろ。

おい。

……トレーナーさんが、こんなに聞きわけが悪いとは思いませんでした。

ふう。

あ、でも私、本当にトレーナーさんを愛していますし、感謝もしています♪

本当ですよ。

ここまでこれたのも、あなたのおかげ。

いきなり道標となる星が消えてしまったのには驚きましたが、なんとかここまで来れました。

……暗い道を、真っ暗な道を走るのは、つらかったですよ。悲しかったですよ。寂しかったですよ。

でも、それだけオモイも強くなりました♪

そして私がこうなったのも、トレーナーさんのおかげ。

あなたの、おかげですから。

もう、逃がしませんから。

ああ、泣かないで。

怒ってませんから。

ああ、謝らないで。

もう寂しくないですから。

でも、まだつらいです。

悲しいです。

そう簡単には癒えません。

赦せません。

ですから、ちゃんと責任、とってくださいね？

あなたがこうしたんですから。

私を、こうしたんですから。

……だから、こつちを見てくださいってば。

……はあ。

もう。

「悪いトレーナーさん。」

……それは今更ですね。

責任を取ってもらう前に、罰を与えなくてはいけませんか？

喜んでください。

いまに赦されますから。

だから、泣かないで。謝らないで。

……あ、また目を逸らしましたね。

耳の付け根を嗅がれて悶えるグラスワンダー

“ いい香りがする人とは、相性がいい。 ”

パソコンをかたかたと鳴らしながら男はふと、そのような噂を思い出した。

はて、どこで聞いた噂であったか。

学園内で何気なく耳にしたかもしれないし、この前のトレーナー同士の飲み会で耳にしたかもしれない。

まあ、どこで聞いたかはさほど重要なことではないか。

くんくん。

ふむ、安物のコーヒーではあるが、なかなか良い香りではないか。自分とこのコーヒーは、もしかして相性が अच्छいのかしら。

そんなバ鹿なことを考えながら、男はゆつくりとコーヒーを口元に近づける。

「あちつ。」

熱い。

いや、淹れたただから当然ではあるが。

ちなみに、男は猫舌である。

相性が अच्छいなんて、前言撤回だ。

こんなにも鋭い牙をむいてくる即席コーヒーなんぞとは、よろしくやっていけるわけがない。

まったく、とんでもない飲料である。

男は疲れを訴える目頭を押さえながら、もはや泥水としか見えなくなった眼前のマグカップを睨みつける。

ちなみに、男は昨夜寝ていない。

寝る前に一つ、トレーニングの本を読み返していたら思いのほか興が乗り、いつの間にかお日様とおはようを交わしていた。

「……あんまり、おいしくない。」

ちびちびとインスタント泥水（仮称）を口に含みながら、男は顔を顰める。

第一、こんなコーヒーよりももつと、グラスが淹れてくれた茶の方がよっぽどいい匂いだ。

「……」

ふと、男の脳裏に栗毛のおっとりとした少女の姿が浮かぶ。

うむ、彼女が淹れてくれる茶は何とも、香り高い。

男は少女の淹れる茶が大好きであった。

きつと、自分とあのお茶の相性は◎に違いない。

男はやはり、くだらないことを考えている。

繰り返すが、男は寝ていない。

「!!」

そんな徹夜明けで、食べ終わったシーザーサラダの皿の上で忘れられたクルトンのようにしなびた男は、いきなり目を見開く。

“彼女は、自分のにおいをどう思っているのだろうか?”

いや、これは何も、変な意味ではない。

彼女……グラスワンダーは言うまでもなくウマ娘。

つまり、人間である自分とは一線を画す嗅覚も持ち合わせている。

くんくん。

男は急に不安になり、自らのにおいを嗅ぐ。

徹夜明け。

寝る前に風呂に入ったのはもちろん、念のため朝もシャワーを浴びた。

「……わからない。」

だが、人というのは自分のにおいは分からないものである。

現に、自らのにおいを確かめた男も己がにおいをわからずにいる。

ううむ。

男は腕を組み、悩まし気に目をつぶる。

少女とは、それなり以上の信頼関係を築いてきた自信がある。

それを“相性が良い”と呼んでよいかはわからないが、少なくとも

悪くはないのではないか。

いや、しかし。

しかしである。

うまくやっている（と、自分は思っている）少女がその実、自分のことを“臭い”とでも思っていたら。

くんくん。くんくん。

だめだ、分からない。

臭いと思われていたら辛すぎる、申し訳なさすぎる。

どうしたらよいのだろうか？

一等星の少女のトレーナーに、おすすめの柔軟剤を聞きに行くべきか？

はたまた、カワイイ少女のお兄ちゃんに、お香を分けてもらおうべきか？

「……」

分からない。

ひとまず男は制汗シートを手にとった。

その後、自分の服と部屋中に、念入りに、それはもう念入りにファブリーズをぶちまけた。

◇◇◇

“いい香りがする人とは遺伝的に相性がいい。”

そんな爛れた噂を、そしてその発信源が隣の寮の長であることを、グラスワンダーは未だに信じていなかった。

“だいたい、“遺伝子的に”とはどういうことだろう……つまり、そういうことなのだろうか？

……だって、仮にそれが、噂が事実だとしたら、私は……  
ぶんぶん。

トレーナー室に向かう道中、ほんのり赤くなった自分の顔を戒めるように顔を振る少女。

自分は大和撫子であると言い聞かせ、平静を装う。  
いつからか広まったこの噂はあつという間に学園中に広がり、今や

年頃のトレセン生たちの話のタネになっている。

だが、だからといって、自分もそれに乗じるべきではない。少女はそう考えていた。

仮に、総大将が、一流が、トリックスターが、怪鳥が。

そのどれもが各々のトレーナーの匂いに現を抜かしていたとしても。

自分は大和撫子然とし、いつも通りふるまうべきであると。

「……」

ここで少女はふと、己の言動を振り返る。

あれはとあるレースの日。

「やりました〜トレーナーさん♪」

「や、やったな、グラス!!」

強者ひしめくレース。

それに勝利した二人のテンションは、最高潮であった。

故に。

ぎゅつと。

そのままの勢いで。

彼と、トレーナーとハグをしてしまった。

「……」

下心なんて、本当になかった。

ただこの勝利を、感動を、彼と分かち合いたかっただけ。

あくまでそれだけだから、これはきつと、トレーナーとウマ娘の健全な在り方なのだ。

たぶん。

きつと。

だから。

“トレーナーさんの匂い、落ち着くなあ”

とか。

“トレーナーさんの心臓、ばくばくしている。”

なんて。

なくんて思ってしまったって、その後から日常的にハグをねだっているもそれは、健全なトレーナーとウマ娘の信頼関係なのである。

Q. E. D.

「!!!」

だが。

だが、待てよ。

もし、もし、仮に。

彼が、自分のおいを好ましく思っていなかったら？

くん、くんくん。

だめだ、自分自身のおいなぞ、まったくわからない。

どうしよう。

いつも優しく抱きしめてくれる彼がその実、自分のことを、その

……くさいと感じていたら。

だめだ。

仮にそうだったら白無垢で短刀を腹に突き立て、彼に介錯を頼むほかあるまい。

自分の遺灰はぜひとも、たんぽぽ畑に撒いてほしい。

脳内で存外愉快なことを考えている大和撫子な栗毛少女は。

しきりに自分のおいを確かめながら、トレーナー室に向かっていった。

◇◇◇

“今日は少し、彼との距離を考えよう。”

目的地にたどり着いた少女は、重厚そうな扉を開けるのをためらいながら考える。

そして、何気ない会話から彼の本心を探る。

ハグをねだるのは、それからでも遅くない。  
とんとんとん

どうぞく

がちやり

ふう。

一つ深呼吸をして、ご挨拶。

「こんにちは、とれ……」

「いらっしやい、グラス……？」

すん。

すん、すんすん。

「……」

「グラス？」

すんすん。

「おーい？」

すんすんすんすん。

「どうしたの？」

「……しません。」

匂いが。

「え？」

「誰ですか。」

匂いが、しない。

「誰って、そりや、まごうことなく君のトレーナーなのだけ……」

「誰と、ですか。」

「ほ？誰と??」

「あくまでしらを切るんですね……」

男には、彼には、前科があった。

あくる日、いつものように登校していると。

彼と、あの緑色の学園秘書が朝帰り（意味浅）をしていたのである。

あの日は大変だった。

体からあの人の二オイを漂わせ、“何も知りませんよ”なんて顔  
をしている彼の隣で自分を保つのは。

あれでやる気などが上がる自分自身は本当に解せない。

執拗に二オイのことを尋ねたからか、“徹夜明け……まさか加齢臭……!?”と勘違いしてファブリーズを浴びる男の姿はなかなか愉快であったが。

ともかく、男は前科持ちであった。

「誰と、ですか。」

「いや、グラス、何のことかさっぱり……」

少女は耳を振り絞り、じりじりと男に詰め寄る。

自分がほんの数秒前、“距離に気を付けよう”と考えていたことなど、頭の片隅にも残っていなかった。

「……」

ぎゅっ。

「ちよ、グラス!?!」

すんすん。

いきなり抱き着いてきた担当に驚く男を無視し、少女は容疑者の取り調べを始める。

すんすん。

部屋だけでなく、男からも匂いがしない……  
不自然なほどに。

「あの、グラス……これはいったい?」

「……」

すん、すん。

……匂いが、しない。

ぴこ、ぴこ。

ぴこ……

少女の感情は、なかなか複雑であった。

ここまで念入りに部屋も己も消臭するなど、一体誰と何をしたのか。

彼の匂いも、あの落ち着く良い匂いも、しない。

「……」

「???」

一方の男は困惑していた。

わけのわからぬことを言いながら耳を絞って抱き着いてきたかと思えば、今度は悲しそうに耳をぴこぴこことさせている。

いくら良い信頼関係を築いてきたパートナーとはいえ、今の彼女を推し量ることは難しい。

徹夜明けの男の脳は、疑問と少女の感触でもはやショート寸前であつた。

だから。

ぴこ、ぴこと。

「……」

眼下で揺蕩う栗色のかわいらしい耳のその付け根を。

混乱した男が、衝動的に嗅いでしまつてもそれは、仕方のないことなのである。

◇◇◇

すんすん!?!?

「?……?!?!?!」

「おー!?!?!?!」

少女は驚いた。

それはもう、驚いた。

おそらく、この世に生を受けてから最大の驚愕ではないか。

「なななななな、何をしているんですか、トレーナーさん!」

それもそうである。

いきなり男が自らの耳の付け根に鼻をうずめてたらそれはもう、驚く。

「いやだって、グラスもなんか僕のおい嗅いでるし……お互い様か  
なって。」

「そ、そんなわけないじゃないですか!?!その、だって……あの、その、

に、におう、かもしれませんし……」

消え入りそうな声でか細くつぶやく少女。

少女は漸く、冷静さを取り戻し始めていた。

「すんすん。」

「?!?!」

「すると徹夜明けの男は再び、容赦なく。」

少女の耳の付け根を嗅ぎ始めた。

「いや、全然くさくさなんてないよ。むしろ落ち着くというか……ともかく、すごくいい匂いだから安心しなよ。」

「!」

なんとデリカシーのない男であろうか。

だが、当の男は安心していた。

今改めて少女の匂いを嗅いだが、とても良いにおいであつた。

つまり少なくとも、自分↓少女の相性は良い。◎ともいうべきだろう。

それに冷静に考えてみたら、今も含めてこの少女はよく自分のにおいをかいでいた。

少なくとも、臭かったらそんな芸当はできないだろう。

人間よりも鼻の効くウマ娘のことだ、決して彼女にとつても、悪いにおいではないはず。

「ふう。安心したよ。僕とグラスの相性は決して悪くないみたいだ。」

「?!?!」

「最近噂になつてるよね。今日ふと、猛烈に気になつてさ。とつてもいい匂いだったよ、グラス。」

「……」

「自惚れだったら申し訳ないけど、グラスも僕のことを“臭い”とは思つてないよね? いつもハグするとき嗅いでたし。」

「?!?!」

「よし、解決したらなんだか気分も晴れやかだ。それじゃ、今日のトレーニングを……グラス?」

「……きゆう。」



季節外れの爆弾低気圧を伴ってトレーナーに迫るグ  
ラスワンダー（湿度◎）

ちくり、ちくり。

栗毛の少女が、自室で編み物をしている。

休日の夜更けにちくちく、ちくちくと編んでいる。

慣れた手つきでかぎ針を縦に横に。

編み物に詳しくない者が見てもうまくいつているのかいないのかよくわからないが、彼女が穏やかな笑みを浮かべているということはきつと、良い具合なのだろう。

ちくちくと、少女は編み進める。

いや、編み物に「ちくちく」なんていう音をあてるのは不自然かもしれない。

だが、少女の編む様子を見るに、どうもその音がぴったりなのである。

柔らかな、見るからに柔らかそうな、もこもことしている栗色の毛糸を操っているのだが、ちくちくという、鋭利な音がぴたりとあてはまるのである。

少女は編んでいる。

かぎ針を動かすたびに、自らのおもいを念じながら編んでいる。

このところ急に、朝夕が冷え込むようになってきた。

それで、この少女は「マフラーでも編もうか」と思い立ったわけである。

だが、何も自分のために編もうというのではない。

少女は既に今年のクリスマスにとある男からマフラーをもらっていたから、これ以上首元の暖は必要なかった。

では、なぜか。

数日前のある朝のこと。

男、少女と毎日一緒に学園に登校しているある男が、くしゅんと一つ、くしゅみをしたのである。

男はくしゃみをした後、昨年の聖夜に少女がプレゼントした栗色の手袋を口元にもつていつて「寒い、寒い」という。

そんな男をじっと見つめたところ、彼は申し訳なきように首をすくめたのである。

「グラスも、体調には気を付けるんだよ。」と首を縮こませながら言う男に、「ならばまず、自分の体を労わらねばなりませんね。」と返しながら少女は思案する。

ばつが悪そうに隣を歩くこの男にはどんな色のマフラーが似合うだろうか、と。

彼は専ら、黒いスーツで登校する。

その上には、濃紺のトレンチコート。

手袋には、栗色でアクセント。

ふむ。

ちよつと早足になった男の手を控えめに握り、自分の隣に落ち着かせながら少女は考える。

何色がいいだろう。

彼らしい色。

ふむ。

おお、そうだ。

恥ずかしそうに手を握り返してきた男の手を、先ほどより幾分か強く握って、少女は思いつく。

白。

白色のマフラーなんて、どうだろう。

紺色と、栗色と、白色。

これに赤のネクタイでも締めてもらえれば、彼がどういうトレーナーであるかは一目瞭然ではないだろうか。

少し遠回しかもしれないが、自分だってG1ウマ娘の端くれ。

勝負服のカラーリングだって、それなりに認知されているはずである。

うん。

うんうん。

我ながらなかなか、よいアイディアではなからうか。

紺のコート、白いマフラー、栗色の手袋。

うん、実に彼らしい。

彼がどういう人間であるかを、端的に表している。

そうしよう。

きっと、そうしよう。

名案が浮かんで早足になった少女によって、今度は男が引つ張られる。

ともかく、そんな具合で少女はマフラーを編むことになったのだ。



となると、彼女が編んでいる栗色のマフラーは一体何なのか。

実はこの少女、白いマフラーを男に渡すことを断念していた。

「……」

“みしり”という、おおよそかぎ針からは聞こえてこないであろう音を奏で、少女は笑顔で想起する。

あの朝から、少し経ったある日。

グラスワンダーはというと、彼女はせつせと白いマフラーを編んでいた。

少しばかり、長めに。

このマフラーを送ったら彼はどんな顔をするだろうか、とか。

このマフラーを付けた彼とどこへ行こうか、とか。

ひよつとしたら、ひよつとして、このマフラーが自分たち二人を温めてくれるかも、とか。

そんなふうにな年相応にかわいらしく浮かれながら、少しばかり長めにマフラーを編んでいた。

「♪」

実に楽しそうに、にへらと笑いながら少女は編んでいたのだ。

それはまるで、誰かを想っているかのように穏やかで。ともかくそんなふうに、少女はマフラーを編んでいたのである。

しかし、半分くらいが編み終わった頃であったか。

とある大事件が起こった。

大事件とはいっても、“少女にとつて”という文字が入るのだが。まあ、もったいぶって話すほどのことでもない。

男、数日後に白いマフラーを手に入れるはずだったとある男が、緑の秘書と朝帰りをしたのである。

ただ、それだけである。

なんだそんなことかと思うかもしれないが、少女にとっては大事件で。

少なくとも、こんな大罪不貞行為を働いた男をやすやすと赦すわけにはいかないのが、乙女的心情であった。

不貞行為の意味は今一度辞書で調べなおすとして。

「……」

再び、“みしつ”という音が聞こえる。

少女はなおも、穏やかに微笑んでいた。

ただ、白いマフラーを編んでいたときのそれとは違って、まるで感情にふたをするような、そんな笑みを浮かべている。

あの朝。

起きてみたら、“今日は先に行っていてくれ”と簡素なメッセージだけを残していたあなた。

一人寂しく、いつもよりくすんだ空のもとを歩いた朝。

道中のパン屋の前を横切っても、いつもするはずの甘さが溶け込んだバターの香りが全く感じられなかったあの朝。

見せつけてくれる、と、少女は思った。

雪の山道を一步一步踏みしめるような重い足取りで向かった果てにいた、男と緑色の彼女。

“あら”と、少女は笑った。

己が激情を鬱積へと変え、そつと心の片隅に仕舞い込んだ。

その晩、少女はつくりかけのマフラーを丁寧に丁寧に解きほぐした。

ゆるみ切った笑顔で編んでいたあの日の純情を、ゆっくり、じんわりと解きほぐした。

ちなみに一本の糸に戻った白毛玉は、少女の裁縫セットの中に、何事もなかったかのように鎮座している。

ちくり、ちくりと少女は編む。

己の気持ちを一针一针に込め、栗色を編む。

二度と、勘違いできぬように。

誰のものか、はつきりわかるように。

途中でほつれて、男の首から離れ落ちることが決していないように。

編み進める。

さて、と。

おおよそ編み終わっただろうか。

ぶちり。

一瞬の鋭い痛み。

少女の小さな手には、編んでいた毛糸よりもずいぶん細い、それでいて存在感のある栗色の、長いイトが巻き付いている。

それを少女は、マフラーにうまく編み込んでいく。

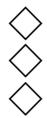
少女が時間をかけて選んだ毛糸と、その一本のイトは同じ色といって差し支えない。

おもいオモイで織られたそれに、ひとときわ輝く一本の情念が溶け込んでゆく。

それによつて、どこか朦朧としていたただのマフラーは“男のマフラー”としてはつきりと形作られたのであった。

真ゴコロを込め、手ずから仕上げたそれを。

少女は大事そうに、大事そうに抱きしめて床に就いた。



明くる朝。

小さな紙袋を持った少女はいつもの交差点で、男を迎えた。相も変わららず、寒そうにする男を。

「おはようございます、トレーナーさん。」

「ああ、おはようグラス。今日も冷えるね。」

「そうですねっすっかかり秋、という感じです。」

信号が青になる。

はやる気持ちを抑え、男と足並みをそろえて進みゆく。

「そういえば、グラス、その袋は何だい？」

かかった。

「ふふ、実はですねっ寒そうにしているトレーナーさんのために……

じやーん。マフラー、編んでみましたっ」

「えっほんと?!」

「本当ですよっ」

横断歩道を渡り切ると同時に、青色が点滅を始める。

「これ、もらっていいの?」

「もちろんですよっそのために、編んだのですから。」

「ありがとう、グラスっ!とってもうれいよ!」

「ではっ」

「?」

ちよいちよい、と手を上下にする彼女。

背後ではまだ、青色の点滅が続いている。

「少し、屈んでいただけますか?私の背では少し、トレーナーさんの首に届きませんから。」

「え、いいよ、自分でつけれるよ。」

「まあまあっそういわずに。せっかくですからっ」

少し強引に男を屈ませる小柄な少女。

ゆっくりと、優しく。

されどどこか豪然と、少女は男の首を栗色で縛り付ける。

「はい、できましたっ」

「はは、ありがとう、グラス。……でも、少しきついかも？」  
「トレーナーさんにはそれぐらいが、ちょうどいいですよ」  
「む。僕はそんなに寒がりではないよ。」

あらあら。

そう呟いた少女は、これ以上ないくらい満足げで。  
すっかり赤くなった信号機が、二人を見つめていた。



トレセン学園の校門は、毎日活気にあふれている。  
朝からバクシンな委員長、そして。

件の緑の秘書が、あいさつ運動をしているからだ。

だが、今日の少女にはゆとりがあった。

なんせ、隣を歩く男の首で、栗色が確かな存在感を放っているから。

「おはようございます。」

「おはようございます、トレーナーさん、グラスワンダーさん。」

「たづなさん、おはようございます。」

少女はいつも通り、大和撫子らしく男の隣で佇む。

芍薬のように優雅に美しく、立っている。

「あ、たづなさん。先日はありがとうございました。とても勉強になりましたよ！」

「いえいえ、こちらこそお話できて楽しかったですよ。……あら、そのマフラーは？」

「あ、これですか？実は今朝、グラスがくれたんですよ。本当に優しくて気が利く子で。」

「あらあら。とても仲が良いんですね♪」

「ええ、それはもちろん！トレーナーとウマ娘として、良い関係が築けていると思います……いてっ」

「あらっ？どうしました？」

「あ、いえ……」

「トレーナーさん、そろそろ時間ですよ」

「あ、うん。ではたづなさん、また。」

「ええ、トレーナーさん。グラスさんも、授業頑張ってくださいね。」

「ありがとうございます、精進します。」

少女と男が、門をくぐってゆく。

その後ろ姿を見送った学園秘書は、困ったような笑顔を浮かべていた。

「トレーナーさん。」

「ん？」

「先ほど、どうなさったのですか？」

少女は、半ば答えを確信しながらも尋ねる。

「あ、いや。ちよつとちくつとして、ね。きつく締めてるからかも。」

マフラーをもらった出前、あまり大きな声では言えないのだろう。

男は申し訳なさそうに、首元の違和感を訴えた。

しかし、それを見た作成者の少女はなぜかうれしそうである。

「すみません、素人が作ったものですので、何卒ご容赦ください。」

「あ、いや！すぐくいい感じだよ。去年もらったこの手袋はまったく

そんなことないし。やつぱり少し、きついからだと思う。」

「あらくでも、たづなさんばかり見て時間を見ていないトレーナーさんにはちようどいいのではないですか？」

「な。そんなことはないよ。」

二人は他愛ない会話をしながら、校舎の中へ消えていった。



その日の午後。

授業を終え、一足先にトレーナー室にいた少女はぽーつとしてい

た。

そしてほんのり赤らめた顔で今朝のことを思い出し、時折ぞくりと震えた。

現を抜かした男を、マフラーに忍ばせた情念が一刺しした。

少女はあの時の男の驚いたような表情を思い出し、満足気であった。

良い。

とても、良い。

あの白いだけの、まつさらなマフラーではできなかつたことだ。

良い。

私のおいを首からまき散らしていることにまったく気づかない、彼。

良い。

あれをあんなにきつく首に巻きつけていたらきつと、外してもしばらくはおいが落ちないだろう。

すれ違つたウマ娘が驚いた顔で男を見るのが、その証左。

良い。

きつと、ちくりと刺された跡をぼりぼりと搔いているのだろう。

少女は、今日一日の男の様子を想像する。

彼は自らの与り知らぬところで、自分が誰のものかを証明し続けているのだ。今も。

彼女は、なかなか倒錯的な感情を抱いていた。

少女はふと、机の上を見やる。

するとそこには、例の栗色が大切そうに置かれていた。

彼の机の上で存在を放つ己の分身に、彼女は思わず顔をほころばせる。

“ これからも、彼から目を離してはいけませんよ。 ”

そう念じながら、少女は机上のマフラーを手に取る。

くんくん。

なるほど、朝しかつけていないとはいええ、なかなか彼の匂いが残っている。

すると彼女はおもむろに、今朝までは自分のものだったマフラーに頬ずりする。

彼の匂いを自らにこすりつけるように。

自らのにおいが、薄れてしまわないように。

ちくり。

頬ずりをしてしていると、時折何か頬をかすめる。

これが、今朝彼を突き刺したイト。

マフラーとしては欠陥品もいところだが、彼女が想定した機能を十分に果たしている。

きつと男は、首元に鋭い痛みが走るたび、栗毛の少女を思い起こすだろう。

そして律儀な男のことだ。

多少使い勝手が悪かろうと、“担当がくれたものだから”と言つて喜んで使うのだろう。

肌寒い季節になれば、マフラーをつける季節になれば。

彼は必ず、このことを思い出す。

それが少女にとつてはたまらなく、喜ばしい。

大きく息を吸って、吐く。

少女はマフラーに顔を埋めたまま一つ、深呼吸する。

これはおまじない。

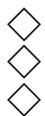
男と少女をつなぐ、少女が男を縛り上げるための、おまじない。

それを終えると、少女は何事もなかったかのようにマフラーを戻す。

部屋には先ほどと同じく栗毛の少女が一人と、その分身が一つ。

そこへ丁度よく、マフラーの持ち主が戻ってきた。

……ライトハローのニオイを引っ提げて。



「やあグラス！今日は一段と早いね。」

男はのうのうと、少女に話しかける。

動いたびに、少女の前を通るたびに、ニオイを振りまきながら。首元のおいはずっかり、薄れてしまっている。

男はさぞ忙しい一日を送ったのだろう。

汗もかいたのだろう。朝よりも一段と彼の匂いが濃い。

その匂いがどこぞのウマの骨のニオイと交じり合っていることが、少女にはたまらなく不快であった。

ずつ。ずつ。

重厚そうなカーペットを、栗毛の少女はしきりに掻いている。

しかしクツシヨン性が高いカーペットの上では音が響かず、男もそれに気づく様子がない。

少女は、猶予を与えたつもりだった。

栗色のマフラーが、それを象徴する。

愚かな男への、温情、愛情。

残念だ、と少女は思う。

おとなしく、マフラーに巻かれていれば。

自分が誰の担当であるかを今一度、きちんと弁えておけば。

栗色の枷は自然と、外れていたのに。

実に、残念だ。

「トレーナーさん。」

いつの間にかカーペットへの蹴りをやめていた少女は、いつも通りに男に声かける。

「なに、どうした？」

「頭に、何かついていきますよ。」

「え？うそ……とれた？」

「いえ。」

「よ……つと。とれた？」

「まったく。」

「どこかな？」

「ふふ。少し、屈んでください。今にとって差し上げますから。」

「ごめんね。お願いするよ。」  
ええ。

間違いないとつて差し上げますよ。  
その、不快な不快な、私以外のニオイを、ね。

◇◇◇

「はい。」

「なっ!!急に何するんだ、グラス!!」

いきなり己の頭をがっちり抱きしめられた男は抗議し、じたばたともがく。

「まだまだ取れませんから、おとなしくしてください」

「何かのいたずらか?だとしたら、驚いた。だからもう、離しなさい  
!」

「あらあら」

「グラス!!」

少女は取り合わない。

それどころか、もがく男をずると引つ張って、ソファへ連れ込もうとしている。

男は必死にもがくが、ウマ娘の膂力に敵うはずもなく、彼女のすきなようにされている。

「トレーナーさくん」

「離すんだ!グラス!何が目的なんだ!」

「目的……強いて言うなら、この行為自体、ですかね?」

「な、なに言ってる……モガッ」

「すこしおしやべりが過ぎますよ、トレーナーさん。」

「……!!!」

少女はもがき、わめく男をいつそう強く己の胸に抱きよせる。

少女の体に、匂いに包まれて、男はもはや窒息しそうであった。

口までも封じられた男は、せめてもの抵抗として少女をきつと睨む。

「そんな怖い顔をしないでください。落ち着いて。深呼吸しましょう。はい、吸って〜」

「……!」

だが、少女は意に介さない。

まるで稚児をあやすように男を抱きしめ、優しく、優しく語り掛ける。

「吐いて〜」

「……」

「まあ、いいです。そのまま聞いてください、トレーナーさん。」

少女はぐつと、一層強く強張った男の体を引き寄せる。

男の視界は、ゆっくり上下する彼女の鎖骨で埋め尽くされていた。

「あなたは一体、誰の担当ですか?」

「……!!」

「あ、答えなくて大丈夫ですよ。しっかり私の声に、耳を傾けてくださいね〜」

「あなたはこの前、たづなさんと朝帰りしましたね。」

「反省したのだと、思っていました。」

「でも、まさに。舌の根の乾かぬ内、ですな〜」

「あんなにも。今も、こんなにも。私以外のニオイをばらまいて。」

「マフラーでは、物足りませんでしたか?」

「あの程度の刺激では。匂いでは。私を感じることはできませんでしたか?」

「ならば、仕方ないですね〜。」

「はい、大きく吸って〜」

「吐いて〜」

「もう一度〜」

「どうですか?」

「覚えましたか?」

「私の匂い。」

「!.....!!.....!!!」

「まだみたいですわね。」

「吸って〜。」

「ほら、吸ってください。」

「肺の中を、すべて私で満たしてください。」

「もう一度。」

「新鮮な私を、体に巡らせてください〜」

「二度と、落ちないように。」

「取れないように。」

「この匂いが。」

「あなたが何者か、直ぐにわかるように。」

「あなた自身も、周囲も、直ぐにわかるように。思い出せるように。」

「.....はい、いい子です。もう一度、吸って〜」

.....

.....

どれくらいの間が経ったのだろう。

男はもはや、ぐったりとしていた。

抵抗する気力を失ったであろう男を、少女は漸く開放する。

だが、相変わらず男は彼女の胸でぐったりしているだけである。

「トレーナーさん。」

少女は男の耳元で、ささやく。

男の体が小さく、ぴくりと跳ねた。

「トレーナーさんは、誰のものですか?」

少女はささやく。

己の声が、男の脳の髄まで響くように。

己の声しか、耳に届かぬように。

「.....僕は」

「は〜」

「.....僕は。」

「はい。」

「……よくできました♪」

「そんなえらいトレーナーさんならば、もう他の女性に目移りしませんね?」

「うん。」

「私だけを、見ていてくれますね?」

「うん。」

「よくできました♪では、もう、戻って大丈夫ですよ。」

「……あつ。」

「どうしました?」

「あの、グラスさえよければ、もう少し、抱きしめてくれないか……?」

「……!」

「だめ、かい?」

「もちろん。もちろん、かまいませんとも。ええ、トレーナーさん。この機会にしっかりと、私を覚えてくださいね。あなたの愛バ、グラスワンダーを、しっかりと覚えてくださいね。」

「うん」

「誰のものか。あなたは、誰か。決して忘れぬよう、しっかりと。」

逃げ切ることができなかつた男は。

ついに、栗色の牢獄にとらわれた。

花言葉を知らずにたんぽぽを贈り、わたわたするグラ  
スワンダー

これは、とある春の日のことです。

麗らかなお日さまの光が柔らかくベッドを温めていて、布団から出るのがなんとも惜しいと感じられるような朝でした。

上半身を起こしてなお未練がましく足を温めている布団にしばしの別れを告げ、私はようやく目を覚ましたのです。

色々と準備をしてふと時計に時間を尋ねると、真ん丸な時間の番人は朝の九時だと教えてくれました。

普段であれば遅刻も遅刻、既に一限目の授業が始まっている頃です。

でも、大丈夫。

今日は泣く子も黙る土曜日なのでから。

ちよつとくらいのおんぴりとした朝を過ごそうが、私を咎める者はいません。

「……」

いつもよりだいぶ遅めの朝食を取りながら、私はぼんやりと考えていたのです。

まあ、「考えていた」というよりはむしろ、春の陽気にあてられた頭にとりとめのないことが浮かんでは消えていただけなのですけれども。

「……！」

とまあ、こんがりさくつと焼けた食パンの耳をようやく口に放り込んだところで、私はふと思立ったのです。

「おさんぽ、しよぼう。」

ありますよね。

ぼんやりとしていたときに。

ふと、急に。

「何かをやるう」と思い立つことって、ありませんか？

まあ、私はたまにあるのです。  
で。

そうすると不思議なことに、私はもうおさんぽがしたくて堪らなくなるのです。

不思議ですよ。

さっきまで何を考えていたかなんて昨日の夕ご飯みたい思い出せなくなつて、とにかく早く外に出たい。

あの陽だまりの下で青草を踏みしめて春の訪れを全身で余すことなく味わいたいと、気もそぞろになつてしまうのです。

まあ、そんなわけで私はおさんぽをしていたのです。

やっぱり、外を歩くのって気持ちがいいですよ。

今日みたいな日なんかは、特に。

なんだかいつもより足取りも軽やか。

まるで弾む心そのまま靴に移ったみたいに、靴底がぽよぽよとしています。

そんな感じで、るるると。

春を迎えて鮮やかにおめかしした草花や木々を眺めながら歩いていたら、お日様が随分と高いところへ昇っていたことに気が付いたのです。

慌てて携帯で時間を確認すると、もうお昼前。

どうやら、二時間近くもおさんぽをしていたみたいです。

あ、休日なのになぜ慌てているかと言いますと。

13時から軽くトレニングをすることにしていました。

彼は「せっかくの休日なんだから、ゆっくり休みな。」と言ってくれたのですが、どうしても少し体を動かしたくて。

私の体を案じてそう言ってくれる彼と。

しばらくの間、じーつとにらめっこをしたら、彼が折れてくれたのです。

うふふ。

理解あるトレーナーさんと巡りあえて、私は果報者です。

閑話休題。

ここからトレセン学園までゆっくり走って30分。

ジャージなどの準備をすることも考えれば、そろそろ戻らないと間に合わないでしょう。

体をほぐし、春の風を感じながらゆっくりと駆け出そう。

……としたところで、私の眼はある一点にくぎ付けになりました。黄色くふわふわで。

花びら——実際は一つの花らしいのですが——一つ一つが元気に弾け、春という季節の訪れを目いっぱい喜んでいるような。

そんな子どものかわいらしいたんぽぽたちが、土手の隅にひっそりと集まっていたのです。

私の足は、ふらふらとその小さな陽だまりに引き寄せられました。近くで見るとまあ、なんともかわいらしい。

小ぶりではありますが、それを感じさせないくらい力強く、爛漫と咲いています。

「わぁ……」

思わず口をついて出た、そのため息のような言葉を誰が聞いていたでしょうか。

返ってくるのは、草花がこすれるさらさらという返事だけ。

「……あ。」

どれくらい眺めていたでしょうか。

再度携帯を取り出しますが、まだ大丈夫。

よかった。

「たんぽぽに見惚れていて練習に遅れました」なんて、口が裂けても言

えませんから。

「……」

どうしましょう。

迷います。

とても、迷います。

この小さな春を彼に見せてあげたくもあります。

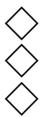
でも、こじんまりと賑やかなこの子たちをそのままにしておきたい気持ちもあります。

「……」

「……」

「……えいつ。」

悩んだ末、私は不思議そうにこちらを見上げていた一輪のたんぽぽを連れて帰ることにしたのです。



「こんにちはら、トレーナーさん」

「やあグラス、こんにちは。良い午後だね。」

「ええ、とつても。」

私が約束の場所についたのは、練習開始5分前でした。

彼はもうそこにおいて、練習用具やらの用意をしていました。

「休日にもかかわらず、お時間をとつていただいてありがとうございます。」

「ははは。どういたしまして。昨日もしっかりと追い込んだんだから、今日は少しだよ?」

「はい。ところで、トレーナーさん。」

「んん?」

その時の私は、浮かれていました。

彼より先に春を見つけたと舞い上がっていたので。

後ろに隠した小さな春を一刻も早く見せたくて。  
自慢したくて、たまりませんでしたから。

「これ、春のおすそ分けです♪」  
だから、練習5分前だということにも関わらず、彼にたんぽぽを手渡し  
てしまったのです。

「これはまた、随分とかわいらしい春だね。」  
子どものようにはしゃぐ私。

そんな私が差しのべた花を彼は大事そうに受け取り、にっこりと大  
輪の笑顔を咲かせました。

「うふふ。」

「これは何か、お返しをしなくっちゃなあ。」

そう言うとは彼は、自分の胸ポケットにたんぽぽを優しく差し込みま  
した。



「んんん？」

担当、グラスワンダーの様子が変になったのは、どうも先ほどの休  
憩の後からだ。

休憩前の練習はいつも通りだったのに、休憩が明けてからはどこか  
そわそわしていて、なんだかこつちをまともに見てくれない。

「はて？」

一体、何が原因だろう。

休憩時間は10分。

その間に彼女は水分を補給し、タブレットで撮影しておいた走りの  
映像をチェックすることしかしていない。

なのに、なぜ。

「おっい、ぐーらすく。」

何であれ、集中力を欠いた状態で練習しては怪我につながる可能性

もある。

一度彼女を呼び、話を聞いてみる必要があるだろう。

◇◇◇

「おーい、ぐーらすす〜。」

「!!!」

自分の耳としっぽがぴんと立ってしまったの感じます。

彼に、名前を呼ばれました。

即ちそれは、彼が私に用があるということ。

油をさし忘れた機械がぎぎぎと音をたてるようにぎこちなく振り返ると、彼が心配そうに手をちよいちよいとしています。

こつちに来てくれ、ということなのでしょう。

……仕方がありません。

覚悟を決めて、不退転。

◇◇◇

「お、きたきた。」

名前を呼んだ途端耳としっぽをこれでもかというほど高く天に突き刺した彼女はぶきつちよに振り返り、観念したようにトコトコとこちらへ歩いてきた。

「ねえ、グラス。」

「ひゃいっ」

「……えっ？」

「……あ……」

名前を呼んだだけで声が裏返るとは、いったいどうしたことか。

普通の彼女らしくもない。

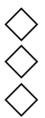
「グラス、どうしたの？」

彼女を心配しているこの気持ちが少しでも伝わるように、努めて優しく声をかける。

すると彼女は顔を真っ赤にしてわたわたとしながら、

「た、たんぽぽ！」

と、言い放った。



何を言っているのだろう、私は。

いきなりたんぽぽと叫ぶなんて、気がふれてしまったと勘違いされてもおかしくはない。

「あの、こ、これは。」

まずい。

思考がまとまらない。

何を考えようにも、先ほど休憩時間にタブレットで調べたことが脳裏にちらつく。

「これは、ですね。その。」

彼を見ると、“大丈夫だよ”と言わんばかりの優しい目をして私の発言を待っている。

一方、胸元のたんぽぽは意地悪そうにニヤニヤとして、私を見つめている。

友人たちのもとから連れ去った私が、そんなにも憎いのでしょうか。

「あの。」

だめです、何か、何か言わなくては。

「その、たんぽぽ、かわいいですね!？」

……やってしまいました。

彼を見ると、呆氣にとられたのかぽかんと口を開けています。  
本当に僅かの間。

彼がそうしていたのは本当に僅かな時間なのですが、私にとってそれは永遠にも感じられる時間でした。

……おさんぽをしていた時はあんなにも、時が過ぎるのが早かったのに。

「ふふふ、そうだね。とってもかわいいよ。」

正気に返った彼はくつくつを喉を鳴らしながら、そう答えた。

たんぽぽはまるで、大爆笑しているかのようだ。

「……でも、集中力が切れると危ないからね。もともと休みだし、今日はここまでにしようか?」

「……大丈夫です。まだ、やります。」

「うん、そっか。じゃ、もう少し頑張ろう。」

ああ。

穴があつたら、入りたい。



かわいいそうなくらい顔を真っ赤にした、いつもより小さくなったように見える彼女を解放すると、それはもうとんでもない速さで駆けていった。

「本当に、かわいいらしいね。なあ?」

ポケットのたんぽぽを優しく撫でながら語りかける。

どうやら、このたんぽぽが彼女をわたわたさせた原因とみて間違いないらしい。

「どれ。」

となると。

先ほどまで彼女が見ていたタブレット、その検索欄に答えがありそうだ。

少し意地悪いことだけど。

「……ふむ。」

花言葉、ねえ。



二人の男女が歩いている。

一方は中肉中背の男。

もう一方は、やけに縮こまっている少女。

「今日は……情けない姿をお見せしてしまい、申し訳ありませんでした。」

「いやいや、気にしないでよ。」

「しかし、私から練習を求めておいてこのざまです。」

「グラスは自分に厳しいねえ。せっかくの週末なんだし、ゆるつといいこう?。」

「しかし……」

少女は何やら謝罪している。

男は気にしていない様子だが、少女は食い下がらない。

「あ、じゃあこの後少し、付き合ってくれる?。」

「この後、ですか?。」

「うん。罪滅ぼし……とはちよつと違うね。あ、もちろん予定があったら大丈夫。」

「いえ、予定はないのですが……それでは……」

「まあいいからいいから。」

「……わかりました。」

納得のいっていなさそうな少女も、男についていくことを決めたようだ。

「ところで、どちらへ行かれるのですか?。」

「それは着いてからのお楽しみ。」



「ここは……」

男が先導して二人がたどり着いたのは、とある花屋であった。

「少し待っていてね。」と言い残した男は店先に少女を残し、何やら店員と話している。

「……」

待たされている少女は突っ立っているのもどうかと思い、店先の花を眺めている。

花屋に存在を許された花だけあってどれもきらびやかだが、少女の脳裏にはあの黄色くて小さな花がこびりついていた。

「お待たせ!!」

ぼんやりと待っていた少女の前に、ようやくと男が現れた。

その手には、白い花をつけた小さめの鉢植えが握られている。

「……これは?」

「アザレア、という花だ。」

「アザレア、ですか。」

八重咲の美しい白い花は、やはりきらびやかだ。

未だ男の胸元に刺さっているたんぽぽでは少々、いや、かなり分が悪そうである。

「はい。」

「え?」

しげしげと鉢植えを眺める少女に、男は差し出す。

「これ、グラスに。」

「……え?」

男はどうやら、少女にこの鉢植えを贈りたいようだ。

しかし少女はぼかんとしている。

まるで先ほどの少女と男の立場が逆転したようである。

「私に、ですか？」

「うん。」

「え、と……なぜ、でしょう？」

少女が理由を尋ねる。

「たんぽぽのお返しだよー！」

すると男は、屈託なく答える。

「どうやら胸元にある黄色い花のお礼、ということらしい。」

「え、そんな、悪いです。……言い方は悪いですが、そのたんぽぽは道端に生えていたものですし、とてもではないですが釣り合いません。」

少女は固辞する。

「でもグラスはこれに何かを見出してこれをおすそ分けしてくれただしょう？」

「それはそうですが……」

「グラスだったら、やっぱり固いなあ。君からもらったものは何でもうれしいし、何より君は今日、春に気が付かせてくれたんだ。」

「しかし……」

「とにかく、はい。今日も休日なのにトレーニングを頑張った偉い子には、ご褒美さ。」

「わわっ。」

男は少し乱暴に鉢植えを少女に渡し、しょんぼりしていた少女の頭を撫でる。

ふわりと、花の香りが漂う。

「とにかく、今日もお疲れさま。明日こそは、ゆつくりと休むんだよ。」

「え？……ええ、分かりました。」

「よし、じゃあ、また来週！」

「え？ちよつと、トレーナーさん?!」

少女を撫で終わるやいなや、男は駆けだしてしまった。

その顔が少し赤みを帯びていたのは、気のせいか。

「……」

再び残された少女はやはりぽかんとしながら、夕日に消えていく男の後姿を見送った。

「……帰り、ます。」

少女が寮の自室に戻り、花言葉を調べて真っ赤になるまで、あと30分。

## 手の温もりをはんぶんこするグラスワンダー

少女は見た。

とあるゆるふわガーリーなウマ娘が、そのトレーナーと買い食いをしているのを。

そして、驚愕した。

「買い食い？別にそれくらい」普通」のことではないか？

確かに、その意見はもつともだ。

トレセン学園においてはウマ娘と担当トレーナーが一緒に出かけたり、そこで買い食いしたりするのはいたって普通のことだから。

もちろんこの少女、グラスワンダーも自らのトレーナーと一緒に出かけたことくらいあるし、何なら今がそのお出かけの真っ最中。

ゆえに少女はウマ娘とトレーナーがお出かけ中に買い食いをしてるのを見かけたぐらいでは驚かないし、当たり前すぎて気にも留めない。

だってそれはスペシャルウィークが食事のときにご飯をおかわりすることと同じくらい、ありふれた日常の一コマなのだから。

だが、それはあくまでも「普通」の買い食いだった場合の話である。

特殊な買い食いとは？というもつともな疑問が生まれそうだが、少なくともグラスワンダーの目にそれは特殊で、特異で、特別なものに映った。

なぜなら少女、マチカネタンホイザは商店街のまんまる焼き（※期間限定商品）を一つ買い、それをわざわざ半分こして己のトレーナーとイチヤイチャ……もとい間食を楽しんでいたのだから。

グラスワンダーは驚いた。

それはもう、大変に驚いた。

コケリウムを眺めていたらいつの間にか日が昇っていたときくらい、驚いた。

「……」

穴の開いた帽子を右耳にかぶった少女がにへらと笑って半円に

なつたまんまる焼きを食べる様子に、グラスワンダーはしばし目を奪われていた。

あんな、ふうに……

「グラス？」

「はいっ!？」

ちよつとうわずつた、変な声が出た。

往来のど真ん中で頓狂な声を上げてしまった少女は少し顔を赤くしながら、声をかけてきた男の方をきつと見る。

「わわっ、ごめんって。まさかそんなかわいい声を上げるなんて思わなかったから……そんな睨むような目しないで……」

じとつとした目を男に向け、少女は思う。

そうだ。

今のは全て、トレーナーさんが悪いのだ。

グラスワンダーは思った。

いきなり声をかけられたからびっくりして、変な声が出てしまったのだ。

そうなのだ。

そうに決まっているのだ。

決して、あのイチヤイチヤを見せつけられて「いいなあ」とか、「私もトレーナーさんと……」とか、そんなことを考えていたからではない。

断じて、そうではない。

違うったら違うのだ。

「……どうしました、トレーナーさん。」

少女はコホンと小さく咳ばらいをし、平静を装って返す。

「……怒ってない?」

「怒ってなどいませんよ」

「ほんと?」

「ほんとですよ」

「そっか」

「そうなんですよ〜」

何かを察知した商店街のおば様方に「あらあらうふふ」と言わんばかりの生暖かい視線を向けられ、未だ顔が赤い少女。

「……それで、どうされたんですか?」

「あ、いやね。今グラス、マチカネタンホイザとそのトレーナーを凝視してたじゃん?」

……凝視なんてしていない。

ちよつと……ちらつと目に留まったただけだと、少女は心の中で言い訳した。

「凝視は、していないと思います……」

「いや、ガン見してたよ、ガン見。」

「……」

……していないってば。

「そ、それでどうされたのですか?」

旗色が悪くなり、少女はやや強引に話題を逸らす。

「ああ、それでね。もしかしたらなんだけど……」

「!」

もしかしたら?」

少女は期待した。

もしかしたら、トレーナーさんが「あのまんまる焼き、半分こして食べようか?」と誘ってくれるかもしれない。

スマートファルコンのトレーナーを筆頭に鈍いことで有名なトレーン学園のトレーナーたち。

御多分にもれず、グラスワンダーのトレーナーも鈍い(と、少女は確信している)。

だが。

だが、しかし。

彼と私は少なくとも時間を共にしてきた。

彼は私のよき理解者であり、これ以上ないパートナー。

そんな彼なら、今の私の気持ちを的確に読み取ってくれるかもしれない。

そして、「グラス、ほっぺに餡がついてるよ。」なーんて。なーんて。

そんなことがひよつとしたらもしかすると、起こるかもしれない。そんな素敵な、まるで創作のようなシチュエーションが……

「もしかしたらグラス、おなかすいてる?」

なーんてね。

ええ、知っていましたとも。

トレーナーさんが色気より食い気なことぐらい、ずっと隣にいる私が一番理解していましたとも。

「……別に、そんなことありませんよ。」

「遠慮しないでいいんだよ? トレーニング後だし、おなかすいているでしょ?」

それは、そうかもしれないが。

トレーナーさんは兎角、乙女心に気づかない。

少女は内心でため息をついた。

「あの、トレーナーさん。一応、私も年頃の少女ですので……もう少しこう、デリカシーというか……」

「……食べない、まんまる焼き?」

「……」

「……」

「……食べ、ますけど。」

少女は折れた。

やけくそになったわけではない。

それに、まだチャンスは残っている。

ここから大どんでん返しが待っているかもしれない。

「じゃあ、買ってくるね!」

「あ、な、何個、買うんですか?」

「……? 一人一個ずつで、二個のつもりだったけど?」

ですよね。

「あ、もしかしてもう少し食べたい? 一個と言わず、何個か買ってこようか?」

……この人は……

「……いえ、一個で十分ですよ。」

「そう？遠慮しなくてもいいんだよ？」  
もう少しご配慮ください。

「……いえ、大丈夫ですよ。」

「分かった！買ってくるね！」

「……」

少女は心なしかしょんぼりと、駆け足の男の背を眺めていた。

◇◇◇

「はい、買ってきたよ！」

「ありがとうございます〜」

はい、と手渡されたまんまる焼きは、おいしそうに湯気を立てていた。

「なにやら“抹茶味”というのがあってね、それを買ってみたよ。」

男は「あちち」と言いながら、両手でまんまる焼きを握っている。

「二つとも、ですか？」

「二つともだね。店主おすすめらしいよ？」

……この際、何も言うまい。

仮に。

仮にだが、味が違うものを一つずつ買えば「少し味見させていただけませんか？」と、半分こどころか「あくん」だってできたかもしれないのに。

その道は完全に断たれてしまった。

「じゃあ、冷めないうちに食べちゃおうか。」

「……そうですね。いただきます。」

「いただきます。」

少女はぱくりと一口、それを食べる。

おいしい。

大判焼きと言えばあんこかクリームイメージだったが、甘さ控え

めの抹茶あんもくせになりそうだ。

あ、まんまる焼きか。

「とってもおいしいです。ありがとうございます、トレーナーさん。」  
「どういたしまして。」

だが、男はまんまる焼きを手に持ったままなかなか食べようとしな  
い。

「どうしたんですか？・トレーナーさん。」

冷めないうちに食べようといったのは彼の方にも関わらず、なか  
か食べ始めないのを不思議に思う少女。

当然の疑問だろう。

「あはは。少し手が冷えちゃってね。温めてた。」  
なるほど。

少女は得心した。

彼女のトレーナーは、冬でも手袋をつけない。

以前、気になってそのわけを尋ねたところ、「何か閃いたらすぐメモ  
を取れるように」という答えが返ってきた。

これはもう、職業病というべきだろうか。

彼に限った話ではないが、トレーナーという人種はとにかくあらゆる  
ことからトレーニングの閃きを得る。

あるいは、それほどまでにトレーニングのことを考えているからこ  
そ、こんなにも鈍いのかもしれない。

「あらあら。そんなことをしては、せつかく温かいのに冷めてし  
ま……………!!」

「グラス？」

閃き。

グラスワンダーは閃いた。

彼と一緒に出かけたとき、いきなり彼がペンを取り出して閃きをメ  
モするのを何度も見た。

その度に「今の出来事でどんな閃きを……………」という疑問が渦巻い  
ていたのだが、なるほど。

閃きとは、こういうものか。

少女の疑問は少し、解消した。

「グラス〜？」

急に足を止めた自分を、彼が不思議そう見ている。いつもとは立場が逆だ。

「お〜い？」

いや、こんなことを考えている場合ではない。

急がなくては、この閃きが生かせなくなってしまう。

「おおっ。どうした？」

少女はぱつと、彼の方を見た。

そして、まんまる焼きを握っている彼の手をじっと見つめる。

「なにになに？…どうしたの？」

急がなくては、彼の手が温まりきってしまう。

そう考えるや否や、少女はいそいそとつけていた手袋を脱ぎ始める。

そして。

「えいつ。」

「わわっ。」

少女は手袋を脱いだばかりのほかほかの手で、トレーナーの手を握り締めた。

「グラス、急にどうしたのさ。」

「はんぶんこです♪」

「はんぶんこ？」

男は疑問符を浮かべる。

「はい。このままだと、トレーナーさんの手は温まりますが、まんまる焼きは冷めてしまいますよね？」

「そうかも。」

「それは、もったいないと思うんです〜」

「一理あるねえ。」

「ですから、私の右手でトレーナーさんの左手を温めて。」

「温めて？」

「トレーナーさんは、右手でまんまる焼きを食べる。」

「ほほう。」

「するとトレーナーさんの右手はまんまる焼きで、左手は私の手で温められる。私の手のあたたかさをトレーナさんとはんぶんこ、という寸法です。」

「なるほどー。」

これは賢さUG。

圧倒的な閃き。

ノーベル平和賞は彼女の手に渡ったも同然だろう。

その証拠に、ほら。

先ほどまで生暖かい視線を送っていたおば様方は皆腕を組み、うんうんと頷いている。

まるで、「よくやった」「ナイスガッツ！」と言わんばかりの満足げな表情である。

「……グラスの手は、あつたかいねえ。」

「トレーナーさんの手が、冷たいんですよ?」

「そうかもねえ。」

「そうですよ。」

二人は手の体温をはんぶんこにしながら、ゆっくりと歩く。

時間の過ぎるのが惜しいのだろうか。

その歩幅は、いつもより狭く見えた。

「だんだん、手が温まってきたよ。」

「それは何よりです。」

少女はご満悦だった。

あのアベックのようにまんまる焼きを半分にすることはできなかったが、これはこれで。

それに、自分の体温と彼の体温が混ざり合って一つになっていく感覚は、なんだかこそばゆい。

悪くないというか、むしろ良い。

この時間がずっと続けばよいのに。

少女はもうちよつと、歩くペースを落とした。

「グラスは手、冷たくない?」

「え?」

ようやくとまんまる焼きを食べ終えた男が、突然尋ねる。

今度は普通の返事ができた。

「だって、冷たい僕の手を握ってくれたわけで。大丈夫?」

「ええ、大丈夫ですよ」とつても、あたたかいです。」

少女は幾分か強く彼の手を握り、そう返した。

「そっか。でも、手袋もつけないでいたら、すぐに冷えちゃうよね……

そっか!」

「えっ? きやつ……!」

そういうと男は、つないだままの手を自らのコートの中にしまい込んだ。

「と、トレーナーさん!」

「うんうん。これなら冷えないね。あつたかい?」

「そ、それはもう……」

少女は少し恥ずかしそうに、ポケットの中で指を動かす。

「くすぐりたいよ」

男はあつけらかなと言い、ポケットの中で忙しくしている彼女のたおやかな指を優しく包む。

驚いたのだろうか、少女はぴんと耳を立てる。

しかし、しばらくすると耳をへなへなとさせ、緩み切った表情で一言。

「……とつても、あたたかいです。」

「そりゃよかった。」

かくして少女は、見事に“はんぶんこ”を実現した。

一時はどうなることかと思ったが、少女はご満悦である。

これには商店街の皆さまもにっこり。

「トレーナーさん。」

「ん? 何?」

「よろしかったら……せっかくですし、もう少しこのまま。お散歩でもしませんか?」

「ははは、いいね。食べた分のカロリーを消費するために、少し歩こう

か。」

「……」

やっぱり、鈍い。

少女はむすっとして。

少し強めに、少し汗ばんだ彼の手を握ってやった。

「いててて、強い！強いよ、グラス〜」

この先もきつと、離さないように。

後日、この話を友人たちにしたところ、それただ手をつないでデートしただけじゃね？と言われてしまい、わたわたしながら「はんぶんこ」を強調する栗毛の少女が見られたそうだが。

それはまた、別の話。

## 吐息で想いを伝える遊びに興じるグラスワンダー

男と少女が何やら話している。

その会話に混ざりたいのだろうか、ぴゅうと一つ、風が吹いてくる。今しがた二人の足下で耳をそばだてていた落ち葉は、冷たい乱入者によってどこかへ吹き飛ばされてしまった。

「……それにしても、ここのはすごく冷えますね。」

「そうだねえ……」  
なるほど。

どうやら二人はこの頃の気温について話しているらしい。

ありふれた、とりとめのないおしゃべり。

それこそ、もう一度風が吹けば飛ぶような話題。

だが、歩いているときにする話などはそれくらい軽い方がちょうどいい。

それに、二人が歩くのは朝の通学路。

重苦しい話題では、歩みも鈍ってしまうだろう。

男にとっては職場への道のりでもある。

昨日やり残してしまった書類と一晩ぶりに対面する男は、その憂鬱さを紛らすかのように「ほう」と一つ、大きく息を吐いた。

「……息も、こんなに白いや。」

少女は男のこどもっぽい仕草にくすりと笑みをこぼし、自分も白い息を吐いてみる。

「はーっ」

「おお……見事に真っ白だ。グラスも、そんな子どもっぽいことをするんだねえ。」

男は少女の白い吐息の行方をしばし見送った後、少し意外そうにする。

「うふふ。息が白くなるのなんて、限られた期間だけですから。吐息が寒さを、季節を見せてくれていてみたいで、私は結構好きですよ。」  
「確かにそうかも……じゃあ、それっ！」

少女の言に鹿爪らしい顔でうなずいた男は、今一度大きく息を吐い

た。

「まあ！トレーナーさんだったら、まるで子どもみたいですよ〜」

少女は一層笑みを深くして、手を口元にかざす。

その様子はまるで、わが子を慈しむ母親のようだった。

「ふふ〜ん。これはグラスもやっていて、季節を感じるための高尚な行為なのです。それに、いま僕は失われていた童心を取り戻したただけから、子どもっぽくてもセーフなんだ〜」

得意げに、分かるようで分からないことを言う男。

その様子に少女はくすりと笑い、口元からは白い息がこぼれる。

「あら、そうなんですか？」

「そうなんです〜」

「ならば仕方ありませんね〜……はーっ」

「あ、グラスもやってる」

「うふふ。これは季節を感じる高尚な行為だからセーフ、なんですよね？」

「うん、セーフ。」

今度はまるで、二人の中学生がばかをやっているようだった。

先ほどまでは慈母のような微笑みを浮かべていた少女も、「童心を取り戻した」という男も。

互いに白い息を吐いては、それが空にとけてゆくのを眺めている。

「……」

「……」

「存外、楽しかったね……！」

「そうですね〜」

二人はかすかに白い息をもらしながら歩く。

先ほどは少し元気がなかった男も、少年の心を取り戻したためか楽しそうにしている。

終始子どもっぽい男の横顔を、落ち着きを取り戻した少女が見つめている。

「……なんだか、白い息見てたらさ。」

「はっ」

「お茶の湯気を思い出したよ。」

「あら〜うふふ。」

幾分軽くなった足で学園に向かいつつ、男は少女に話しかける。まるで何か重大な秘密を思い出したかのような神妙そうな顔で子どもみたいなことを言う男の姿は、少女の口角を上げるのに十分なほど滑稽だった。

「確かに、こんな寒い日には温かいお茶が飲みたくなりますね〜」

「ね。そうだよね。」

男はなんだか期待がこもった眼差しで少女の方をちらちらと見ている。

少女は男の言わんとすることに気づきつつ、その様子があまりにも面白いため少しからかってやることにした。

「そういうえば、最近新しい茶葉を買いましたね〜」

「ね、ね。先週一緒に買いに行つたよね……!」

男は「その言葉を待っていました!」と言わんばかりに目を輝かせる。

それはまるで母親が戸棚から菓子を取り出すのを待つ子どものように。

少女は心の中で、愛しい少年の頭を撫でた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……買いに、行つたよね……?」

「あらあら。そんなに悲しそうな顔をしないでください♪そうですね。トレーナー室に着いたら、朝練の前にまずはお茶を一杯。なんて、どうです?」

「やったー! 賛成!!」

男は小さくガッツポーズをして、幾分歩調を早める。

「そうと決まれば、息を吐いてる場合じゃないね! 行こう、グラス!」  
花より団子な男に苦笑しつつ、少女は男についてゆく。

「童心を取り戻したのではなかったのですか？」

「取り戻したけど……！お茶を楽しむのは大人の特権みたいなものだからね！童心は一度返却するよ。」

「あらあら、そうなのですか。では、また童心を取り戻したら教えてくださいね♪」

「うん。その時はまた。」

「ええ。移り行く季節を楽しむとしましょう♪」

二人は数分前よりも足早に、学園へと向かう。

だが、大人に戻った男の横で少女は一つ、考えた。

「……」

「……グラス、どうしたの？」

急に足を止め、自らの少し後ろに控えた愛バを、先ほどまで子どもだった男が不思議そうに見つめる。

「トレーナーさん。」

「ん？なあに？」

はぁー……

すると少女はいきなり、大きく長く息を吐き始めた。

ぐるりと顔を動かし、吐息がおおきな円を描くように、息を吐いた。円。

いや、少し違う。

「わあ……？なんだか、ぶきつちよな丸だね？」

案の状、男にはその形が何を意味するかは伝わらない。

だが、それでよかった。

この国では昔から、想いを伝える際に直接的な方法を取らないきらいがある。

和歌もそうだし、如何にして想いを婉曲的に伝えるかもまた、一つの文化だった。

だから少女は別に、今すぐこの想いに対する返事がなくても良かった。

……もつとも、「君の淹れるお茶を毎日飲みたい」とでも言われたら、少女は一も二もなく肯いたが。

今はとりあえず、良かった。

とある想い込めて描いたあの形が。

心臓を表すシンボルを描いたはずの吐息が、「ぶきつちよな丸」としか捉えられなくても。

「今のは？」

「そうですね……大人に戻ったトレーナーさんに向けて、です♪」

「……？」

「私が大人になったらでいいので、お返事、きつと聞かせてくださいね♪」

「……？まあ、その時はまた聞いてね？」

「！……？わかりましたくでも、その時はお返事をくださいね？きつとですよ？」

「分かった！」

「では、行きましょうか♪」

「そうだね！お茶を飲……朝練をしに！」

「あらあら、まあくトレーナーさんったら♪」

寒さのせいだろうか。

少女の顔はお茶が沸かせそうなくらい、真っ赤になっていた。

先輩のお弁当に入っている緑のギザギザ

トレセン学園の昼、カフェテリアはいつも賑やかだ。

「……いつものことながら、全然席あいてないや。」

昼前最後の授業が終わるとおなかをペコペコにすかせたウマ娘たちが一目散にカフェテリアへ駆ける様子は、レースさながらである。

まあそれも仕方がない。

ほとんどのウマ娘が朝練に精を出し、一限目の授業が始まる前からお腹を空かせている。

そうでなくとも食欲に歯止めが利かぬこの年頃。

そんな2000人近くの子たちに、無料のビュッフェ形式で昼食を提供したらどうなるか。

そりゃ、満席になる。

とどのつまり、私が座ることができる席などないのだ。

「相席はちよつとなあ……おっ？」

見ず知らずの人と相席は嫌だな……なんてことを考えていると、私の視界の端に見覚えのある栗色の影が波打った。

注視すると、やはりそれは最近よく一緒に練習をしてくれる先輩の耳だ。

随分と上機嫌にぴこぴこ揺れているものだから、離れていても目に留まる。

「……よし。」

先輩だし、少し緊張するけれど見ず知らずの人よりは断然いいや。そう思い、私は揺れる栗色が目印の席へと向かった。

◇◇◇

「グラス先輩……こんにちは!!」

「あら〜〇〇ちゃん。こんにちは♪」

やはり先輩は上機嫌らしい。

いつもより若干高い声色は、先輩の機嫌の良さを推し量るには十分

だった。

お願いをするには絶好のチャンスじゃないか？

まあ、グラス先輩は優しいからそんなこと考えるだけ無駄かもしれないけど。

「実は空いてる席が全然見つからなくて……もしよかったら、先輩の正面の席を使ってもいいですか？」

「あらそんな、遠慮なんてしないでください。楽しくおしゃべりでもしながら、一緒に食べましょう♪」

「ありがとうございますっ！」

先輩の了承を得て、二人掛けのテーブルの空いている方に腰を掛ける。

ひとまず、座れてよかった。

でも、なんで先輩は一人でご飯を食べてるんだろう？

「いただきます。………そういえば、先輩が一人でご飯を食べているのは何か珍しいですね。他の先輩方は一緒じゃないんですか？」

「……ええ。今日は一人でご飯を食べる日と、そう決めていましたので〜」

「あ、そうなんですか？」

「……ええ。」

ん？

何か歯切れが悪いぞ……？

それに、先輩のこの表情。

ニコニコとした笑顔を張り付けてはいるものの、何か裏がありそうな顔だ……

「……皆さんと何かあったんですか？」

「いえ〜。心配してくださってありがとうございます。喧嘩などではないのでご安心ください。今日の放課後も一緒にトレーニングする予定ですから。」

「そうなんです。あ、私も一緒にさせてもらっていいですか？」

「もちろん。一緒に高みを目指しましょう♪」

「ありがとうございますっ！」

ふむ。

先輩同士、確執があつたわけではない、と。

では、先輩のこの違和感はなんだ……？

そういえば。

「先輩、今日はお弁当なんですネ。」

「……ええ。最近、少しはまっています〜」

「自作ですか？すごくおいしそうです！」

「ふふ。うまみに自信あり、ですよ〜」

そう言う先輩は、にこりと笑って素早く卵焼きをつまんで見せた。

……まるで、何かを隠すように。

……なるほど、何となく掴めてきたぞ。

「……先輩。その卵焼き、随分かわいく並べられていたんですね。」  
観察力を高めるトレーニングを行っていた私に隙はない。

何でも、「ホークアイ」という技能らしい。エル先輩に教えてもらったのだ。

「……卵焼き、ですか？」

先輩は、「何のことかわからない」といった具合にとぼける。

「ええ。卵焼きです。ハートの形に並べられていましたよね？」

「あらくよく見えていますね〜」

「自分が食べるお弁当、わざわざそんなことをするんですか？」

「あら。お弁当とは、味や栄養だけでなく、彩や見た目も重要なんですよ。それに、“わざわざ”とはいつでも卵焼きを切って並べるだけです。大した手間でもないですし、それくらい別に変なことではないでしょう？」

「……」

「あ、次はこれを頂きましたよう♪」

先輩は少し勝ち誇ったような、そしてどこか安心したような顔で椎茸をつまむ。

飾り切りが施されたそれはつまむだけで出汁が溢れ、見るからにおいしそうだ。

「うふふ。……あ、この煮物、とってもおいしいですよ♪」  
……確かに。

確かに、そこまで変なことではないのかもしれない。  
でも。

「……先輩、今の発言、少し変じゃないですか？」

「……変、ですか？」

「ええ。その煮物、本当においしいそうですし、実際においしいのでしよう。でも、自分が作ったものにわざわざ“おいしい”って言いますか？」

「……まあ、わざわざ言うのは少し変かもしれないですけど。そんなにおかしいことでしょうか？」

「いえ。なんとというかまるで、“誰かが作ってくれたものを食べている”のような反応をするなうと思ひまして。」

「……」

お。

さつきまでご機嫌に揺れていた耳がぴんと立った。

この反応は。

「それに、その緑のギザギザ……これも、わざわざ自分で入れますか？」  
「……」

あ、耳がくるくる動いてる。

これはウマ娘が何か考え事をしてするときの癖だ。

「この緑のやつ、なんだか芝みたいですねえ……そういえば、先輩の名前の“グラス”って、どういう意味でしたっけ？」

「……」

「先輩……？」

「……これは。」

「……この緑のギザギザは、“ balan ”と言います。お弁当の仕切りとかに使われます。ユリ科の植物の“葉蘭”が由来なので、芝とは関係がありません。……芝とは、関係がありません。……ないんです。」

先輩はそう、早口で一氣に説明した。

ふーん？

「なるほど。 balan っていうんですね。 一つ賢くなりました。」

「 balan っていうんです。」

「ところで先輩。 話を戻しますけど、 そのお弁当自作ですか？」

「……」

「先輩。」

「……」

「せんぱーい。」

「……うまみに自信あり、 なんです。」

先輩はしおしおと言った。

グラスワンダー先輩。

この人の感情は存外、 態度に出る。

「はぐらかすつもりですか……？」

「……嘘なんてついてないんですくはぐらかしてもいないんですく」

「なるほど。 では……」

「？」

「その自信作、 味見させていただけますか？」

「!？」

「先輩の自信作、 私も味見してみたいな……？」

「……だ、」

「だ？」

「だ、 だめでなんです！ これはトレー……」

「トレ？」

「トレー……とれ、 と、 とれにくい？ 素材？ を使ってるので、 とにかくだめなんです！」

「へえく取れにくい素材、 ですか。 でも、 先輩以前に〃 とっても珍しい茶葉を頂きました。 一緒にお茶でもどうですか？〃 って誘ってくれませんでしたよね？」

「え、 ええ。」

「そんな優しい先輩が〃 自分で作った〃 お弁当を味見させてくれないのは何か変ですよね……？」

「そ、それは……」

「もちろんタダとは言いませんよ。この人參ハンバーグと交換でどうです？」

「うう……交換でも、だめなものはだめなんです！」

「ははは。よいではないですか？よいではないですか？」

「こんなに感情を露にする……もとい、年相応に可愛らしい先輩は見たことがない。」

「そんな先輩とじゃれ合っていると、少し顔を赤らめた先輩は弁当箱をひよいと持ち上げ、自分の方に抱き寄せた。」

「だめなんです！」

「ははは。冗談ですよ、先輩。慌てる先輩なんてなかなか見れないから、少しからかつちやいました。……ん？」

「おや。」

先輩が持ち上げた弁当箱の下から、何やら一枚の紙が。

「どうやら弁当箱とつつみの間に忍ばせられていたみたいで、先輩は気づいていない。」

「これは？」

「え……うあ、そ、それは!!!」

「？何か書いてますよ。」

「あ!?だ、だめです!!」

「どれどれ……」グラス、授業お疲れさま！午後のトレーニングのためにもしっかりと食べてね！ PS 今日の煮物はうまみに自信あり、です」……ほほう。これはこれほ」

まあ、大方予想はついてましたけどね。

先輩は……

「おお。顔は真っ赤、口をぱくぱくさせている。」

「やっぱり、先輩は結構分かります。」

「先輩、流石ですね。愛妻弁当ならぬ、……なんて呼べばいいんですかね？愛トレーナー弁当？」

「……ち、ちがいますもん。」

「え？この期に及んでしらはつくれます？」

「ちがいますもん。エルがつくつてくれたんですもん……」

「流石に無理があると思いますよ。」

「ほんとですもん。」

実は、グラス先輩は結構頑固だ。

そして、先輩のトレーナーさんと同様に、どこか抜けたところもある。

「……まあ、実はこんなことしなくても知ってたんですけどね。」

「え？」

「カフェテリアに来る前、先輩のトレーナーさんに会ったんです。トレーナーさん言っていましたよ。」今日は僕がグラスのお弁当を作ったんだ〜”って。」

「う、うそです！だって、お弁当のことは秘密にしてくれるって……！」

「はい、嘘です。」

「え？」

「嘘でした。ごめんなさい。」

「……」

だから、こういう単純な罠にも結構引っかけたりする。

……レースだところはいかないんだけど……

「……私を嵌めたんですね……」

ぶるぶると震えながら、先輩はこちらをにらむ。

だけど、こんな幼気な小動物みたいにかわいい人に睨まれても、ちつとも怖くない。

「嵌めただなんてそんな……先輩が言ってくれたように、”楽しくおしゃべり”してただけですよ。……それでそれで、トレーナーさんにお弁当作ってもらってるんですか？くう〜！うらやましいです!!」

「……違います」

「いやいや、今しがた自白したじゃないですか……」

先輩は赤い顔を取り繕おうともせず、お弁当を置く。

そして、何事もなかったかのように食事を再開した。

真っ赤な顔のまま。

「さすがに無理ありますって先輩。もう諦めていろいろお話してくださいよ。誰にも言いませんから!」

「違います。証拠とか、ないですもん。……それに、証拠が自白だけだったら無罪です。」

「なるほどそう来ますか。」

流石黄金世代の大和撫子筆頭。

一筋縄ではいかないらしい……

ですが、既にこのレースは私が支配したも同然……!!

「セイちゃん先輩。」

「?」

「あくなんか、急にセイちゃん先輩とおしゃべりがしたくなってきました」

「なっ!」

「今日のトレーニングの休憩中とかにおしゃべりしたいな」

「……私を脅しますか……」

「いえいえいえ!まさか!!とんでもない!!ただ、セイちゃん先輩と楽しくおしゃべりしたいな」

「……」

「セイちゃん先輩、からかうの上手ですよね」

「……」

「それに、人の色ごとにはめっぽうつよつよですよ」

「……」

「せんぱい。楽しくおしゃべり、しませんか?」

「……」

「先輩?」

「?」

急に先輩が黙ってしまった。

これはセイちゃん先輩直伝のつよつよからかいが効きすぎてしまったか?

初勝利

でも、こんな初勝利はちよつと嫌かも……?」

「せんぱ……ヒエツ」

私は見た。

栗色の長い髪に隠された先輩の顔を。

というより、うんともすんとも言わない先輩を訝しんで自分から覗き込んだわけだが。

「あ……私、用事があったかもです。ご、ごちそうさ。〇〇ちゃん」  
席を立とうとした私の手を、先輩の小さくて少しひんやりした手が包む。

柔らかい手だ。

“優しさ”という概念を形にするとしたら、この手の感触がそれに該当するだろう。

それくらい優しく、先輩は私の手を握った。

「あ、あははは、グラス先輩。ど、どうしたんですか？」

「まだまだがお料理が残っていますよ。ほら、おいしそうな人参ハンバーグがこんなに残っています」

「あ、で、でももうお腹いっぱいかな。あはは……」

「うふふ。」

「あ、あははは……」

「うふふ。」

「あははは……では、私はこれで……」

「座ってください」

「あ、でも用事があったかも……」

「座って、ください」

「あ、はい。」

だ、だめだ。

先輩の目が据わっている……

「楽しくおしゃべりしながら、一緒に食べましょう？」  
そういえば、セイちゃん先輩が言ってたっけなあ……

「グラスちゃんを怒らせてはいけない。」

「え？セイちゃん先輩、急にどうしたんですか？」  
「…もう一度言うよ？グラスちゃんを怒らせては、いけない。」  
「どうしたんですか急に？セイちゃん先輩らしくないですよ。それに、グラス先輩とつても優しいじゃないですか。怒ってるってことなんて見たことないです。」  
「……」

「〇〇ちゃん？」

「……はい。」

「私と一緒にお昼ご飯、食べてくれますか？」

「ハイヨロコソデ!!」

そう返すと、先輩は今日一番の笑顔を私に見せてくれた。



「あ、先輩！お疲れ様です！」

「あ。お疲れ様々」

「先輩もお昼ですか？」

「うん。ちようどね。」

「良ければご一緒しても？」

「もちろんいいよ！トレーニングの話でもしながら食べよう。」

「ありがとうございます！……そういうえば先輩、いつもお弁当なんです。」

「ん？まあね。」

「自分で作ってるんですか？」

「えーとね、作ってるけど、これは自分で作ったやつではないよ。」

「というと？」

「これはグラスが作ってくれたやつ。そして、グラスが食べてるのが

僕の作ったやつ。」

「おおーお弁当交換ですか！なんかいいですねそういうの！担当と良好な関係を築けてるって感じで!!流石先輩です!!」

「はは。褒めてもグラスが作ってくれた弁当はあげないよ」

「さすがにもらえませんよ。……?……先輩、この緑のやつは?」

「ああ、バランスのこと?」

「それです。わざわざ入れます?売ってるお弁当にしか入っていないイメージですけど。」

「それはそうかもね〜でも、”バランス”って、なんだか芝みたいですよね♪……トレーナーさんが寂しくないように入れておきました♪”って言われちゃったら、ねえ。」

「芝……?……grass?……あつ……」

「どうかした?」

「いや、なんだかお腹いっぱい……ごちそうさまです。」

「ウマ娘もトレーナーも、体が資本だよ」

一緒に過ごす時間を大切にしたいグラスワンダー

「旅行に、行きませんか？」

グラスワンダーからそんなお誘いを受けたのは、新年度が始まる少し前のことだった。

”旅行とは言っても、日帰りの、ちよつとしたものですが”

そう付け加えた彼女の表情はどこか不安げで、此方の反応を伺っているようだった。

「旅行、か……それは構わないけどまた、どうして？」

3年間以上苦楽を共にした彼女の、滅多にないお願いだ。

断る理由などない。

ないのだが。

「最近お疲れのようですし、リフレッシュにと思ひまして………いかがですか？」

また、その表情をする。

どうやら自分の見間違いではないらしい。

「……うん、そうだね。確かに最近ゆつくりできていなかったし、行くか。」

「！……ありがとうございますすくでは、来週末などはいかがですか？」

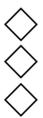
「うん、予定は空いてるし、その日にしよう。」

「はい、楽しみにしていますね、トレーナーさん♪」

……少し引つかかるところはあるが、こんなにも嬉しそうな彼女を見るのは久しぶりかもしれない。

彼女は喜んでいるのだ。

それに比べたら、大抵は些細なことに違いないだろう。



「おはようございます、トレーナーさん。」

「おはよう。いい朝だね、グラス。」

「ええ、とつても素敵なお天気ですね〜そうだ、忘れ物はありませんか〜?」

「ああ、バッチリさ。それにほら、写真を撮るために携帯もしっかり充電してきたんだよ。」

「……それは、何よりです。私も、しっかりと準備を済ませて来ました。では、そろそろ行きましょう〜」

「ああ、行こうか。」

グラスの誘いからおよそ一週間、休日を迎えた彼女と僕は関東近郊のとある観光地へ向かった。

昼食を食べ、景勝地を幾つか巡って夜には府中へ。

リフレッシュには少しばかり忙しい日程かもしれないが、久しぶりの休日をできるだけ謳歌してほしい。

……してほしいのだが。

「グラス、こっち向いて〜」

「……ええ。」

やはり、彼女の様子は少し変だ。

なんだかぎこちないというか、不自然だ。

今撮った写真の中で微笑む彼女の顔はいつも見せてくれる花が咲いたような爛漫なものではなく、どこか曇っている。

「あ、トレーナーさん、綺麗な景色ですよ〜♪」

「本当だ……凄く綺麗だ……あ、グラス!せっかくだからそこに立って!写真を撮るよ!」

「……ええ、わかりました。」

「おいしいねえ、グラス。」

「そうですね、トレーナーさん♪」

「あ、グラス!写真、撮ってもいい?」

「……ええ、いいですよ。もちろん。」

「綺麗な夕日だね、グラス。」

「……そうですね、トレーナーさん。」

「ずっと見ていたいくらいだ。」

「……そう、ですね。」

「……でも、今、この時は。いつか過ぎ去ってしまうんだよね。」

「そうですね。」

「……」

「……」

「……あ。グラス、日が沈んじゃう。せっかくだし、そこに立って。写真撮るよ。」

「……」

「グラス？」

「……」

「グラス、写真……」

「……トレーナーさん、写真フォルダ、見てみて下さい。」

「え？」

「フォルダ、見て下さい。」

「え、でも……もう日没だし、写真を撮ってからも……」

「いいから、見て下さい。」

「……わかった。」

彼女の揺るがない瞳を見て、沈む夕日を尻目に携帯の写真フォルダを開く。

そこには、彼女がいた。

車窓から移ろう景色に目を輝かせる彼女。

雄大な自然をバックに淑やかに佇む彼女。

美味しそうに昼食を食べる彼女。

……他にも、様々な彼女がそこにはいた。

「……グラス」

無意識に、その言葉が口をついた。

かけがえのない思い出だ。

美しい、思い出だ。」

「ええ、私です。」

そんな宝のような写真たちを、当の彼女が覗きこんでくる。

「私の、写真です。」

「そうだね。」

「でも、それだけです。」

「……え？」

よく見ると、彼女はそんなに嬉しそうではない。

「トレーナーさん、あなたはどこにいるのですか？」

「え？」

目の前にいるのに、突拍子も無いことを言う彼女。

「……ここに、いるよ？」

「……失礼します。」

「わっ」

一言断りを入れると、彼女は僕の携帯を優しくひったくった。

そして、写真フォルダをスクロールし始める。

「……どこにも、いませんよ？」

「え？」

彼女は写真をこちらに見せながら、悲しそうに呟く。

「今日、トレーナーさんはたくさん私を撮ってくれました。」

「でも、そこには私しかいません。」

「今日、トレーナーさんはきちんと私を見てくれましたか？」

「カメラ越しでない私を、見てくれましたか？」

「……私と一緒に、過ごしていましたか？」

彼女の問いに、僕は答えることができなかった。

「私は、あなたと一緒に時間を過ごしたかった。」

「景色もご飯も、あなたと一緒に楽しみたかった。」

「グラス……」

また、その言葉が自然に口から漏れた。

寂しそうな彼女の顔を見たくなかった。

悲しい思いを、させるつもりはなかった。

でも。

でも。

「でも、この景色を。君がいる景色を、いつまでも残しておきたい。」

「トレーナーさん……」

「忘れたくない。この夕日を。君と見た風景を。色褪せさせたくないんだ。」

「……トレーナーさん。」

「きつと、いつかは色褪せる。君と来たこの特別な旅行も、何気ない日常に埋もれてしまうから。」

「……ふふっ。」

そこまで言ったところで、彼女はようやく笑った。

……笑った？

「どうして笑うんだい？僕は結構真面目だよ？」

「いえ、そんなことを気にしていたのか、と思いついて」

「そんなことって、結構深刻な悩みなんだよ？」

彼女はくすくすと笑っている。

「そんな心配、しないでください。」

「え？」

「絶対に、忘れさせませんから。今日見た夕日もきつと、思い出せますよ。」

「……どうして、そう言い切れるの？」

「だって、私が隣にいますから。」

「え？」

彼女は茶目つ気たつぷりに笑いながら、自信ありげに言った。

「私が一緒にいますから。あなたの隣にいる私が、思い出させてあげ

ますから。」

「いつもの夕日を見る度に、私と見たこの夕日を思い出させてあげます。」

「本当かい？」

「本当です。あなたの記憶に紐付けられた私が、きっと思い出させてみせます。」

「ふふふ、ははは。それは頼もしい。」

「お任せください。」

「ふふ、任せたよ。」

そうして、彼女はやつと大輪の笑顔を咲かせた。

「あ、グラス、みてよ！」

「え？」

「夕日は沈んじやったけど、綺麗だよ！」

「ふふ、そうですね〜」

夕日は沈んでも、すぐには暗くならない。

赤みがかった空が、段々と蒼黒い空に覆われていく。

「グラス、そこに立ってよ！今、……」

自分の右手は、ほぼ無意識に携帯をしまっているポケットに伸びていた。

「今、隣に行くからさ。一緒に景色、楽しもう！」

「ふふっ。ええ、そうですね。一緒に見ましょう。」

僕は写真を撮ろうとした携帯をポケットの奥にしまいこみ、彼女の隣に駆け寄った。

「大人になれば分かる」とはぐらかし続けたトレーナーの末路

私が何か聞きたびに。

あなたはいつも言いました。

「大人になれば分かる」って。

◇◇◇

「大人になれば分かるよ。」

——ほら、またそれだ。

トレーナー室で会話をする……

いや、「会話をしている」とは少し言い難いか。

栗毛の少女の質問は、男によってはぐらかされたから。

「また、それです。それ、納得できません。」

少女は自らの不機嫌をちよつぴり表すべく、眉根を寄せた。

差し込む夕日が、少女の眉間に影を作っている。

「子どもはみんなそう言うのさ。グラスもそう思うってことは、まだまだ子どもってことだ。」

“私、不機嫌ですから”

その言葉を発さないのは、彼女なりの抵抗なのだろうか。

男は少女の分かりやすいアピールに目尻を下げ、不要になった書類をシュレッダーにかける。

ういゝいゝいゝん

“この話はもうおしまい。”

紙を裁断する無機質な音は、男のそんな気持ちを代弁しているかの

ようだった。

「そうやってはぐらかすトレーナーの方が、よっぽど子どもっぽいんです。」

だが、少女は食い下がらない。

言葉のキャッチボール。

少女が投げたボールは男が捕球しなかったためにどこかに転がっていつてしまった

……ので、少女はそのボールを自分で追いかけて拾い、再び男に向かって投げた。

今度は少し強めに。

いや、死球を狙って。

「そんな子どもっぽい挑発には乗らないよ。」

だが、強めに投げたはずのボールは男によって撃ち抜かれた。

ホームラン。

立ち上がり、コーヒーのおかわりを求めて給湯器へ歩きだす男の様子はまるで、ダイヤモンドを一周する野球選手のように。

……自分はいつの間にもマウンドに立っていたのかしら。

キャッチボールしている途中にバットを持ち出すのは反則だと、少女は思う。

「ずるいです。」

「大人はずるいんだよ」

「……」

先ほどよりも深く寄せた眉根も、負け惜しみにしかならない。

男は別に勝ち誇るわけでもなく、ずらずとコーヒーをすすする。

「……」

少女はゆつくりと立ち上がり、足取り重くトレーナー室を後にした。

少女の後ろに伸びる影は、まるで未練がましい後ろ髪のように長かった。

◇◇◇

——もやもやする。

そんな気持ちで少女が抱くのは当然か。

淑やかな私服がネオンに照らされる様は何とも言えないミスマツチ感がある。

少女はゆつくりと、夜の街を散策していた。

品行方正を地で行く彼女がなぜこんなところにいるのか。

そんな疑問も、アルコールと一緒に揮発したのだろう。

少女の隣を幾人も人が通りすぎるが、栗毛の影を気に留める者はいない。

誰も彼も口角をあげていて、開いた口から酒の匂いを漂わせている。

この場所こそが、家に帰れば煙たがられる酔っ払いの独擅場。

むしろ、素面の彼女の方がここでは場違いだった。

楽しそうな人波の合間を縫いながら、少女は人々とは反対方向を指す。

少女に目的地はなかった。

気分が晴れないので、外に繰り出しただけ。

外出届は出している。

が、おそらくその届け出で認められている外出時間は既に過ぎているはずだ。

その証拠にほら、先ほどから携帯電話がしきりに震えている。根はやさしいマスクの少女のことだ。

きっと心配してくれているのだろう。  
今日ばかりは、そのやさしさに甘えさせてもらおうか。  
少女はひっそりと、携帯の電源を切った。

“ 走りたい。 ”

そんな気持ちを持って外に出たはずだが、思うように足が動かなかった。

寮の門をくぐったあたりで先ほどのやり取りを思い出し、なんだか興が削がれてしまった。

宿題をやるうと思っていた時に「宿題をやれ」と言われたらこんな気分なのだろうか。

少し違うか？

残念ながら、真面目な彼女はそんなことを言われたことがなかったので分からない。

一際酒の臭いが強い人が横を通った。

そういえば。

「お酒って、おいしいんですか？」

少女はそう、聞いたことがある。

件の男に。

答えはやっぱり、 “ 大人になれば分かる ” だったが。

……

……………

また、もやもやする。

「えいっ……………あっ……………」

もやもやに任せて、つい道端の石を蹴ってしまう。

蹴った後に、自分の脚力のことを思い出した。

「……」

だが、幸いなことに周囲に人はいない。

考え事をしているうちに、いつの間にか繁華街を抜けていたようだ。

少し先に、昼は子どもで賑わう公園がある。

街灯が点々と続くもの寂しい道を歩いていた少女は、周囲を見渡して一安心した。

ころ、ころ。

弱弱しく蹴りだされた石は道を逸れ、公園のそばの側溝の中に落ちていった。

申し訳ないことをした。

きつとあの石は、ずっと、あの側溝の中で暮らすのだろう。

きつと誰も気に留めないだろうし、何も問題はないが。

蹴った少女も、蹴ったことを明日には忘れてしまおうだろう。

だが、少女はなんだかナイーブだったので。

その石ころの姿を見届ける最後の人物になってやることにした。

◇◇◇

石ころを見届けるためにのそのそと公園に近づいた少女の鼻が、ぴくりと反応する。

先ほど、繁華街で嗅いだものと同じ匂いがする。

不思議なことに、不快感はさほど感じなかった。

石ころよりは興味が魅かれたので近づいてみると、地面にうずくまっている変人がいる。

真横にベンチがあるにもかかわらず地べたに座るとは、相当な変人なのだろう。

少女はやはり、興味がわいた。

「こんばんは〜」

「……」

勇気を出して声をかけたのに、返事はない。

やはり変人……いや、夜中にうずくまった男に声をかける少女の方が、よっぽど変人か。

「こんばんは〜」

懲りずに声をかけてみる。

だが、やはり反応はない。

さらに近づいてみると、この不思議な男は何やら細切れの紙を握りしめており、さらに泣いていることが分かった。

暗闇の中目を凝らすと、裁断された紙には「出走不可」の文字が書いてあることが読み取れた。

辛うじて、それだけが読み取れた。

「……どうして泣いているのですか？」

少女は気まぐれに、男と会話をすることにした。

……いや、これを会話と呼ぶのには無理があるか。

「………どうして、泣いているのですか。」

少女は男の隣、ベンチではなく地べたに腰を下ろした。

返答を期待しているわけではなかったが、何となくこうしたほうが良い気がしたのだ。

「……」

「……」

しばしの沈黙の後、誰かが一言呟いた。

「……………大人になれば、分かるよ。」

「……………そうですか。」

なぜだろう。

少し、ほんの少しだが、もやもやが晴れた気がした。

「悲しいのですか。」

「……………大人になれば、分かるさ。」

「悔しいのですか。」

「……………大人になれば、分かる、はずさ。」

「……………なんで、ですかねえ」

「大人になれば、分かるんだ。」

男はそう、自分に言い聞かせているようだった。

やはり、このやり取りを会話と呼ぶには忍びない。

「を、走って見たかった。」

「……………」

「……………あなたも、見たかったのですか？」

「……………大人になれば、分かるかもね。」

一生に一度のクラシックレース。

なんの定めか、この栗毛の少女はクラシックレースを走ることができ  
ない。

その理由をここで語るのは、少し憚られるが。

「……………」



男は答えない。  
応えない。

「……」

「……」

「……えいつ。」

「うわっ……」

すると少女は急に、男に抱きついた。

華奢な自身の体で、大きな男の体を覆うように、強く、抱きついた。

「やめなよ。」

「いやです。」

「やめなつて。」

「いやなんです。」

「だから、やめ……うわっ!?!」

突然、男が素っ頓狂な声を上げる。

それも仕方がない。

男に抱きついていていた少女がいきなり、彼を持ち上げたのだから。

「な、なにするんだい?!」

「……」

「ちよつと!?!」

混乱する男を見て、少女の溜飲は少し、下がった。

「当ててみてくださいい〜」

だが、少女は未だ許さない。

「は？な、なにをさう？」

自分をはぐらかし続けた男を、決して許さない。

「それも、当てるんですよ。」

「そんな、無茶苦茶な……！」

うつすらと涙の跡が残る頬を、少し無理やり持ち上げて、笑う。

「子どもになれば、分かりますよ。」

「な……!?!」

まあ、少女は自分のことを子どもだとは全く思っていなかったが、子どもらしく振舞った。

いや、振る舞うことにした。

トレーナーに髪を結ばせるグラスワンダー

「私の髪、触ってみませんか？」

◇◇◇

日本の夏というものは、とにかく蒸し暑い。

ねっとり肌にとまとわりつき、じんわりと汗をにじませる。

自分の周囲にだけ、不快な空気の波が渦巻いているようだ。

男は、そんなことを考えていた。

「あまりにも、暑いな……」

少しでも気を抜けば、このシャツを脱ぎ捨てたくなってしまふ。

心なしか、背筋も悪くなっている気がする。

座っているだけでもこのザマ。

「よくやる……」

窓をのぞくと、トレーニングを行っているウマ娘の影がちらつく。

熱心なその姿には、尊敬を通り越してもはや一抹の呆れすら覚える

ほどだ。

「こんな暑さの中トレーニングをしたら、冗談抜きに死んじゃうよね……」

少し先のテーブルに置かれたリモコンを取りに行くだけでも億劫だ。

リモコンを手に取り、設定温度を26℃へ変更。

節電のためエアコンの設定温度は27℃にするよう職員会議で通達されたが、今回ばかりは見逃してほしい。

びっ、びびっ。

がちやり。

「……あら、室温は27℃じゃなくてよろしいのですか？」

リモコンの電子音に呼応するかのように扉が開く。

入室してきた彼女は一直線にソファへと向かわず、わざわざ自分の手元にある26℃を覗き込んできた。

「はて、なんのことやら……」

ばつが悪くなり、とつきにリモコンを戻してしまう。

「うふふ、悪いトレーナーさんですね」

「……室温が下がったら戻すよ」

くすくすと笑いながらも、それ以上の追究はしてこないのは彼女の優しさだろうか。

……それとも、彼女もまた暑いと感じている？

ふと気になり、いつの間にかソファに腰かけて読書を再開した栗毛の少女に目を遣る。

すらりと脚を伸ばし、牡丹のように優雅な彼女が暑がる様子はみられない。

なんせ、“心頭滅却すれば火もまた涼し”を地で行くような子だ。

「……」

しばらくの間、そうして彼女を見つめていたからだろうか。

「どうかなさいましたか？」

そんな風に、グラスワンダーは尋ねてきた。

まあ、穴が開くほど見つめられたらそう尋ねたくもなろう。

「いや、グラスはいつも涼しげだなーと思ってさ。」

男は自分が立ちっぱなしであることを漸く思い出し、彼女の隣に腰を掛ける。

「あら、私だって暑さくらい感じますよ」

「本当？」

「ええ、本当ですとも。」

しやらりという、ページをめくる音が耳に心地よい。

彼女が動かした手が微かな風を生み、産毛がそれを感じ取る。

それにしても。

ふむ。

彼女も、暑さを感じるんだな。

そんなバカげたことを考えてしまうほどに、彼女は泰然として  
いる。

まじまじと彼女を見つめても、そんな素振りは一切見せないとい  
うのにー

「……………っ!!」

……………いけないものを見てしまった気がして、つい目を逸らしてし  
まった。

弁解をするわけではない。

というか、何も悪いことをしていないのだから、弁解をする必要さ  
えない。

ただ。

ただ、自分は、何の気なしに彼女の肩口から首筋へ視線を向けただ  
けだ。

ただ、それだけ。

だから。

だから、彼女の少し汗ばんだうなじに、美しく長いビロードのよう  
な亜麻色がはりついていていた様を。

そんな様を。

扇情的と思ってしまったわけなんて、決してないのだ。

「……………ふうー」

落ち着け。

落ち着け、自分。

なんてことはない。

となりに座っているのは、教え子の愛バ。

……………ずり。

今、少し彼女と距離をとったことも、他意はない。

ただ、近すぎると余計暑いかな、と。

そう思ったただけだ。

「……………」

距離をとり。

落ち着いて。

気取られぬように、彼女の方をちらりと向くと。

「うわっ!!」

目が、あった。

彼女の透き通る青い双眸が、此方をまっすぐに射貫いていた。

「ど、どうしたんだい、グラス。」

思わず、しどろもどろになってしまう。

落ち着け。

自分には幾分の非もない。

「……」

「……」

「どう、したのかな。」

「……」

彼女は尚も、此方を見つめている。

ここで視線を逸らしたら、自分は何かとんでもない悪事を働いたと認めてしまうようで、目を離せなかった。

「……」

「……」

改めてみると、恐ろしいくらいに整った顔立ちだ。

長くのびたまつ毛、通った鼻筋、ぱっちりとした目。

そんな、造り物と言われても信じてしまいそうなくらい整った顔が無表情でまっすぐにこちらを見てくるものだから。

これは汗なのか冷や汗なのか。

自分は今暑いのか寒いのか。

男はそんなことも、分からなくなってしまうていた。

ふと、気付く。

そんな無機質な表情をとる顔にも、うつすらと汗がにじんでいることに。

冷房のついていない廊下から戻ったばかりだからなのだろうか。

ともかく、男は目の前の彼女がちゃんと生きていることを改めて認識できた。

ずり……。

「！」

またバカなことを考えていると、少女は男がとつたはずの距離を詰めてきた。

ふわりと運ばれてきた、彼女の匂い。

甘酸っぱい匂いだ。

彼女自身の匂いなのか、制汗剤の匂いなのか、あるいは、それらが混ざり合った匂いなのか。

だめだ。

鼻に直接訴えかけてくるこの甘い匂いが、先ほどの光景を否が応でも思い出させる。

「……グラスも暑さを感じるんだもんね。」

「……」

自分は何を言っているのだろうか。

「ははは……まあ、そんなの当たり前か……」

「……」

思考がまとまらず、とりあえずの時間を稼ぐために浮かんだ言葉を紡ぐ。

なぜ時間を稼がねばならぬかは、わからないが……

「……グラスは髪も長いし、余計に暑さを感じるかもね……」

そこまで言ってしまったとき、男は謎の寒気を感じた。

「……では、トレーナーさん。」

「私の髪を、結んでいただけませんか？」

「……いえ。」

私の髪、触ってみませんか？

少女はなぜか、笑っている。

◇◇◇

“ どうしてこんなことに ”

そう、思わずにはいられない。

やはりというか、髪が長いと首元が蒸れて暑いらしい。

ソファに腰かけた彼女の後ろに立ち尽くし、男は茫然としていた。

三つ編みで、お願いします♪

彼女は確かに、そう言った。

これまで異性の髪を結んだどころか触ったことすらない男にとって、三つ編みとはもはや未知の文化とも呼べるものだった。

「じゃあ、触るよ……？」

「お願いします〜」

やけに気分よさそうな愛バの様子を訝しむことすらできないほど、男は切羽詰まっていた。

スマートフォン画面に映る “ 三つ編みの結び方 ” を睨みつけ、勇気を出して亜麻色の髪に触れー

「っ!!」

瞬間、むせかえるほどの少女の匂いが飛び込んできた。

先ほどソファで距離を詰められた時とは比べ物にならないほどの密度で、 “ グラスワンダー ” が押し寄せる。

「……………」

眩暈を起こしそうになるほど濃密な匂いに耐え、男は陶磁器でも触るように慎重に髪を持ち上げた。

「私、男性の方に髪を結ってもらうのは初めてです〜♪」

「僕だって、女性の髪を触るのは初めてだよ……………」

男の気持ちを知ってか知らずか、少女は楽し気に話しかけてくる。  
「……………」

髪一束を持ち上げてたどたどしく編み込むたびに、彼女の白いうなじがちらちらと見える。

「……」

“自分は今、髪を結ぶことに集中しているのだ”

そう己に言い聞かせ、男は無心で髪をいじる。

だが、そんな男の集中かき乱すように少女は話しかけ続ける。

「異性に髪を結んでもらうなんて、まるで映画や小説の出来事みたいですよ」

「……」

「どきどき、しますね。」

「……」

「三つ編みって、なんだか日本らしくないですか？」

「……」

男は返事をしない。

それとも、返事をしている余裕などないのか。

「……」

「……」

「……そういえば。」

「……」

「ウマ娘の嗅覚って、人のそれよりも優れているんですよね」

「……」

「トレーナーさんに髪を結んでもらったりなんかしたら、トレーナーさんの匂いがべったりとついてしまつて、落ちなくなつてしまうかもしれませんね」

「！」

男は黙って、髪を結び続けた。

心の中では「ごめん」とか、「もう少し待って」とか、声にならない声がかましく鳴り響いていたが、とにかく手を動かし続けた。

誰に謝罪しているかなんて、そんなのは誰にも分らない。

「あ、でも焦らなくて大丈夫ですよ。」

「……」

「三つ編みは慣れていないと、時間がかかるでしょうから……」  
「……」

今日は暑いから。

男の額には、玉のような汗が浮かんでいた。

……

……

……

「！」

できた。

「あらっ？」

できた、できた!!

「……できた！」

どれくらいの時間髪を結んでいたかはわからないが、男はやり遂げた。

巧拙など考えている余裕はない。

男にとって重要なのは、「三つ編みを完成させた」という事実だけだった。

「もう終わってしまったのですね〜」

発言とは裏腹に、少女は然程残念そうではない。

「……時間がかかっちゃったね。お疲れさま、グラス。」

自分がどれほどの間、この亜麻色の束をこねくり回していたかなど見当もつかないが、男はとりあえずそう言った。

「とんでもありません。むしろもつと、こうしていたかっただけです。……ありがとうございます、トレーナーさん。」

「どういたしまして。」

男も、やっと落ち着きを取り戻していた。

なぜこんなことになったかは思い出せないが、とにかくやり遂げた。

まるで、何かの犯罪でも犯してしまったようだ。

驚掴みにされた心臓は早鐘を打ち、頭には冷静さなんてものはこれっぽっちも残っていやしない。

下手人の指紋は被害者の髪の毛にべったりと残っているため言い逃れはできないが、そんなことはもはや関係ない。

今は、動揺を隠しきって任務を完遂した自分を手放して褒めたい。「ええ、本当に、ありがとうございました。トレーナーさん。……あ、そうだー」

落ち着きを取り戻してきたからか、体が暑さを再び認識してきたようだ。

先ほどよりも汗をかいている。

なにせ、今日も今日とて途方もなく暑いー

「ー髪を結ぶと、うなじ、よく見えますよね？」

「ーあ」

ー暑い。

ー途方もなく、暑い、から。

ああ。

彼女が先ほどよりも汗ばみ、頬を紅潮させているのもきつと、暑さのせいだから。

「せつかくなので、スペちゃんたちにも自慢してきますよ♪」

がちやり

ばたん。

「……」

扉が閉められる。

……最初から、分かっていたのだろうか。

「悪いトレーナーさん……か。」

リモコンをいじっていた時、彼女に掛けられた言葉を思い出す。

気づかぬうちに、体は「どさり」と力なくソファに倒れこんでいた。

「……」

少女の痕跡がべったり残ったままの手を、リモコンへと伸ばす。

び、びっ、びびびっ。

「まったく、悪いのはどっちだよ……」

そんな眩きは、強められた冷房の風によってかき消されてしまっ  
た。

## 勘違いグラスワンダー

「あら？」

休日にシヨップピングモールを歩いていると、視界の隅に見覚えのある影がちらつきました。

「こんにちは、トレーナーさん。」

「え?! あ、グラスか……こんにちは。いい午後だね。」

「ええ、とつても。」

その影……彼は酒屋の前で顎に手を当て目をつぶりうんうん唸っており、いかにも「私、悩んでいます。」という姿で……

少し吹き出してしまったのは内緒です。

「グラスも面白い物かい？」

「ええ。それと、ウインドウシヨップピングを少し。」

「そりゃ、いけてる休日の過ごし方に違いない。お目当てのものは買えたのかい？」

「ばっちりです。」

後ろ手に下げた紙袋に彼の視線が動いたため、私の体はその視線を遮るように左右に揺れます。

「……見せてはくれないのかい？」

「ええ。ですから、ぜひ、次のお出かけを楽しみにしてください  
♪」

「そう言われちゃ、引き下がるほかないね。」

会うはずのなかった人と、思いがけず言葉を交わす。

他愛のない会話も、私のしつぽをゆらゆらとリズムよく揺らすには十分です。

ぴし、ぴし。

先ほどから聞こえるこの音は、きっと私のしつぽが紙袋を打つ音なのでしょう。

「随分、ご機嫌だね？」

「え?……ええ、まあ。とても有意義な休日になったものですから。」

如何に自分が浮かれているかを雄弁に物語るしつぽ。

自らのはしやぎ具合がばればれなのは少し気恥ずかしくもありませんが……

……彼の前でならば存外、悪くないものです。

まあ、私かなぜはしやいでいるか。

その理由はきつと、私にしか分かりませんから。

彼はきつと、「お目当てのものを買えたから、こんなにも機嫌がいいのだろう」ぐらいにしか考えていないでしょうから。

「トレーナーさんは何を買い求めなのですか？」

「え!?……ああー、ちよつとね……」

ただ、そんな私とは対照的に彼は気もそぞろといった感じでした。

「ここは酒屋ですから……お酒を買われるのですよね？」

「まあ、そうだね……」

……。

……あやしい。

あやしいです。

どこか不審というか、何かを隠そうとしているような気がします。

思えば、彼がお酒の類の話をするのを見たことがあります。

私は学生で彼は社会人だから当たり前と言えば当たり前なのですが……

「……トレーナーさん、お酒好きでしたっけか？」

「あ〜……あまり強くはないから、頻繁には飲まないかな？」

そうでしょう。

ええ、そうでしょうとも。

ウマ娘は嗅覚が優れていますから、前日の夜に飲酒をしたかどうかくらいは分かるのです。

……故に、解せない。

あなたは、滅多にお酒を飲みませんよね。

あなたがお酒を飲むのは、学期末にトレーナーの皆さんで慰労会をするときくらいですから……

では。

では、あなたは誰と杯を交わすのでしょうか？

「……どんなお酒を買われるのですか？」

「あー、うーん……決めかねているよ……」

残念ながら。

私はまだ10代。

あと数年しなければ、飲酒は許されない。

故に、私は同じ土俵にすら立てていない。

彼と……そして、彼がこれから酒を飲もうとしている相手と同じ土

俵にすら。

どろり。

きつと、そんな擬音がぴったり似合うことでしょう。

心の隅の方から滲み出てきた気持ちは、きつと暗い色をしているのでしよう。

「……グラス、もしかして機嫌よくない……？」

「……いえ。」

「いや、絶対よくないでしょ。」

「……いえ。」

先ほどまで挙動不審だった彼は、いつの間にかいつもの彼に戻って  
いて。

お酒の前に右往左往していたはずの視線は、此方をまっすぐに見つ  
めていました。

「……」

「……」

負けじと彼の視線をはねのけようと思いますが……

「……そうです。」

「うん。」

畢竟、勝手に妬み、嫉んでいたのは私。

そんな私がいくら睨み返したところで、彼のまっすぐな視線には勝  
てないのでしよう。

「……どなたとお酒、のむんですか。」

「え？」

一度心が負けを認めてしまえば、そこからは早いもの。

取り繕っていた本心を隠すことなどまったくもって厭わなくなつてしまつて……

……まあ、やけになつたとも言いますが。

「だつてお酒、飲まれるのでしょぅっ。」

「まあ、うん。」

そう。

今彼が私に見せた側面は、私の知らないモノ。

つまり、トレーナーとしてではない、プライベートな彼。

当たり前だ。

彼は大人で私は子ども。

彼はトレーナーとして生活しているけれど、当然“私生活”というものもある。

私を知っている彼なんて、私の知らない彼に比べればちつぽけなモノ。

ーだつて彼は、こんなにも素敵だから、きっと私の知らないころでも素敵なんだろう。

「ですから、誰とお酒、飲まれるんですか。」

「え、気になるの？」

「それは……はい。」

「わ……意外。ちなみに、誰だと思う？」

それは。

それは……

「異性……ですか？」

……思い人ですか、と聞く勇氣は、私にはありませんでしたから。だつて、彼はよいトレーナーですから。

成人した自らの教え子とお酒を飲むことだつて、あるかもしれませんよね？

「例えば……これまでの教え子、とか……」

「……」

すると彼は、先ほど酒を吟味していたときと同じように顎に手を当

て、何やら思案顔です。

「これまでも、あるのでしょうか……？」

「……グラス。」

だって、彼みたいなトレーナーを慕わない教え子ウマ娘など、いないはずだから。

「グラス。」

「……はい。」

「……ああく何と言えはいいのかな。言いづらいな……」

「……」

何を言われようと、覚悟はできていますから……

「実は僕、教え子は今のところたった一人なんだよね……」

「……」

「うん。だから、本当に……あの、期待に沿えなくて大変申し訳ないんだけど……」

君が初めての教え子なのさ。」

「……？……？……？」

？

彼は何を言っているのでしょうか……？

だって彼は素晴らしいトレーナーで……

私と3年間を歩んで……

……3年前、私と出会って……

3年前？

……そういえば、彼は新人で、迷子で、私が案内して……

……

……

「……ね？」

「……」

しつぽの付け根がじんわりと熱くなり、ムズムズとし始めたのが分かります。

私は、何を言っているのでしょうか……

何を、言っていたのでしょうか……

「今度の休暇にさ、大学のとときの友人……ああ、同性の……友人、ね。とき、久しぶりに会おうってなってさ。そこでさ、お酒でも持ち寄ってワイワイやろうってなってさ……」

同性のという部分を強調した彼はきつと、とんでもなくいじわるなのでしよう。

だって私の顔は、触らなくても分かるくらいに熱を帯びているのですから……

「……」

「……グラスも意外と初心というか……ふふっ。まあ何というか、早とちりさんだね!」

もう、堪えられない。

”教え子と酒屋で出くわすのは、なんだか罰が悪いね。”

なんてのんきに呟く彼の声なんて、まったくもって聞こえなくて。

「……」

平静を装って動かした視線の先には、“酒”と書かれた真っ赤な暖簾があつて。

それはまるで、金魚の尾びれのように優雅にはためいていて。

“夏だなあ……”なんて、思ったりして……

「グラス……?」

でも彼は、現実逃避など許してくれなくて……

「……トレーナーさん。」

「ん?」

「忘れて、ください。」

「……」

「……後生ですから、忘れてください……」

「……まあ。きつと、この思い出もさ。」

いい酒の肴になるよ。

……ああ、彼は、本当に、  
本当に。

貴方は、本当に……

「……いつか、ね……ふふつ。」

「……いじわる」

素敵なひと、ですね。

◇◇◇

「……何か、飲んでみたいものは？」

「初めてなので、おすすめでお願いします」

「え、困ったなあ……」

「おいしいお酒、飲みたいです」

「……まあ、おいしい肴は君が用意してくれた手前、ここは僕の腕の見  
せ所、か。」

「え？ 特段、これといったものは用意していませんけど……？」

「……誰とお酒、飲まれるんですか？」 だっけ……？」

「え？……っ!!??」

「まあ、” 教え子 ”、だね」

「……いじわる。」

## ひどい女、グラスワンダー

「君はひどい女だよねえ。」

その呟きを聞き逃すほど少女の耳は悪くなかったし、それが誰に向けて発された言葉か分からぬほど少女は愚かでもなかった。

「まったく……誰の話をされているんですか？」

しかし、机の向こう側にいる男にわざわざそう返してやっても、彼は机に両の肘をついておしほりをにぎにぎとしているだけだった。

“ 行儀が悪い。 ”

今までにしたことがないような注意を、今更どうして彼にしなくてはいけないのか。

「……やっぱり、ひどい女だよ、君は。どう考えても。」

おしほりを弄るのに飽きた彼の「ごつごつとした手が、今度は湯呑に伸びる。」

少女の細くしなやかな手も、困惑しつつそれに倣った。

「無責任だと思うよ。」

「私が、ですか？」

漸く視線を合わせてくれた男はそう言い放つと、湯呑を置いた。

口をつけることなく。

ことり。

どうやら、彼の湯呑は既に空だったようだ。

たった今持ったばかり湯呑に中身がまだまだ残っていた少女に残された行動といえば、その緑色の液体を少し減らすことぐらいだろう。

ことり。

うん。

おいしい冷茶だ。

目標レースの勝利を祝うために男が予約した、こぢんまりとはしているが風情ある茶屋。

注文した和菓子への期待も高まる。

「……それで、なぜ私は『ひどい女』と呼ばれなくてはならないのですか?」

少女は注文したみたらし団子を頭に浮かべなら尋ねる。

そういえば、男は抹茶パフェを注文していたっけ。

「自覚がないのかい?」

いたずらっぽく笑いながら茶化す男。

「ええ、ちつとも。」

「やっぱり、ひどい女だ。」

なかなか口を割らない男。

「お待ちどうさま。」

そんな折、店主が注文の品を持ってやってきた。

この初老の男性も、もったいぶる男に業を煮やしたのだろう。

きつと、そうに違いない。

グラスワンダーは礼を述べながら、そんなことを考えた。

「……だって、君は引退してしまっじゃないか。」

「え?」

彼女が空の湯呑を下げる店主の笑顔にしばし見とれていると、男は唐突に切り出した。

まるで、何かに嫉妬したように、

「引退、ですか……」

少女にとっては、まさしく寝耳に水というべきだろう。

だって、彼女は今まさに全盛期を迎えんとするウマ娘。

二人がこの茶屋になぜいるか、男の方は忘れてしまったのだろうか?

亜麻色の少女は、一番にゴールを駆け抜けたというのに。

「随分、突然ですね。」

「いや、全つ然突然じゃないね。」

パフエの上にちよこんと鎮座する栗の甘露煮を口に放り込みながら、男は自信満々に言い放つ。

「いいかい？君は、引退してしまっただよ？」

「ええ、いつかは……」

でも、それは誰でもでしょう？

そんな正論を言うことすら躊躇われる。

それほどまでに、彼の口調は力強かった。

「それが、無責任だと思ふのさ。」

からり。

氷がとける、涼しげな音が相槌を打ってくれる。

「君は引退するのさ。僕が泣こうが喚こうが。絶対に引退する。してしまおう。」

遠くから、太鼓を叩く音が聞こえてくる。

そういえば、この辺りで今夜夏祭りがあるらしい。

祭囃子、屋台の灯り……

でも、それもきつと、夜が明けてしまえばおしまい。

「ひどい話だよ、まったく。君を知らなければ、ただ有名なウマ娘が引退するだけ。そうとしか思わない。なんとも思わないさ。けど、僕は君と出会ってしまったからさ……」

なんとなく、話がつかめてきた。

「或いは、こんな思いをするくらいならいっそ、君と出会わなかったほうが幸福だったのだろうか？」

「……ふふっ。」

だが、あまりにもばからしい。

少女は、笑いを抑えられなかった。

「人がこんなにも苦しんでいるのに。……やっぱり君は、ひどい女に

「違くないや。」

「……すみません。あまりにも下らなかつたもので、つい……つぶつぶ。」

眉を寄せた男。

「乱暴にスプーンを突っ込まれたパフェのクリームが、悲鳴を上げてとろけている。」

「君は、走れない自分が怖くないの?」

「わかりません。」

そんなの、分かるはずがない。

きつと、その時になってみないと、分からない。

「ほら、やっぱり無責任じゃないか。」

「ひどい。私は賢人でも聖者でもありませんから。分からないものは分かりませんよ。」

からからと笑う少女は、年相応の“少女”そのものだった。

この152cmの少女は、レース場だと巨人のように見えるのに。

「僕が何をして、君はターフから去ってしまったっていうのにさ。」

「それは、仕方のないことでしょう。」

「あくあ。この先僕は、思い出に焼き付いた君の走りを反芻するしかないのに。そうやって、生きていくしかないのにさ。」

「今日はずいぶん、おしゃべりさんなんですね。」

「……ほつといてよ。」

「あらあら。話を始めたのはトレーナーさんですよ?しかも、開口一番に“ひどい女”だなんて。」

「ご機嫌な少女は、ようやっと団子に手を付ける。」

夏の積乱雲のように真っ白な団子の上には琥珀のような餡がかかっており、まるで一つの芸術品のようにキラキラしていた。

「……」

「……」

「ごめんなさい。トレーナーさん。」

「え、なにさ。」

「さつき、嘘、ついたかもしれません。」  
「どんな？」

しばしの沈黙ののち、今度は少女が切り出した。

「先ほどトレーナーさんが“走れない自分が怖くないか”と尋ねた時、私はわからないと答えました。」

「そうだね。」

「でも、改めて考えてみると、ちよつぱり怖いかもしれません。」  
「……そっか。」

「でも、きつと大丈夫です。」

「それは、なんでさ？」

「だって、楽しみができましたから。」

「楽しみ？」

「ええ。この長い長い人生を彩る、とっておきの楽しみ、です。」

「どんな？」

「貴方ですよ、トレーナーさん。」

「え？」

「だって、泣いてくれるのでしょ？喚いてくれるのでしょ？私のために。」

「え？……ああ……」

「私、とつても楽しみです。絶対、一生からかってあげるんですから。」

「……一生、か。」

「ええ、一生ですとも。覚悟してくださいね♪」

「はは……やっぱり君は、ひどい女、だね。」

一生をからかわれることになった男は苦笑してそう呟き、店主にお茶のお代わりを頼んだ。

だから少女も迷いなく、お代わりを頼むことにした。

グラスワンダーの足は、小さくてかわいい。

23・0と、23・5。

この数字を聞いてピンときた人はきつと、私のよき友に違いない。「もう一周、走ってきますね。」

「うん。分かった。」

彼女の足は、決して大きくないだろう。

だがどうだ。

緑の芝へ突き刺さる脚。シューズは沈み込んでいるようにすら見える。

なんと、力強い走りなのだろう。

ターフを駆ける彼女との距離は、かなり離れている。

にもかかわらず、どっ どっ どっ という音が体を震わせる。

そういえば以前、彼女と和太鼓の演奏を聞きに行ったっけ。

あの演奏は素晴らしかった。

自分の体の芯を直接揺らされているような、とてつもない衝撃を受けたものだ。

「……」

それと同じ衝撃を、今まさに感じている。

彼女が芝を踏みしめる音が、体を殴りつけている。

自分は決して、被虐趣味などではないと前置きしておこう。

今自分は、あの芝をうらやましく感じた。

彼女が自分の全体重を乗せて踏み抜き、鈍い音をたててちぎれたあの芝。

彼女の足音を最も近くで感じながら息を引き取るのも、存外悪くないかもしれない。

繰り返すが、自分に被虐趣味はない。

「はあっ………どう、………でしたか。」

乱れた息を整え、袖で汗を拭いながら尋ねられた。

いつの間にかあの音は止み、彼女のつま先はこちらを向いている。  
「ん……ああ……」

周囲では何人ものウマ娘がトレーニングをしているらしい。  
彼女の足音が聞こえなくなった今、他のウマ娘の足音がやけに大きく感じる。

正直、先ほどまでは全くといっていいほど聞こえていなかった。

「……君の足音しか、聞こえなかったよ。」

自然と、そんな言葉を発していたようだ。

「……えっ?」

「あつ。」

“口について出る”

そんな表現が、まさにふさわしかった。

自分は今、何と言ったのか。

「え……うあ、あの、トレーナさん?いま、なんと……?」  
ほら。

予想外の返答に、彼女も困ってしまったのではないか。

同意を求めるように周囲を見回すと、先ほどまではトレーニングに励んでいたウマ娘たちが目を丸くしてこちらを見ている。

ウマ娘は、耳がよいから。

「……」

「……」

大勢に見守られているこの状況は、なんだかばつが悪く感じる。  
何も悪いことなど、していないのに。

「……あく……君の足音しか聞こえなかったと、そう、言ったね。」

「そ、その心は……?」

「……君に見とれていた?」

すると、彼女の顔はゆつくりと赤くなっていた。  
まるで紅葉みたい。

今度、彼女と一緒にみじ狩りにでも行こうかしら。

「も、もう一周走ってきます!!」

「あ……いつてらっしゃい。」

周囲の「きゃーっ！」という歓声に応えるべく、彼女は走り出した。

「……うん。」

やはり、彼女の足音しか聞こえない。

黄色い歓声を向けられるのはどうもむず痒いから、ちようどよい。

◇◇

23・0と、23・5。

この数字を聞いてピンときた人はきつと、私と酒を飲もう。

「きれいですね〜」

「うん。やっぱり、来てよかったね。」

彼女の足音は決して大きくない。

どこかかと下品な足音を立てることは無く、いつも淑やかに歩いている。

足下に広がる紅葉をしやりしやりと踏む足は、なんだかちよつと申し訳なさそうだった。

なんと、優しい一歩なのだろう。

隣を歩く彼女との距離はいつもより少し近く、手と手が触れてもおかしくはない。

けれど、自分の鼓動はいつもと同じ、どつどつどつというリズムを刻んでいる。

そういえば以前、廊下で彼女が転びそうになったことがあったわけ。

あれはひやりとした。

剛健とは言えない自分でも、彼女の華奢な体を支えることができてよかった。

「わあ……」

そのときと同じ胸の高鳴りを、たった今感じた。

感嘆の声を漏らした彼女の声が、体をくすぐる。

自分は決して、少女愛の趣味はないと前置きしておこう。

今自分は、彼女の姿にときめいた。

真つ赤に燃える紅葉を背景に、手を伸ばす彼女。

歩を進める彼女が落ち葉を踏む音がきつと、この胸の高鳴りをかき消してくれるだろう。

繰り返すが、自分に少女愛の趣味はない。

「トレーナーさん？」

青い目がこちらを見上げ、不思議そうに尋ねてきた。

いつの間にか彼女は紅葉ではなく自分を見つめ、背伸びした彼女の踵は少し浮いていた。

「ん……ああ……」

周囲に人はなく、こちらを見るのは顔を真つ赤にした木々ばかり。

彼女が歩みを止めた今、自分の鼓動がやけに大きく感じる。

耳がよいウマ娘には、この心音も筒抜けなのかもしれない。

「……君の姿が、あまりに美しかったから。」

あえて、そんな言葉を発してみた。

「……えっ？」

“顔から火が出る”

そんな表現が、まさにふさわしかった。

自分の言葉が、新たな紅葉を生んだのだ。

「あ、あのっ。と、トレーナーさん？いま、なんと……？」

よし。

予想外の一言に、彼女は動揺している。

仲間が増えたぞ、と周囲の木々に目配せすると、先ほどまで静かだった木々はしやしやしやらと内緒話をしている。

秋風は、気持ちがいいから。

「……」

「……」

周囲に人がいなくてよかった。

きつと今の自分は、とんでもなく悪いことをしていたから。

「聞き間違いではないよ。君の姿があまりに美しいと、そう言ったんだ。」

すると、既に真つ赤な彼女の顔はさらに紅くなっていった。まるで信号機みたい。

こんな赤信号があれば、待ち時間を鬱陶しく感じるなどないだろうに。

「わ、わたし、ちよつと走つてきますー!」

「おつ……ここはターフじゃないし、危ないよ。」

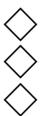
彼女が走り出すより前に、赤くなつた手を握りしめた。

風に吹かれた木々たちが、ざわざわ騒いでいる。

「……うん。」

やはり、彼女の手はぽかぽかだ。

自分も彼女も暑がりだから、涼しい秋風はちようどよい。



23・0と、23・5。

この数字を聞いてピンときた人はきつと、私と語らおう。

「すごい人出ですね。」

「さすが日曜日といったところだね。」

彼女の快足が、人混みで発揮されることはない。

レース中の力強い末脚を封印し、周囲の足を踏んでしまわぬよう、慎重に歩いている。

だが、彼女のパンプスから聞こえるのは慎重さだけではない。

足下に広がるレンガ調のタイルを踏む足はなんだか楽しげで、こつこつと鳴いている。

なんと、小気味よい歩調なのだろう

人の圧は想像以上で、隣を歩く彼女の肩はびつたりとくつついていく。

彼女と出かけるときはいつもこうなので、さほど気にならない。

そういえば、以前お出かけしたときは一緒にカラオケへ行つたっ

け。

あの一日を、鮮明に覚えている。

普段ははたくさんの観客に向けられている歌声を独り占めしたことに、一人のファンとしてちよつぴり罪悪感を覚えたものだった。

「今日は、どこへ行きましようか？」

そんな罪悪感を、今日も感じることになりそうだ。

自分だけに向けられた、楽しげで、うれしそうな声が体を駆け巡る。

自分には決して、悪気がない。

そう、前置きしておこう。

今日自分は、彼女を独占するのだ。

強く、淑やかで、凜とした大和撫子。

多くのファンを抱える彼女を独占することへ罪悪感はあるけど、それを軽く凌駕する喜びもまた、同時に感じる。

繰り返すが、自分に悪気はない。

「もう、聞いているのですか？」

少し咎めるような口調で、彼女は尋ねてきた。

いつの間にか信号が立ちふさがり、一回り小さな足は自分の足と並んでいた。

「ん……ああ……」

周囲の人は信号を待つ時間すら惜しんで、手元の画面を見つめている。

足止めを食らった彼女が待っているのはどうやら、自分の返答らしい。

騒がしい街の中で、彼女の耳は自分の言葉を聞こうと集中している。

「……靴でも、見に行くかい？」

どうしても、その言葉をかけたかった。

「靴、ですか？」

“ 鳩が豆鉄砲を食ったよう ”

そんな表現が、まさにふさわしかった。

きよとんとした彼女の表情が、いやに愛らしい。

「シューズは、先日購入しましたよ……う？」

うん。

予想外の提案に、彼女は不思議そうだ。

周囲を見やると、人々は再び歩み始めた。

手元ばかり見ていると、青くなった信号にすら気づかないから。

「君に贈りたいんだ。シューズではなく、普段使いの靴でもいい。日ごろ頑張っている愛バを、少しは甘やかしたいんだ。」

「……学生と教育者が、そういうことをするものではありませんよ。」

少し照れくさそうに頬を赤くしながら、彼女は言った。

雑踏の中で自分の耳が感じるのは彼女の声。

それと、彼女の軽やかな足音だけだった。

「……うれしいです。」

「どういたしまして。」

「でもそれは、また次の機会に。」

「それは残念。」

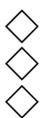
「いつも頂いてばかりでは、私も納得できませんから。」

周囲よりも少し速度を上げた彼女に置いていかれないよう、少し大きく足を踏み出す。

「……うん。」

人混みにあわせていると、きっと日が暮れてしまう。

少し速足ぐらいが、彼女と過ごす時間にはちようどよい。



23.0と、23.5。

この数字を聞いてピンとくる人はもしかすると、少ないのかもしれない。

しかし、23.0と、23.5。

そんな数字の靴を持ち、帰路に就く。

今も昔も、私の耳に届く足音は23.0と23.5。

決して大きくはないその足も、足音も。

「ただいま。」

開けた我が家のドアの向こう。

ぺたぺたという小さな足音が、近づいてくる。

「おかえりなさい。」

きつとそれは、2 3 . 0 と、2 3 . 5 。

いつか贈りそびれた靴が似合う、かわいらしい足。

けっこう大きめの鼻歌をがつつり聞かれていたグラスワンダーと、レースの映像を何度も巻き戻す羽目になるグラスワンダー

「けっこう大きめの鼻歌をがつつり聞かれていたグラスワンダー」

「……………別に、恥ずかしがることではないんじゃないかなあ……………」

「……………」

部屋に、一人。

なんてことはない状況のはずなのに、普段よりも大胆になってしま  
うのはなぜなのでしょうか。

偉い学者さんたちは、この現象に名前を付けていないのかしら？  
そんなことを考えてしまいます。

「いや……………なんというか、味わい深かったよ、うん。グラスもそういう  
ことするんだなくって感じでき。いや、ホント。」

「……………」

言い訳をしているかのような彼。

一体、どんな表情をしているのでしょうか？

うつむいて恥辱に耐えるばかりの私にはわからぬことではありま  
すが。

「いや、僕も一人のときはしちゃうと思うなく」

「……………」

鼻歌をしても一人。

いや、語感が悪いですね……………」

……………鼻歌ロシリネス？

どうか、そこから何も聞けなくなつてほしい。

「うん……………ふっ。あつ、いや、分かるよ。……………ね。テンション上がる  
と、ね。……………ぶっ……………体を揺らしながら……………ね。一人だと、つい、ね  
？」

「……」

一人だったなら、こんなことにはなっていないんですけれども。  
やんぬるかな。

「ふふふっ……くっ。ノリノリで……指パッチンして……」

「……」

……ふふふっ。

何故でしょう。

自嘲気味なこぼれるのは。

「……ねねっ、もっかい！もっかいやってよ!!最初から！」

「……」

「最後の“いえうい”も忘れずに!!……あっ！今度は動画も回している？このかわいいグラスは黄金世代にも共有すべ……いてっ！」

尻尾一閃。

私が受けた心の傷は“ぺちっ”程度では済みませんが、今日はこれくらいで勘弁してあげます。

それにしても。

全部聞き終えた上で声をかけるなんて、極悪非道だとは思いませんか？

【レースの映像を何度も巻き戻す羽目になるグラスワンダー】

「……うん。」

「……どう、走るべきでしょうか。」

レース映像とは何も、自分の走りを振りかえるためだけにあるので  
はありません。

ライバルの走りを見てその対策を練ることもできるのです。

「……」

「……」

レースさながらの、張り詰めた雰囲気。

画面の一点を見つめるトレーナーさんの目は真剣そのもので、話しかけるのを少し躊躇うほどです。

「……………ふう。」

「……………トレーナーさん。」

溜めた息を絞り出し、背もたれに体重を預けた彼。

眉間を指でぐりぐりとすること、思考をまとめているのでしよう。

前回勝利したレースで、凄まじい食らいつきを見せた彼女。

そんな彼女との再戦。

準備も入念になるというものです。

「……………うん。」

「！」

満足げにうなずく彼。

……………彼と一緒にならば、どんな困難も乗り越えられるでしょう。

「では、次の作戦を……………」

彼の慧眼は、どんな作戦を——

「ん？作戦??」

「え??」

「……………」

「……………」

「え?」

「えっ?」

……………私に変なことを尋ねているかのような雰囲気なのはなぜでしょうか?

「何言ってるのこの子?」みたいな表情をされるのは、非常に不本意です。

「トレーナーさんが言ったんじゃないですか、」あの子のレース映像を見て研究しよう”って。」

「……………あー!!うん!そう、そうだよね!」

言うや否や、慌てた様子でリモコンを手にとっておもむろに映像を

巻き戻し始める彼。

先ほどの張りつめた緊張感はどこへやら。

リモコンをぼちぼちする彼は、1分前の彼と本当に同じ人物なので  
しょうか？

「あの……」

「……な、なにさ。」

「そんなに慌てて巻き戻しているのは……その、なぜですか？」

何度も見返すこと自体は不自然ではありません。

しかし、彼の様子は何というか……

あまりにも、変。

そう表現するほかないでしょう。

「……………から。」

「え？」

彼の掴むリモコンにそっと手を重ね合わせ、じっと目を見つめる。

しばらく目をきよろきよろと泳がせていた彼でしたが、観念したの  
かようやつと言葉を絞り出しました。

「……………あの子の走りを、見ていなかったから。」

「は？」

……………

彼は何と言ったのでしょうか？

「いやいや、彼女2着でしたよ？私と終盤競り合う映像……どアップ  
ですよ、どアップ。」

自分の口調が崩れているような気もしますが、それどころではない  
でしょう。

見ていなかった？

では、先ほどの真剣な眼差しは何??

「し、仕方ないだろ！君が走っているのが見えたら、ついそつちに注目  
してしまうんだから！」

「はえっ?!」

「…………」

「…………」

「あ、あかくなりながらいっても、ごまかされないんですからね……」  
「そう言うグラスこそ、なんで赤くなってるのさ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……もう一回、流すね。」

「次こそはちゃんと、見てくださいよ……」

……返事はありませんでした。

『——第3コーナーを回って』

再び流されるレース映像。

彼の瞳には、何が映っているのでしょうか？

……。

……。

いけません……

何度も見返したとはいえ、レースの映像を見ると気分が昂ってしまいますね。

乾いたトレーナーの唇にリップを塗ってあげる、優しいグラスワンダー

最近、リップクリームを買ったんです。

普段の使っているものよりちよぴり高くて、大人びていて。

みんなとお買い物に行ったときに入ったおしゃれな化粧品店で、買ったんです。

11月になって急に空気が乾燥してきたので、買ったんです。

でも、使い始めるタイミングを逸してしまっ……

気づけばもう、12月も半ばですね。

……共感してくれると、とてもうれしいです。

ちよぴり高級ですし……何より、みんなで買ったおそろいのものだから。

なんだか飾っておきたくなってしまっ……

ふふ。

でも、エルはもう1/3くらい使っていましたっけ。

はやすぎ、ですよね。

「……なぐんて。」

「独り言を言ったところで、誰が聞いているわけでもないですが。」

「……ねえ、トレーナーさん？」

昼下がりのトレーナー室では、彼がゆっくりと船をこいでいました。

激務のトレーナー業。

どれほど疲れているのでしょうか。

そんなものは、指導を受けている私が一番、分かっています。

「たづなさん、呼んじやいますよ〜っ。」

それを分かっているにもなお、ちよっぴり意地悪をしたくなってしまうのはなぜでしょう？

ぽしよぽしよ囁くと、彼はこくりこくりと、首を縦に振って返してくれました。

「ふふふっ。呼んでしまってもいいんですか〜？」

もちろん、彼に意識がないことくらい分かっています。

そんな彼に話しかけ続ける私は、悪い子なのでしょうか？

……いえ、そんなことはないはずです。

だってほら。

彼はこんなにも幸せそうな寝顔を見せてくれているのですから。

「……」

どんな夢を、見ているのでしょうか。

今、貴方の隣にいる人を。

その人の夢を見てくれていたら、うれしい。

けれど。

「最近、仲が良すぎではありませんか〜？」

脳裏にちらつくのは、緑色の影。

呼ぶと言ったのは自分だけれども。

彼女が来るのは、ちよっぴり、嫌かもしれない。

「……拗ねちゃいますよ〜っ。」

でも、彼女が来て困るのは私だけではないから。

その点では、彼とおそろい。

職務中に寝落ちしてしまった悪いトレーナーさんが叱られているのを見たとして、この胸のモヤモヤは晴れないでしょう。

「もしも〜っ。」

……。

起き、ませんね。

起きないで、ください、ね？

あと、ほんの少しだけで、構いませんから。

「このリップの封を切るべきは、今が相応しいと思いませんか？」  
ぴりっ。

きゅぽっ。

……こんなくだらない音で、彼が起きませんように。

「……唇のケアって、大切ですよ。女性って、意外と見てるんですから。」

彼の少しがさつく唇を、人差し指でなぞる。

「……」

なけなしの潤いを、私の指がかつさらってしまったらしい。

親指と人差し指の腹をこすり合わせ、彼のうるおいを馴染ませてみる。

「……いい子ですから。こっち、向いてくださいね。」

……

……

……

がたん、という衝撃で目を覚ます。

「あ……ん……？」

どうやら、寝落ちしてしまっていたらしい。

「……『ジャーキング』というらしいですよ。」

やけに聞き馴染みのある声が、寝起きの体に溶け込んでゆく。

「……あ……ぐらす。」

「はい。貴方の担当、グラスワンダーですよ。おはようございます、ねぼすけなトレーナーさん♪」

「……おはよう………!!ごめん、グラス!?今何時!?!」

徐々に覚醒してきた意識が、一気に呼び覚まされる。

まるで、冷や水をぶっかけられたみたいだ。

「そんなに慌てないでください。大丈夫、私も今来たところですから。」

時計を見ると、トレーニングの開始までもう少しの猶予があった。

「……焦ったあ〜。」

大げさに首を振る自分を見て、からから笑う担当。

「随分、お疲れのようですね。」

「大したことはないよ………たづなさんには、内緒で、ね?」

「そんなことを心配なさっていたのですか〜わかりました。私とトレーナーさんの秘密、ですね〜♪」

いつそう笑いを深める担当を見て、安堵のため息が出る。

よかった。

どうやら、怒ってはいないらしい。

彼女を怒らせると、けっこう怖かったりするから。

「と〜ころで。」

「?」

「トレーナーさんは眠るとき、何を着ているんですか?」

「???」

と〜ころで。

話題を変えるときに使う言葉。

だとしても、脈絡がなさすぎる気がする。

「えっと、ごめんよグラス。何かのクイズかな?」

そう返しても、栗毛の彼女はにこにこするばかり。

「もしかして、怒ってる?」

「いいえ、ちっとも。」

そう聞きはしたものの、彼女から怒気を感じることはできない

すると、ますますわからない。

「何かの言葉遊びかな？」

「さて〜？」

「ふむ…………？」

寝起きの頭でいつちよ前に考えてみても、彼女の質問に対する答えは浮かんでこなかった。

「ふふっ。すみません。何のことやら、ですよね。」

「申し訳ないが…………で、答えは？」

そう尋ねると、彼女は一瞬、逡巡した。

「…………シャネルの5番。」

「え？」

ひよつとすると、かのマリリン・モンローの名言だろうか？

…………だとしても、よくわからない。

「ふふっ。すみません。私も、何だか寝ぼけてしまっていました〜」

「え？うん？」

「では、トレーニングに向かいますよう〜♪」

「…………分かった。」

釈然としない。

が、彼女がご機嫌なら、それもまたよしとしよう。

…………シャネルの5番だなんて、そんなたいそうなものではないけれど。

「……………」

今夜身に纏うものは、このリップだけで十分かもしれない。

……いや。

彼との秘密も一緒に着こんだら、師走の夜も温かいに違いない。

自分の名前を書いてもらうことにはまったグラスワンダー

きっかけは、本当に偶然だったんです。

「あら？」

レース関係の提出書類は意外に多く、そのほとんどに名前を書くことが求められます。

人生で最も多く書くであろう、“グラスワンダー”という文字列。だけど……いえ、だからこそ。

その一文字一文字を丁寧に書いていきたい。

「……？」

しかし、手元に戻った書類を見ると違和感があります。

見慣れている字だけれど、なぜか感じる違和感。

「あ。」

小首を傾げた私を、トレーナーさんは見逃しません。

「ごめん。その書類のグラスの名前さ、僕が書きちゃったんだ。」なるほど。

いつもとはちよっぴり違う。“「r b:グラスワンダー」> 私の名

前」”。

これは、彼の筆跡だったのですね。

どおりで。

下にある彼の名前を表す文字と瓜二つ。

ということは、つまり……？

「あの……もしかして私、名前を書き忘れていましたか……？」

「え？まあ、そうだね。」

「……大変申し訳ございませんでした。」

「わわっ!?ちよっつ、ぐら、グラス?土下座しようとししないで?!?!」

あまりにも、情けない……

大和撫子の姿でしょうか、これが?

先ほどまで偉そうに「一文字一文字を丁寧に書いていきたい……」

なんて考えていた自分を白装束で座らせ、介錯をしてやりたいくらいです。

その後、私もトレーナーさんに介錯をしてもらうのです。ん？

「落ち着いてっつてば……大げさすぎるよ……」

「しかし……」

「頑固者！本人の署名が必要なわけじゃないんだから大丈夫！はい！この話おしまい!!」

トレーナーさんが子どものように振る舞っているのは、私に気を遣わせないようにあえてでしょう。

ならば、その好意を無下にすることこそが彼に対する非礼というものの。

だから、私が言わなくてはいけないのは。

「……ありがとうございます、トレーナーさん。」

「……まったくもう、大げさだっつてば。」

そんなことがあったのが、つい先日の話。

その時、私は言ったのです。

“次からは気を付けます”と。

しかし。

しかしですな……

「……」

この、たった一枚の紙とのにらめっこ。

私はこれを、いつまで続ければよいのでしょうか。

たったの7文字。

この7文字が記されている、A4の紙。

それなのに。

それだけのはずなのに……

「何してるデース？」

「!?え、エル!？」

思わず、紙を裏返してしまふ。

我ながら、なかなかの瞬発力。

ゲート練習の賜物ですね。

……ぐしゃりと、折り目が付かなくてよかった。

「それ、この間提出した書類デス？なんでそんなに……えーと？ボケツ？があくほど？見つめてるデス？」

「そうは間違えないでしょう……？それを言うなら、“穴があくほど”ですよ。」

「そうとも言いマス。」

未だ慣用句を使いこなせない同室の間違いを訂正しつつ、何食わぬ顔で書類を引き出しに戻します。

「なんで隠すデス？」

「……別に、隠してなどいませんよ。以前、この書類を提出するとき名前を書き忘れたものですから。気を付けなければと思っていただけです。」

「ふーん？」

どこかで聞いたことがあります。

嘘をつくときには真実を織り交ぜると効果的、と。

……いえ。

別に、私が嘘をついているとか。

そういうのでは決してありませんけれど。

「エルも気を付けてくださいね？」

「……」

そう、話題を終わらせようとしたとき――

「……そんなに気に入ったデスか？」

「!？」

「凶星、デスね？」

まるで名探偵のようなことを彼女が言うものですから。

私のしつぽやら耳やはぴんと伸び、そのまま硬直してしまったのです。

「……何故、分かったのですか。」

「だって、グラスがその引き出しに入れてるのは大切なものデス。もらったファンレターとか、そこに入れてるの何度も見てマス。」

「……」

「……さすが、ライバルといったところででしょうか。」

「で、どうなん德斯?」

そう言うと、エルはベッドに深く腰掛けました。

この話を終わらせる、もとい私を逃す気はさらさらないようです。

「自分の名前は、一番見慣れた文字のはず、なんです。」

「ふむふむ?」

「でも、彼が……トレーナーさんが書いてくれただけで、なんというか、その。胸がじんわりあたたかくなると言いますか。」

「德斯德斯?」

「ずっと見ていられると言いますか……」

「ホホウ?」

「くっ!とにかく、そんな感じなんです!もうっ!」

「ナルホドく。〃怪物〃なくんて呼ばれるグラスも、こうなってしまうばただの生娘德斯ね!」

「生娘ですよ……エル……覚えておいてくださいね……」

「アーツハツハツハツ!愉快愉快デース!」

「くっ……」

口惜しいですが、今回は私の負けです。

それにしても、彼女がこんなにも鋭かったとは……

「なくんにも分かってないエルに、ベラベラ全部話してくれるとは!!」

「え?」

「ちよつとカマをかけたらこれ德斯!グラスチヨロイデース!」

「……」

「こんなにチヨロイのがライバルだなんて失笑ものデース!次回のレース、エルが頂いたも同然德斯ね!」

「……なるほど。」

なるほどなるほど。

どうやら、エルが言っていたことは正しかったようです。

確かに私は、墓穴を掘っていたみたいですよ♪

……



十文字に満たない名前。

それを書くのに、どれくらいの時間を要したかは分からない。けれどきつと、今までで一番丁寧に書いた……はず。

「……」

あとは、トレーナーさんに提出すれば、おしまい。

今回は忘れなかった。

さすがに二回連続で名前を書き忘れるなど、大和撫子としてあつてはならないから。

……名残惜しさは、あるけれど。

◇◇◇

「失礼しますね、トレーナーさん。」

「えっ? グラスっ!?!」

昼休憩の時間にトレーナー室の扉を開くと、やけに焦った彼がそこにいた。

Yシャツの袖をまくって、いかにも“作業中”な見た目。何をしているのでしょうか?

「わ、わ……!」

わたわたと机の上のものを片付けようとする彼。

「それは……お皿? ですか?」

やけに大きな白い皿。

トレーナー室には不釣り合いな、大きな皿。

「来るなんて聞いてないよ……」

隠すのは無理と悟ったのか、恨めし気な視線を送る彼。なにをしているのでしょうか……?」

「……えっ?」

「あ〜……もう……」

しょんぼりした彼の手元を見ると、チョコペン。

「まあ……」

お皿の上には、これでもかというくらいに「「r b : グラスワンダー」私の名前」〃 が書いてありました。

「……今度、グラスの誕生日に。」

私が何も言葉を発さなかったためか、彼はぼそぼそしゃべり始めます。

「ケーキをさ、贈ろうと思ったんだ。手作りはできないけれど、少しでも、何かしたくて。」

グラスワンダー

グラスワンダー

文字の大きさは、ばらばらで。

「チョコプレートの上の文字くらいは、書きたくて。〃 グラスワンダー お誕生日おめでとう〃 って、祝いたくて。」

ところどころ文字はつぶれててしまっている。

「それで、練習してたんだ。」

市販の。

パティシエさんが書いてくれるものと比べれば、それはもう不格好だけれど。

「……ふふっ。」

「……笑わないですよ。」

文字の巧拙を笑ったわけではなくて。

……なんだか心がじんわりとあたたかくて、まるで私の心までチョコプレートになってしまったみたい。

「サプライズの予定だったんだけどなあ……」

「ありがとうございます、トレーナーさん。とっても嬉しいです。」

「僕は複雑な気持ちだよ……」

甘く、優しくとろけて。

「まだ、練習されるんですか？」

「え？まあ、そうだね。」

「よろしければ、隣で見ても？」

「……いいけど、さ……なんだろうね、この状況は。」

黙々と“グラスワンダー”を描き始めたトレーナさんを、この目に焼き付けながら。

私は二人分の名前が書かれた書類を、そつと机の端に置きました。